山口県埋蔵文化財センター調査報告　第62集

真尾猪の山遺跡

２００７

財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第62集

真尾猪の山遺跡

（まなおいやま）

２００７

財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

山口県の中央部を流れる佐波川は、県内有数の河川であるとともに、防府平野をはじめとする下流域は、古来からさまざまな歴史の舞台となり、多くの史跡が所在します。このように歴史を育んできた佐波川でありますが、中流域については、考古学的調査は十分といえず、不明な点が多くありました。

こういった中、農免農道整備事業牟礼小野地区建設工事が計画されたことから、それに伴って平成16年度に防府市大字和字内の井ノ山遺跡の発掘調査を財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。調査では弥生時代の集落跡が確認され、佐波川中流域の代表的な遺跡として大きな成果がありました。

今回、井ノ山遺跡に引き続いて、農免農道整備事業に伴い防府市大字真尾地内に所在する真尾猪の山遺跡発掘調査を、当財団が実施しました。調査の結果、弥生時代中期の集落跡が確認され、そこからは弥生土器、石器、鉄器といったさまざまな遺物が多く発見されました。これらの遺構遺物は当時の人々の暮らしを具体的に物語るものであり、前回の井ノ山遺跡の成果とともに、当地域の歴史を考える上で欠くことの出来ない資料といえるでしょう。

本書はこの発掘調査成果をまとめた記録であり、広く埋蔵文化財に対する認識や理解のため、また歴史研究の資料として活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきましたことに対し厚くお礼を申し上げます。

平成19年３月

財団法人　山口県ひとづくり財団
理事長　　村岡　正義

例　　言

1　本書は、平成18年度に実施した、真尾猪の山遺跡（山口県防府市大字真尾地内）の発掘調査報告である。

2　調査は、農免農道整備事業牟礼小野２期地区建設工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が山口県山口農林事務所の委託を受けて実施したものである。

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター	
調査担当	文化財専門員	谷口　哲一
	〃	吉中　雅信
	〃	森下　穏雄
	〃	川本　晃
	調　査　員	山本　寛子

4　調査にあたっては、山口県教育委員会、防府市教育委員会、山口県山口農林事務所および地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の第１図は国土地理院発行の２万５千分の１地形図「矢田」を複製使用した。

6　本書中の方位は国土座標（世界測地系）の北で表示し、標高は海抜標高である。

7　本書に使用した土色の色調標記はMunsell方式による（農林水産省農林水産技術会議事務局『新版標準土色帳』参照）

8　図版中の遺物番号は実測図の遺物番号に対応する。また遺物実測図において、断面黒塗りは須恵器をあらわす。

9　石器の石材鑑定（表面観察）については、山口県立山口博物館　亀谷　敦氏、輸入磁器については山口県立萩美術館・浦上記念館副館長　上田秀夫氏から御教示を得た。

10　本書中で使用した遺構略号は次のとおりである。

竪穴住居跡－ＳＢ　　土坑－ＳＫ　　溝状遺構－ＳＤ　　柱穴－ＳＰ

11　本書の作成および執筆は谷口、吉中、森下、川本、山本が分担して行い、編集は谷口が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の経過 …… 3
Ⅲ　調査の成果 …… 9
　1　遺　構 …… 9
　　（1）Ⅰ地区 …… 9
　　（2）Ⅱ地区 …… 28
　　（3）Ⅲ地区 …… 34
　2　遺　物 …… 35
　　（1）縄文時代の土器 …… 35
　　（2）弥生時代の土器 …… 37
　　（3）古代以降の土器、陶磁器、瓦 …… 47
　　（4）土製品 …… 47
　　（5）石器 …… 50
　　（6）骨角製品 …… 51
　　（7）鉄器 …… 53
Ⅳ　まとめ …… 57

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（西から）

図版２　遺跡近景（南から）

図版３　上：調査区全景　下：Ｉ地区全景（西から）

図版４　上：Ｉ地区ＳＢ１　下：Ｉ地区ＳＢ２・３と流路跡

図版５　上：Ⅱ地区全景（北西から）　下：Ⅲ地区全景（西から）

図版６　上：ＳＢ１完掘状況（西から）　中右：ＳＢ１鉄器出土状況（西から）
中左：ＳＢ１土器出土状況①（西から）下右：ＳＢ１土器出土状況③（西から）
下左：ＳＢ１土器出土状況②（南西から）

図版７　上：ＳＢ２完掘状況（西から）　中：ＳＢ２完掘状況（南から）
下左：ＳＫ25完掘状況（西から）　下右：ＳＫ26完掘状況（西から）

図版８　上：ＳＢ３完掘状況（西から）　中：ＳＢ３完掘状況（北から）
下左：ＳＢ３土器出土状況（北から）　下右：ＳＢ３作業台検出状況（西から）

図版９　上：ＳＢ４完掘状況（西から）　中：流路跡東側柱穴群（南から）
下：ＳＫ９周辺柱穴群（北から）

図版10　左１：ＳＫ４・５・６・14完掘状況（西から）右１：ＳＫ３完掘状況（西から）
左２：ＳＫ11完掘状況（北から）　右２：ＳＫ28完掘状況（北から）
左３：ＳＫ20完掘状況（西から）　右３：ＳＫ13完掘状況（西から）
左４：ＳＫ15完掘状況（南から）　右４：ＳＫ10土器出土状況（南から）

図版11　左１：ＳＫ７・８完掘状況（西から）　右１：ＳＫ７土器出土状況（西から）
左２：ＳＫ18・24完掘状況（北から）　右２：ＳＫ９・16完掘状況（西から）
左３：ＳＫ17完掘状況（西から）　右３：ＳＫ22完掘状況（西から）
左４：ＳＫ23完掘状況（西から）　右４：ＳＫ19完掘状況（東から）

図版12　上：流路跡（北西から）　下：流路跡東半（西から）

図版13　上：流路跡遺物出土状況（北から）　中右：流路跡土器出土状況②（北から）
中左：流路跡土器出土状況①（北から）下右：流路跡土器・紡錘車出土状況（北から）
下左：流路跡土器出土状況③（西から）

図版14　上：谷部全景（南東から）　下：谷部石列検出状況（西から）

図版15　上：谷部遺物出土状況（南から）　中右：谷部土器出土状況②（西から）
中左：谷部土器出土状況①（東から）　下右：谷部土器出土状況④（北東から）
下左：谷部土器出土状況③（東から）

図版16　左１：集石遺構調査前（北から）　右１：集石遺構検出状況①（北から）
左２：集石遺構検出状況②（西から）　右２：集石遺構検出状況③（東から）
左３：集石遺構土層断面①（南から）　右３：集石遺構土層断面②（東から）
左４：ＳＤ２・３・４完掘状況（東から）右４：ＳＫ29・30完掘状況（西から）

図版17　上：Ⅱ地区完掘状況（南西から）　中：Ⅱ－１地区完掘状況（南から）
下：Ⅱ－２地区完掘状況（南西から）
図版18　左１：Ⅱ－１地区包含層完掘状況（北から）　右１：Ⅱ－１地区土器出土状況①（北から）
左２：Ⅱ－１地区溝状遺構（北から）　右２：Ⅱ－１地区土器出土状況②（東から）
左３：Ⅱ－１地区トレンチ土層断面（西から）　右３：Ⅱ－１地区トレンチ完掘状況（西から）
左４：Ⅱ－２地区ＳＫ群（西から）　右４：Ⅱ－２地区東壁土層断面（西から）
図版19　上：Ⅲ地区近景（南から）　下：Ⅲ地区完掘状況（南から）
図版20　出土土器①
図版21　出土土器②
図版22　出土土器③
図版23　出土土器④
図版24　出土土器⑤
図版25　出土土器⑥
図版26　出土土器⑦
図版27　出土土器⑧
図版28　出土土器⑨
図版29　出土土器⑩・瓦・土製品
図版30　出土石器①・骨角製品
図版31　出土石器②
図版32　出土石器③・鉄器

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 1
第２図　調査範囲図 …… 5・6
第３図　Ⅰ地区遺構配置図 …… 7・8
第４図　Ⅰ－１地区土層断面図 …… 10
第５図　Ⅰ－２地区土層断面図 …… 11
第６図　ＳＢ１実測図 …… 12
第７図　ＳＢ２・３実測図 …… 13
第８図　ＳＢ４実測図 …… 14
第９図　Ⅰ地区ＳＫ実測図（１） …… 16
第10図　Ⅰ地区ＳＫ実測図（２） …… 17
第11図　Ⅰ地区ＳＫ実測図（３） …… 19
第12図　Ⅰ地区ＳＫ実測図（４） …… 21
第13図　谷部石列実測図 …… 23

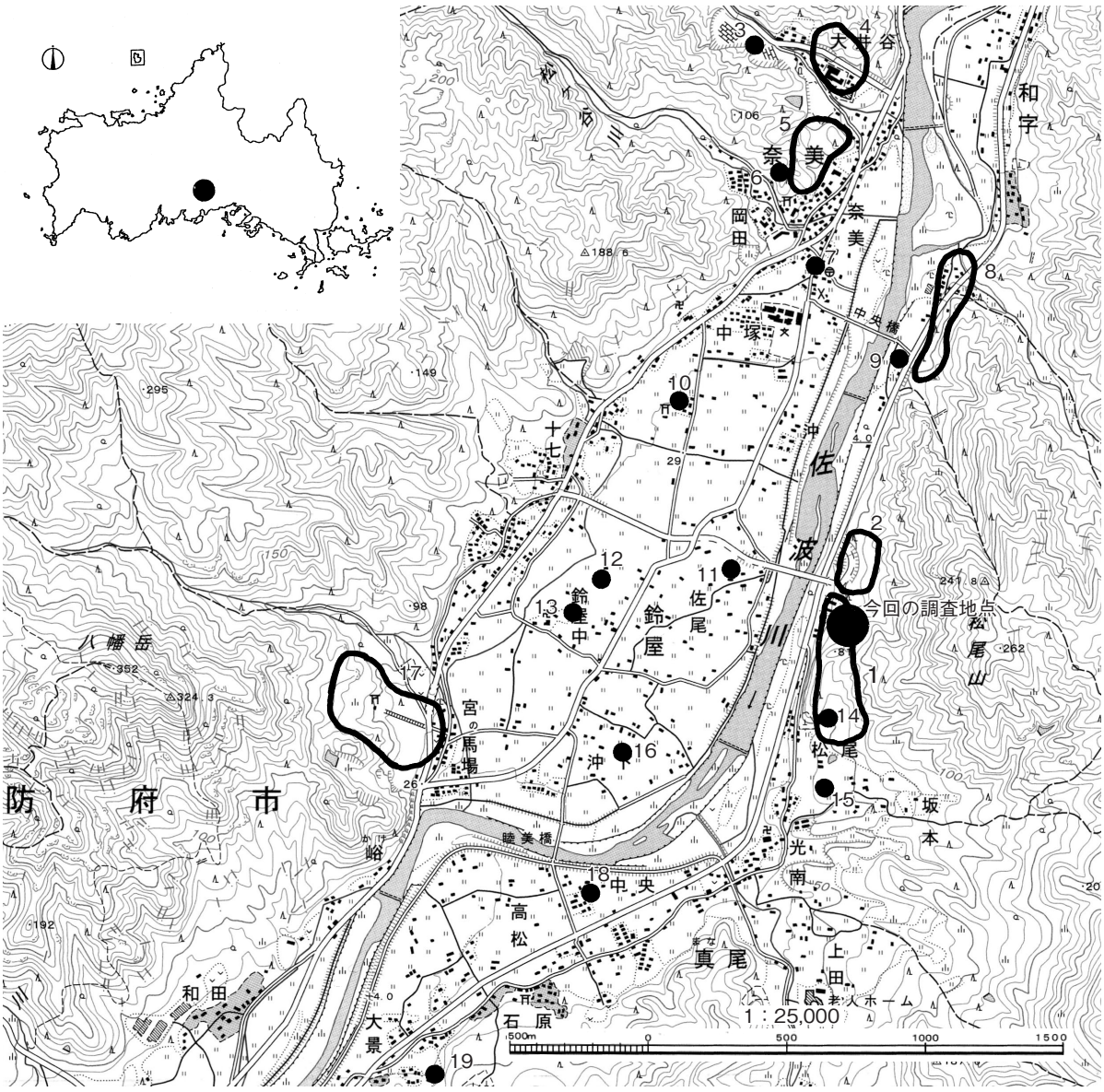
第14図　谷部土層断面図 ……………………………………………… 24
第15図　流路跡実測図………………………………………………… 25
第16図　流路跡土層断面図…………………………………………… 26
第17図　集石遺構実測図 ……………………………………………… 27
第18図　Ⅱ－１地区土層断面図（１）……………………………… 28
第19図　Ⅱ地区遺構配置図…………………………………………… 29
第20図　Ⅱ－１地区土層断面図（２）……………………………… 30
第21図　Ⅱ－２地区土層断面図……………………………………… 31
第22図　溝状遺構実測図 ……………………………………………… 32
第23図　Ⅱ地区ＳＫ実測図…………………………………………… 33
第24図　Ⅲ地区遺構配置図…………………………………………… 34
第25図　出土土器実測図（１）……………………………………… 35
第26図　出土土器実測図（２）……………………………………… 36
第27図　出土土器実測図（３）……………………………………… 37
第28図　出土土器実測図（４）……………………………………… 37
第29図　出土土器実測図（５）……………………………………… 38
第30図　出土土器実測図（６）……………………………………… 39
第31図　出土土器実測図（７）……………………………………… 40
第32図　出土土器実測図（８）……………………………………… 42
第33図　出土土器実測図（９）……………………………………… 44
第34図　出土土器実測図（10）……………………………………… 45
第35図　出土土器実測図（11）……………………………………… 46
第36図　出土土器実測図（12）……………………………………… 48
第37図　出土土器実測図（13）……………………………………… 49
第38図　出土土器実測図（14）……………………………………… 49
第39図　出土土器実測図（15）……………………………………… 50
第40図　出土土器実測図（16）・瓦実測図 ………………………… 50
第41図　出土土製品実測図…………………………………………… 51
第42図　出土石器実測図（１）……………………………………… 52
第43図　出土石器実測図（２）……………………………………… 53
第44図　出土石器実測図（３）……………………………………… 54
第45図　出土石器実測図（４）……………………………………… 55
第46図　骨角製品実測図 ……………………………………………… 56
第47図　出土鉄器実測図 ……………………………………………… 56

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境（第１図）

真尾猪の山遺跡は、防府市の大字真尾地内に所在する。県央に位置する防府市は、小起伏面を残す高原上の周防山地から流れる佐波川の堆積作用によってできた県下最大の平野をもつ。真尾猪の山遺跡は、その防府平野から佐波川を７km遡る中流域左岸の丘陵緩斜面上に位置する。

遺跡から見下ろす中流域は、西の八幡岳、東の松尾山、南の矢筈ヶ岳、北の山口尾に囲まれた比較的狭い谷底平野となり、一帯は小野地区と呼称されている。佐波川は、周辺に風化の激しい花崗岩地帯が広がり、河床勾配が比較的急なため、氾濫性の「荒れ川」となり、たびたび土砂崩れや洪水などの災害を引き起こすとともに、河道の変遷を繰り返した。また流域には、小扇状地が形成され、緩やかな傾斜の丘陵地が発達している。



1．真尾猪の山遺跡　2．井ノ山遺跡　3．大井谷遺跡　4．小野中学校敷地遺跡　5．奈美松ヶ谷遺跡
6．奈美松ヶ谷古墳　7．岡田遺跡　8．下和字遺跡　9．下和字石棺　10．宮の前遺跡　11．炭頭・角頭遺跡
12．合三郎遺跡　13．大歳遺跡　14．井手山古墳群　15．松尾遺跡　16．大将軍遺跡　17．鈴屋八幡宮遺跡
18．五反田遺跡　19．大景遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

遺跡地「真尾」の地名は､「長尾（なだらかにつづく長い尾根）を曳いて山脚を佐波川の碧波に洗う」と記す「防長地名淵鑑」の解意のごとく、その秀麗な尾根の景観に由来する。

小野地区には、古くから人々が住み、佐波川の氾濫災害から逃れつつ、この緩斜面上に居を求めた。また、丘陵地帯の上方には小高い山や見晴らしの良い台状地もあり、それらの個所より弥生土器や見張り小屋の柱穴らしき遺構なども散見され、防御機能をもつ集落の存在が知られるところである。

２　歴史的環境

真尾猪の山遺跡の所在する小野地区は、今日まで旧石器時代の遺跡は発見されていないが、もっとも古い遺跡として、小野中学校敷地遺跡がある。この遺跡からは、縄文時代早期の押型文土器と晩期の粗製・精製土器片が数点でているが遺構は確認されていない。同じく縄文時代の遺跡として下和字遺跡と､先年の発掘調査で明らかになった井ノ山遺跡がある｡左岸にあるこの遺跡は山裾に長く広がっており、川沿いの山裾に縄文時代の住居が点在していたことを示す。

稲作が本格的にはじまり、人口が増加する弥生時代になると、さらに居住範囲が広がってくる。右岸では奈美松ヶ谷遺跡、鈴屋八幡宮遺跡、左岸では先述の井ノ山遺跡と真尾猪の山遺跡が広がりを見せ、丘陵地沿いに展開し大景遺跡へとつづいている。井ノ山遺跡においては、希少な弥生時代の青銅製の鑿が発見され、この地の遺跡と瀬戸内海沿いの弥生遺跡群との交流を物語るものとして貴重な資料を提供した。下和字遺跡では弥生時代から古墳時代初頭の石棺墓群が知られている。これらの遺跡は皆、河川流域の低地を可耕地として暮らす弥生人の証である。

古墳時代になると奈美松ヶ谷古墳と井手山古墳群がある。奈美松ヶ谷古墳には鉄剣と人骨が遺存していたとされる。古墳時代後期に築かれた井手山古墳群は、横穴式石室を有する小規模な群集墳である。

古代から中世にかけては、『ふるさと小野』によれば平野部に岡田、宮の前、炭頭、大歳、五反田、大将軍の村落遺跡が点在する。重源上人と共に木材の伐採･運搬に従事した人々の村を彷彿とさせる。

平安時代の延暦３年（784年)、桓武天皇の勅旨により松尾山天皇院光明寺が真尾の山麓に創建されたとの記録が残る。12坊と堂塔伽藍を備えた修験道の霊場の古図も残り、『防長寺社由来』には、「両界堂」の文字も見え、当時は天台密教の道場として栄えていたことになる。天正９年（1581年)、戦国期の全山放火消滅までの800年間、「世俗に西の高野と称す」(『防長風土注進案』）とその繁栄ぶりを紹介しているが、この寺院跡については未だ遺構は確認されたことがない。

近世以前から小野地区は、石州街道が通るなど交通の要衝であった。近代以降においては、大規模な開発も少なく、今後なお多くの遺跡の発見が期待される。

〈引用・参考文献〉
防府市史編纂委員会『防府市史　資料Ⅱ　考古資料・文化財編』 2004年。
防府市史編纂委員会『防府市史　通史Ⅰ　原始・古代・中世』 2004年。
山口県文書館編『防長風土注進案』第10巻　三田尻宰判下　1965年。
山口県教育委員会『山口県文化財地図情報システム』2006年。
小野郷土史研究会『ふるさと小野』創刊号　1985年。
山口県文書館『防長寺社由来』第３巻　1983年。

Ⅱ　調査の経過

１　調査に至る経過

防府市小野から牟礼にかけて計画された農免農道整備事業牟礼小野地区建設工事に伴い、平成16年度に「井ノ山遺跡」の発掘調査が行われた。これにより弥生時代を中心とする集落跡が確認されたことにより、周辺丘陵部にも遺跡の広がりが予見された。その後農免農道整備事業牟礼小野地区建設工事の予定地が南側に延長されることになったことから、山口県教育委員会がその範囲について踏査および試掘調査を平成17年度に実施した。その結果弥生土器等が出土したことから、対象地には埋蔵文化財が埋存していることが明らかとなった。これを受けて、山口県教育委員会と山口農林事務所など関係機関は路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、その結果現状保存が困難であると判断されたため、事前に発掘調査による記録保存を行うこととなった。発掘調査は山口農林事務所から委託を受けて山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなり、平成18年度は工事予定地で確認されている埋蔵文化財の範囲のうち、5,600㎡について調査対象とすることとなった。

なお遺跡名については、平成16年度調査「井ノ山遺跡」と今回の遺跡は隣接しているものの、地元では遺跡が所在する丘陵地を、大字和字地内は「井ノ山」、大字真尾地内では「猪の山」とおおむね呼称している。今回の調査対象地は真尾地内であり、ここより南側の丘陵にはすでに周知の埋蔵文化財包蔵地「真尾猪の山遺跡」が存在していることから、試掘調査によって新たに確認された遺跡について山口県教育委員会は、「真尾猪の山遺跡」の範疇であるとしその範囲を拡大することとなった。このことは山口県教育委員会が作成した山口県文化財地図情報システム（平成18年３月改訂）の埋蔵文化財データに反映されている。また、平成16年度調査の「井ノ山遺跡」における「Ⅱ地区」は、所在地からすると「真尾猪の山遺跡」の範疇であるが、混乱を避けるため従来のまま「井ノ山遺跡Ⅱ地区」として取り扱うこととする。

２　発掘調査の経過

発掘調査は関係機関との協議や諸準備を経て、６月16日より路線内の立木伐採・搬出を開始した。その後立木伐採により対象地の現地形が明らかになったことから、地区名の設定を行った。調査対象地のほぼ中央に調査区を分断するように深い谷があることから、これより北側をⅠ地区、南をⅡ地区と呼称することとした。さらにⅠ、Ⅱ地区とも小谷が入り込んでいることから、これを境として北側からⅠ－１、Ⅰ－２地区、Ⅱ－１、Ⅱ－２地区とする。すなわち調査区には西へ派生した４つの低丘陵とその間の３つの大小の谷からなることになる。また、南側の標高62mの馬の背状の狭い丘陵頂部からも試掘調査で遺構が確認されたことから、これをⅢ地区として調査を行った（第２図）。

樹木伐採後、Ⅰ地区、Ⅱ地区については重機による表土除去および残土の場外搬出を行う。その後人力による遺構検出をⅡ地区から行った。

Ⅱ地区はⅡ－１、Ⅱ－２地区のあいだに山水が流れる小谷が入り、調査区は松尾山へとつながる急斜面と、佐波川へとくだる緩斜面からなる。地形的に急斜面側は遺構が存在する可能性は低いとみられるので、まずトレンチによる確認作業を行う。これにより遺構は検出されなかったことから、調査

対象を緩斜面部分に絞り、全体を掘り下げて調査を行った。なおトレンチでは上位からの流出土中から弥生土器片が出土したことから、調査区外の東側高位にある丘陵上に集落が存在する可能性がでできた。遺構検出の結果、Ⅱ－１地区では弥生時代の包含層（一部縄文土器を含む)、Ⅱ－２地区では包含層および土坑を確認した。地山は斜面高位が花崗岩の風化した黄褐色粗砂土である。西側の低位側は橙色系の粘質砂土～砂質土の安定した堆積土があり、この上面から遺構遺物が確認されたことから、これを地山（遺構面）と判断した。

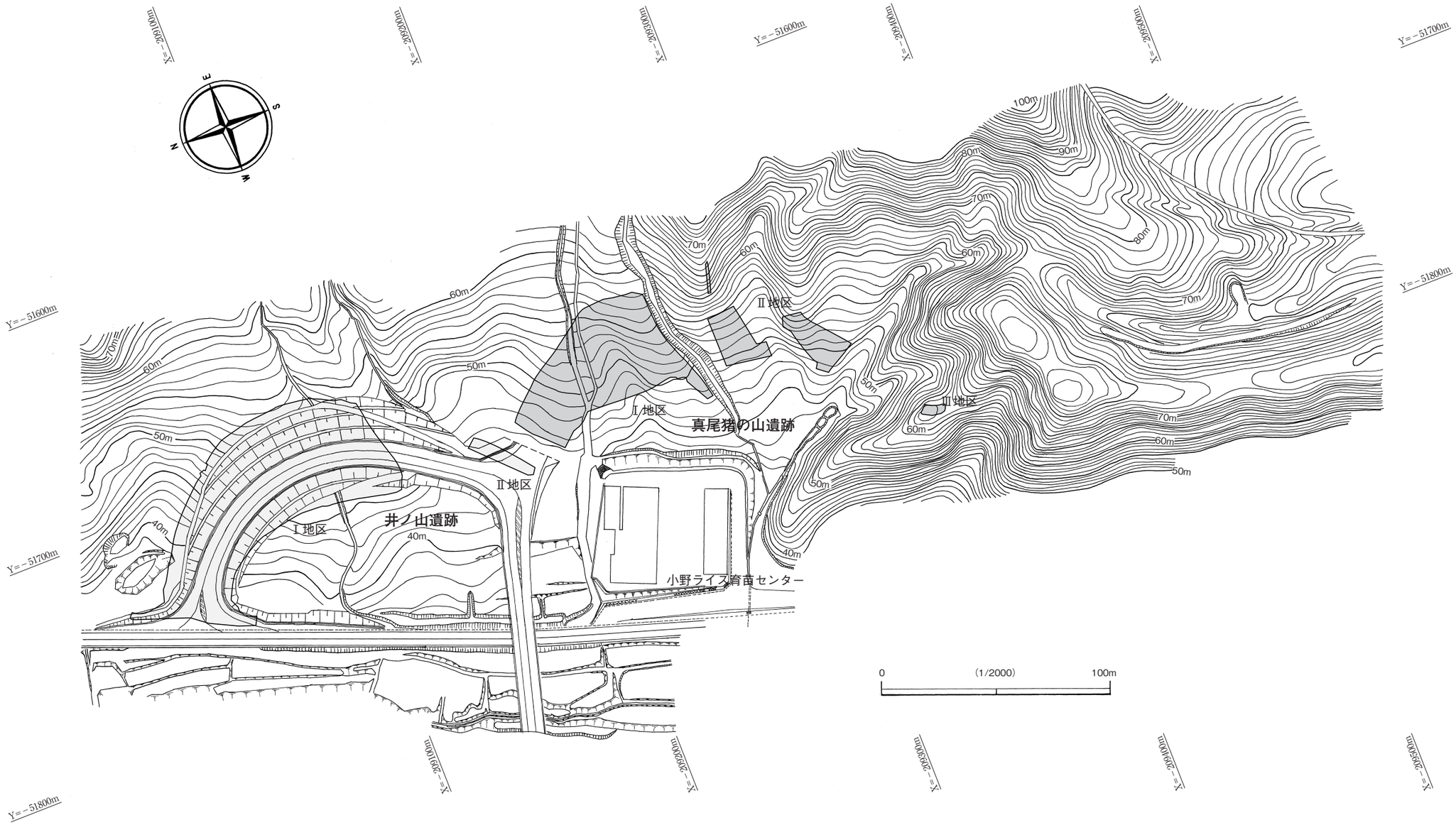
Ⅰ地区は全体に基盤となる地山が土石流による堆積土であるため、自然礫が多く含まれ、砂質の安定していない地層であることから、地山面や遺構確認の判断が難しく、人力による遺構検出は難航した。そこで遺構検出とともにⅠ－１地区北壁にそってトレンチを設定し、層序を確認しながら調査を行う。土層観察の結果、基本層序は１表土、２堆積土、３黒色土（砂質土)、４地山の４層に大別できる。このうち３黒色土（砂質土）は旧表土とみられ、この上面に新たな土砂流出による２層が堆積したとみられる。旧表土は弥生土器の遺物包含層でもあり、その分布は丘陵尾根筋は薄く、傾斜面ほど厚く堆積している。地山は黄褐色の砂質土で多くの礫を含んでいる。またトレンチ掘り込み中に西へ下る浅い地山の窪地を確認し、下位では伏流水となった湧水がある。自然流路跡とみられ、この堆積土中からは弥生土器などが破棄された状態で出土したことから、「流路跡」としてその範囲を調査対象とし、トレンチ調査から全面的に掘り下げることとなった。

検出の結果、Ⅰ－１地区では竪穴住居跡、土坑、柱穴の遺構が確認された。対してⅠ－２地区は遺構の分布が低く、集落の中心はⅠ－１地区であることが判明した。なおⅠ－１地区とⅠ－２地区の間には谷が入り込んでおり、表土中に弥生土器の分布が認められたことから、「Ⅰ地区谷部」と呼称して、調査対象とした。しかしながら砂質で軟質な基盤であり夏の雨期は谷に雨水が集中するため、渇水期である冬に掘り込みを行うこととした。

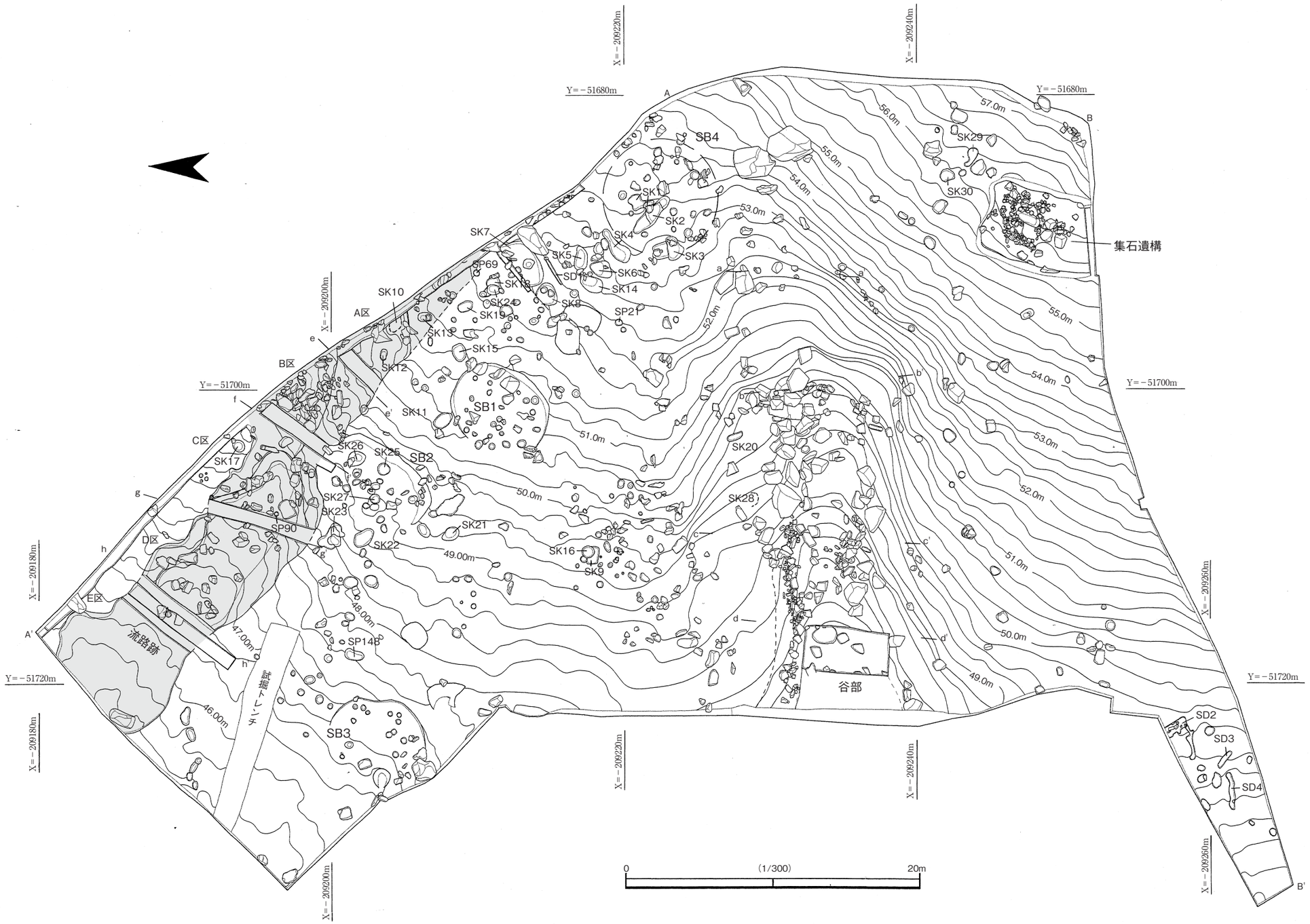
Ⅲ地区は対象地が狭い丘陵頂部であるので、人力による表土剥ぎ・遺構検出を実施。基本層序は表土（腐葉土を含む）下は直に花崗岩土の地山であり、この面に柱穴が確認された。遺構はこれ以外は検出されなかったが、遺構検出中に弥生土器片が出土したことや、調査区外に狭いながらも平坦部が広がることから、遺跡の広がりを示す資料となった。

以上Ⅰ地区の谷部をのぞき、検出された遺構は、国土座標基準杭に基づく実測や、写真の記録保存を実施し、これらがほぼ終了した11月21日にラジコンヘリコプターによる遺跡の空中写真および写真測量の撮影を実施した。12月からはⅠ地区谷部の調査を再開する。まず重機による表土除去に続いて、人力による掘り込みを進める。谷部は３本のトレンチ及び土層観察用の土手により区画された部分を、東からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区と呼称し、遺物の取り上げを行う。このうちＢ、Ｃ区からは大量の弥生土器が破棄された状態で発見された。

この谷部の調査により今年度の調査はほぼ終了し、12月27日に現地から撤収した。これらの調査期間中には埋蔵文化財に対する理解を深めてもらうことを目的に、９月26日に山口市立島地小学校６年生11名による発掘体験学習や、11月25日には一般の人々を対象に遺跡を公開する遺跡現地説明会を開催し、約100名の参加者があった。


X=-29910m
X=-29930m
X=-29950m
Y=-51600m
X=-29970m
X=-29990m
Y=-51700m
Y=-51800m
N
E
S
W
100m
90m
80m
70m
60m
50m
40m
Ⅱ地区
Ⅰ地区
Ⅲ地区
真尾猪の山遺跡
井ノ山遺跡
小野ライス育苗センター
0
(1/2000)
100m

第２図　調査範囲図



第３図　Ｉ地区遺構配置図

Ⅲ　調査の成果

１　遺　構

今回の調査では、調査対象区が谷によって分断されているため、それぞれⅠ地区・Ⅱ地区・Ⅲ地区に３分割して調査を実施した（第２図）。３地区とも佐波川中流域東部の丘陵地に位置しており、佐波川を一望することができる。

Ⅰ地区は標高45m～58mの西側傾斜面にあたり、北半部は比較的傾斜が緩く、遺構の大半はこの地区に集中しているが、地山が礫を多く含んだ砂質の堆積土であるため、安定性が悪く、全体的に遺構の残存状態はよくない。Ⅱ地区は標高48m～67mに位置し、比高差が約20mあり、南西側に大きく傾斜している。花崗岩質の地山の上に比較的粘性の強い黄褐色土が堆積し、さらにその上に砂質土及び弱粘質土の堆積層が見られる。なお、Ⅰ・Ⅱ地区とも全域にわたって１～２mの転石が多数散在している。Ⅲ地区は標高62mの佐波川を見下ろす丘陵上の狭い平坦面に位置し、花崗岩が風化した比較的安定した地山に柱穴が掘り込まれている。

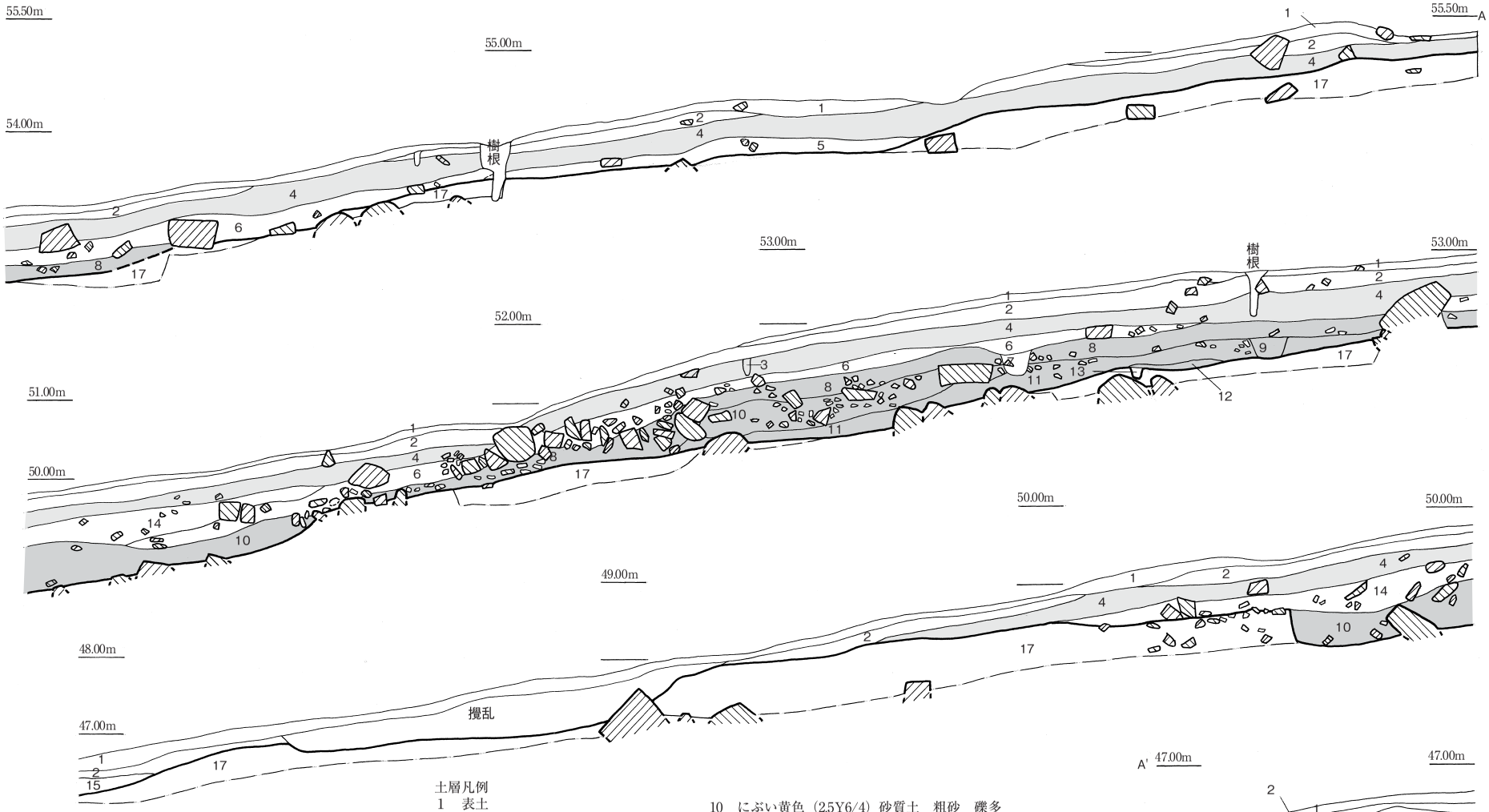
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡４軒、土坑35基、柱穴268個、溝状遺構６条、集石遺構１基である。遺構の大半はⅠ－１地区に集中しており、Ⅱ地区、Ⅲ地区については遺構は比較的少なかった。また、Ⅰ地区では流路跡や中央の谷部で石列が確認された。遺物包含層は、Ⅰ地区では広範囲にわたって堆積し、Ⅱ－１地区では西側で検出された。

（１）Ⅰ地区

南北約90m、東西約60mに及ぶ今回の最大の調査地区である。中間の谷部を挟んで北半部（Ⅰ－１地区）と南半部（Ⅰ－２地区）に分けられる。前述したように、大半の遺構は傾斜の緩やかな北半部に集中しているが残存状況は良くない。土層観察（第４、５図）による基本層序のうち、調査区全体に旧表土とみられる黒色砂質土が広く分布していることが特徴的で、その下に黄褐色系の砂質土が堆積している。この層は崩落土による堆積で安定していないものの、遺構はこの層より掘り込まれていることから、地山と考えられる（「Ⅱ調査の経過」参照）。検出された遺構は竪穴住居跡４軒、土坑30基、柱穴214個、溝状遺構４条、集石遺構１基である。以下、主な遺構及び流路跡、谷部石列について解説する。

ア　竪穴住居跡（第６～８図　図版６～９）

竪穴住居跡は４軒全てがⅠ－１地区で検出されている。地山が崩落土による堆積層であることから砂質でもろく、土中に多くの礫を含んでいる。また斜面に立地することから上位からの流出土や転石により、いずれの遺構も残存状況はよくなく、遺構の輪郭も明瞭でない。平面形は残存する壁面から推定すると、楕円形が中心であるとみられる。壁面や床面には地山中の礫が露出する場合があることから、これらの礫を避けたり除去したりしながら住居の構築を行ったと推定される。このことは床面における主柱の配置が不規則であり、深さも一定でないことからもうかがえ、主柱である柱穴の選定を難しくしている。また周溝及び炉跡は検出されなかった。周溝の目的が排水である場合、砂質土の地山では不要であった可能性がある。このような斜面における住居の構築方法は、通常通り掘り下げて壁面つくる方法と、高位側を段状にカットしそこで出た残土で低位側斜面を整地し、壁面をつくる



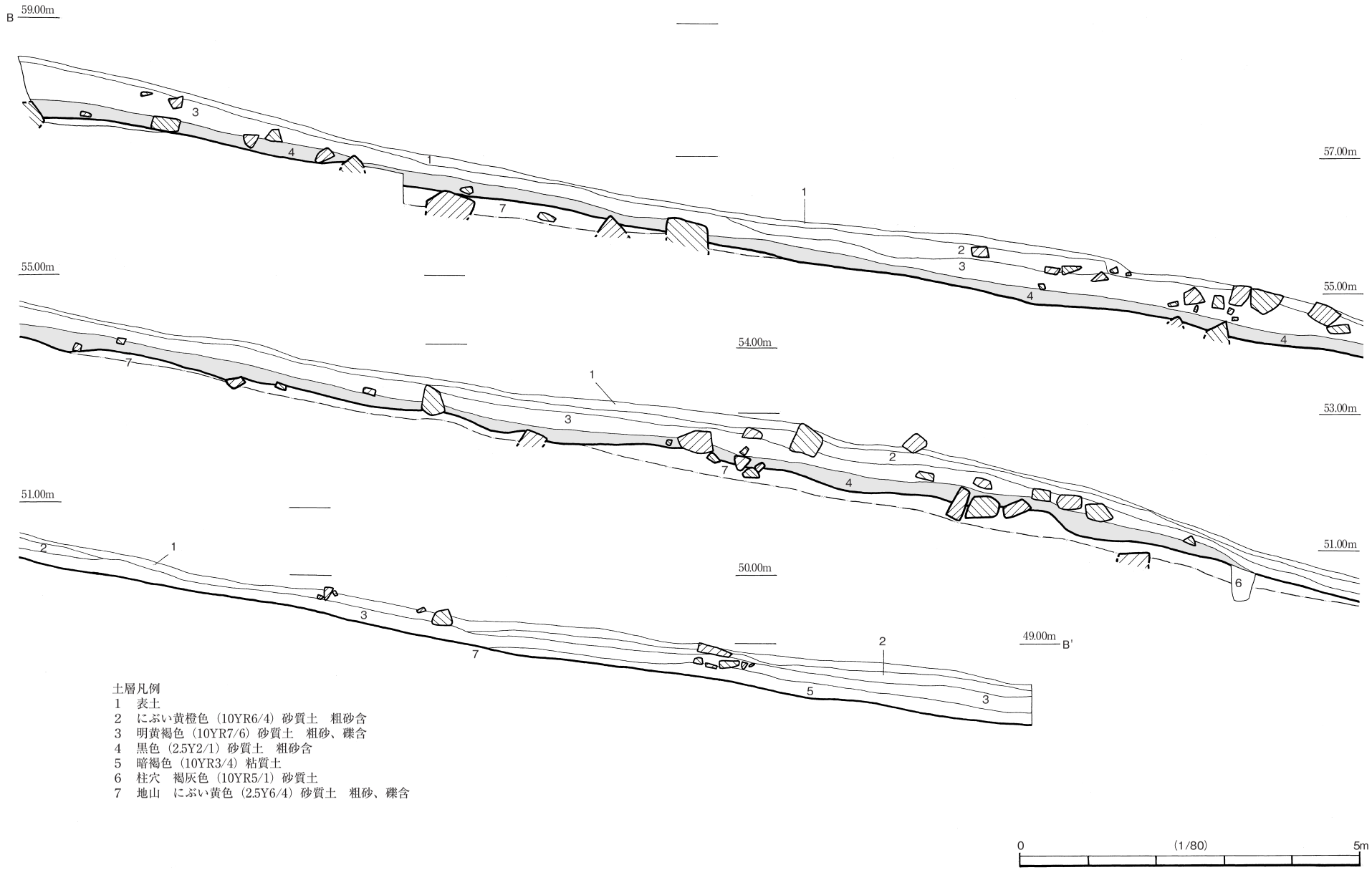
土層凡例

1　表土
2　明黄褐色（10YR7/6）砂質土
3　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
4　黒色（2.5Y2/1）砂質土　粗砂
5　にぶい黄色（2.5Y6/3）土
6　黄褐色（2.5Y5/3）砂質土
7　柱穴　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
8　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土
9　柱穴　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土
10　にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土　粗砂　礫多
11　灰黄色（2.5Y6/2）砂質土　粗砂　礫多
12　黄灰色（2.5Y4/1）砂質土
13　柱穴　オリーブ黒色（5Y3/1）砂質土
14　黄褐色（2.5Y5/4）砂質土
15　灰オリーブ（5Y6/2）砂質土　礫多
16　柱穴　灰色（5Y4/1）砂質土
17　地山　黄橙色（10YR7/8）砂質土　粗砂　礫多
17'　地山　灰白色（5Y7/2）粗砂

0　(1/80)　5m

※アミかけ部分（淡）…旧表土・包含層
〃　（濃）…流路跡埋土

第４図　Ⅰ－１地区土層断面図



土層凡例
1　表土
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土　粗砂含
3　明黄褐色（10YR7/6）砂質土　粗砂、礫含
4　黒色（2.5Y2/1）砂質土　粗砂含
5　暗褐色（10YR3/4）粘質土
6　柱穴　褐灰色（10YR5/1）砂質土
7　地山　にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土　粗砂、礫含

第５図　Ⅰ－２地区土層断面図

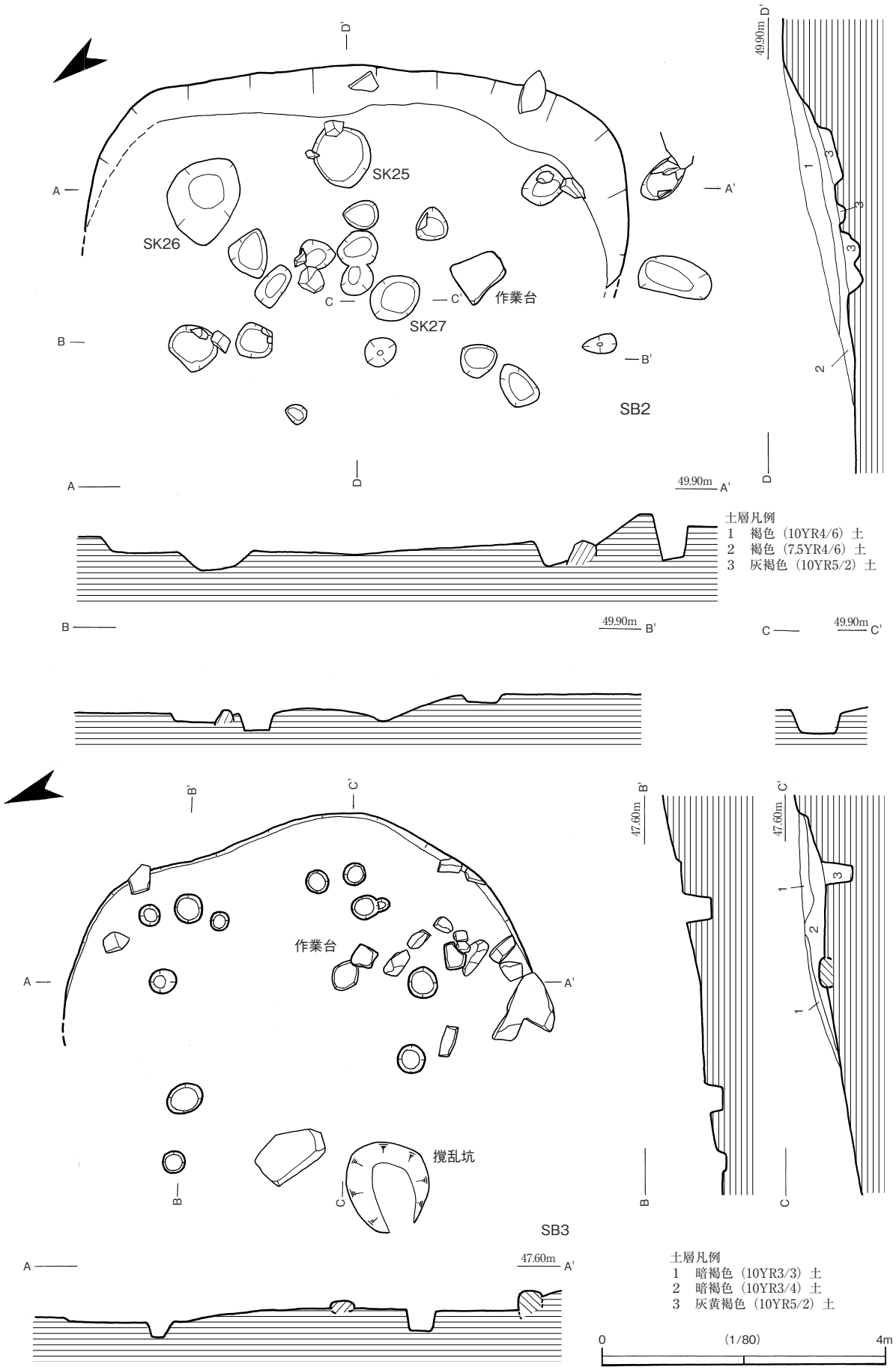
法があるが、当遺跡の場合は、いずれも西側低位部分を失っているため明らかとなる資料を得ることは出来なかった。

ＳＢ１（第６図　図版６）

Ｉ－１地区中央に位置する。西側の壁は流失しているが、４軒のうちで最も残存状況がよい。床面はほぼ平坦であるが、床面や東壁面には地山内の礫が散在している。平面形は楕円形と考えられ、残存規模は長軸約6.9m、短軸約5.8mである。壁の高さは東側残存部で最大60cmを測る。主柱穴は７本と考えられ、その規模は径30cm～50cm、深さ30cm～45cmである。また、床面中央には自然石を転用した作業台が位置し、この上面には赤色に変色した箇所が認められた。同住居跡からは10点の鉄器が出土し、鉄板状の破片もあることから、鉄器の鍛冶による使用痕であるとも考えられる。詳細については理化学的な分析による検討が必要とみられる。

出土遺物は弥生土器（９～29)、土製品（165)、石器（166～169、190、195)、鉄器（222～231）が出土しており、時期は弥生時代中期後半のものと考えられる。

第６図　SB1実測図

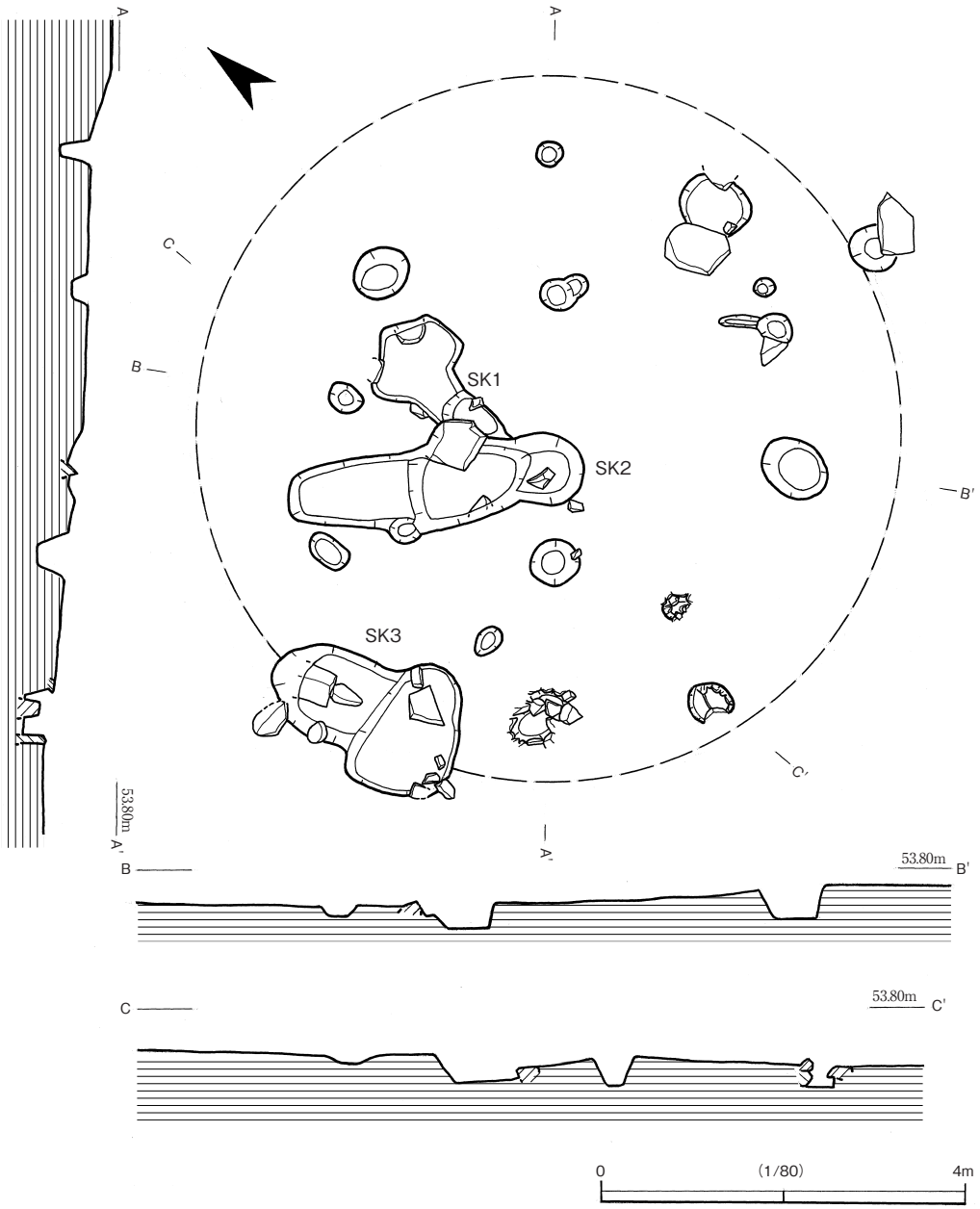

SK25
SK26
SK27
作業台
SB2
49.90m
土層凡例
1　褐色（10YR4/6）土
2　褐色（7.5YR4/6）土
3　灰褐色（10YR5/2）土
作業台
撹乱坑
SB3
47.60m
土層凡例
1　暗褐色（10YR3/3）土
2　暗褐色（10YR3/4）土
3　灰黄褐色（10YR5/2）土
0
(1/80)
4m

第７図　SB2・3実測図

ＳＢ２（第７図　図版７）

Ｉ－１地区北半部中央、ＳＢ１の北西側で、流路跡に接するように位置する。北西側の壁が完全に流失し、転石の流入及び地山礫の散在により遺構自体の残り具合も悪い。東側壁面は最大50cmを測り、壁面のたちあがりはゆるやかで、床面は西側に向かって傾斜している。掘り込まれた平面形は隅丸方形で、長軸方向の残存規模は最大で7.5mである。当初は斜面をカットした段状遺構とみられたが、床面には土坑、柱穴が確認され、自然石を利用した作業台も存在することから、住居跡と判断される。柱穴の大きさは径30～60cm、深さ10～35cmである。西側が流失しており、残存する柱穴から主柱穴および住居の構造を判断するのは難しいが、平面形はＳＢ１、ＳＢ３が楕円形であることから、ＳＢ２もその可能性が高い。

底面にはＳＫ25～ＳＫ27の３基の土坑が確認された。いずれも中央から東側壁面にかけて位置する。ＳＫ25は東側壁面直下に位置する。平面形は円形で、規模は径83cm、残存する深さは28cmである。Ｓ



第８図　SB4実測図

Ｋ26はＳＫ25の北側に位置し、３つの土坑中最大の規模である。平面形は長円形で、長軸117㎝、短軸103㎝、残存する深さは40㎝である。ＳＫ27は遺構の中央部、作業台の北側に位置する。平面形は円形で、規模は径約70㎝、残存する深さ33㎝である。

遺物は弥生土器（30～40）、角閃石安山岩の石材（201）が出土した。これらの遺物から時期は他のSBとほぼ同時期の弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＢ３（第７図　図版８）

Ｉ地区北半部、ＳＢ２の西側に位置する。４軒の住居跡の中では最も低い場所に位置する。残存部の壁は最大23㎝を測るものの、西側の壁が流失しており全体的に削平をうけて残存状況は良くない。平面形は残った壁面から推定して楕円形と考えられる。推定規模は長軸は約6.6ｍである。床面は西側に向かって緩やかに傾斜しており、地山礫がいくつも露出している。中央部やや西側から作業台が出土した。残存する主柱穴は４本とみられ、攪乱坑等で他を失っているとみられる。柱穴の規模は径約30㎝～40㎝、深さ約20㎝～40㎝である。

遺物は弥生土器（41～44）、石鏃（170、171）、砥石（196）が出土した。時期は他と同じ弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＢ４（第８図　図版９）

Ｉ地区北半部南東側に位置する。４軒の住居跡の中では最高位に位置する。壁面はまったく残存していないが、柱穴の配置が円形にめぐることから、壁面を失った竪穴住居跡と推定される。

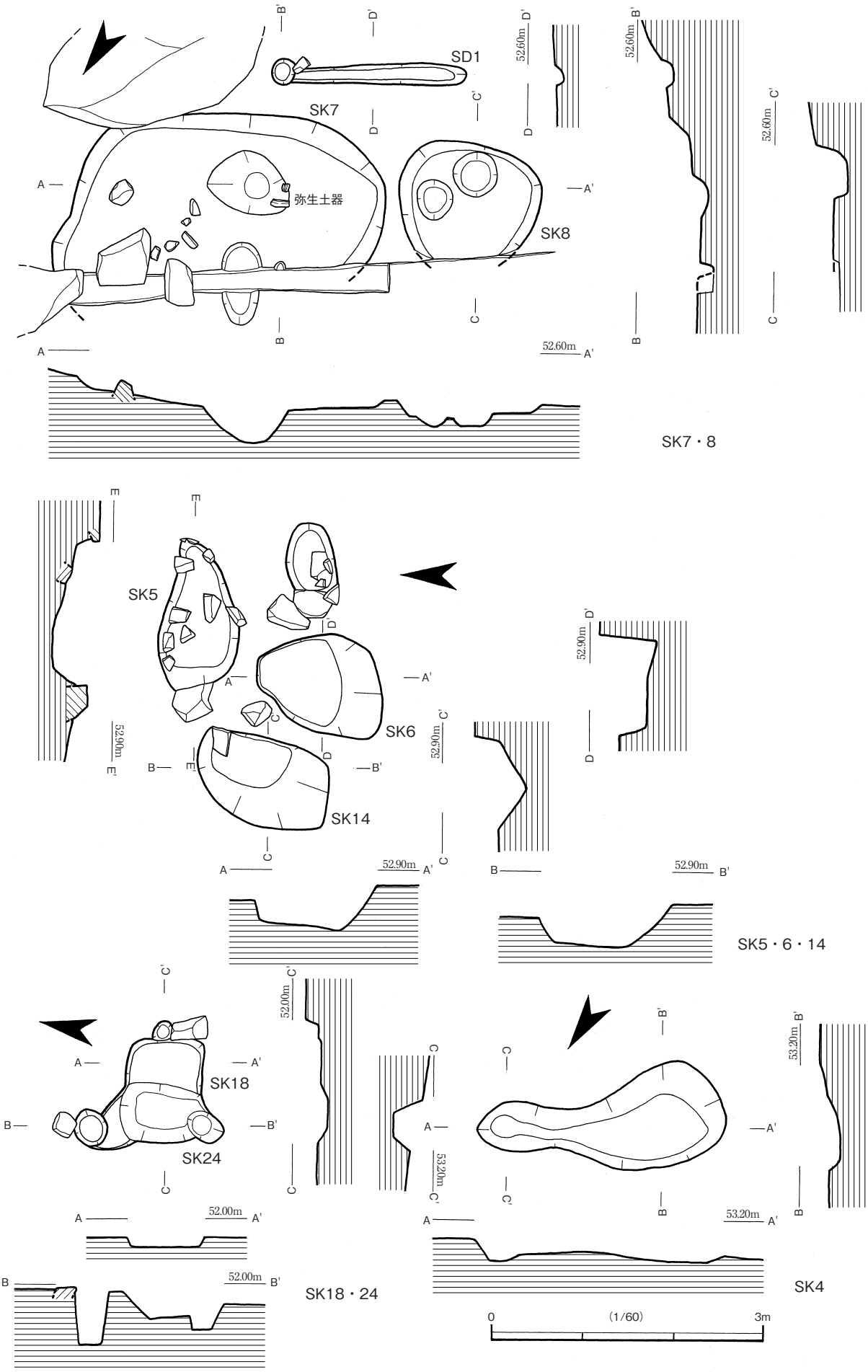
主柱とみられる柱穴が約1.5ｍ～３ｍ間隔で円形に７個並び、その内部に支柱とみられる柱穴２個が検出された。平面形は不明確ではあるが、他の住居跡が楕円形であることから、円形若しくは楕円形であると考えられる。なお推定される規模は、径は約７～7.8ｍであるとみられる。床面は西側に向かって緩やかに傾斜している。柱穴規模は径約30㎝～60㎝、深さ約10㎝～35㎝。範囲内にはＳＫ１～３が掘り込まれ、弥生土器片が出土したが、柱穴の配列状況からみて、住居跡との関連はないと考えられる。

イ　土坑（第９～12図　図版10、11）

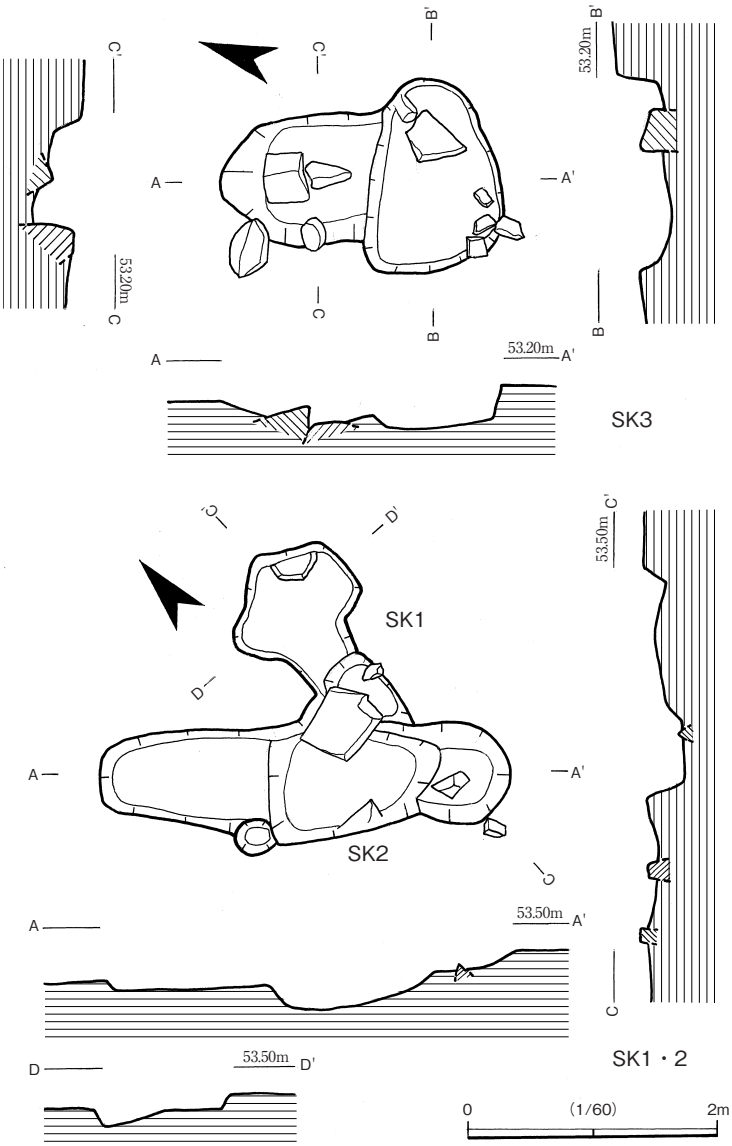
Ｉ地区では土坑が30基確認された。このうち28基はＩ－１地区に位置し、Ｉ－２地区では集石遺構に隣接して２基が検出されたのみであり、Ｉ－２地区の遺構分布が疎であることがうかがえる。土坑のほとんどは、標高49ｍ～53ｍのＩ－１地区丘陵尾根筋に沿うようにして分布している。単独で位置するものは少なく、２～4基が重複または隣接するように存在し、竪穴住居跡に付属するような分布を示す。平面形は、長円形が半数を占め、ほとんどの深さは40㎝以下と浅い。これは崩落土による堆積が基盤であることから、安定した遺構面とはいえず、そのため、その後の堆積、流出により遺構の輪郭や深さの残存状況が良くないためとみられる。出土遺物はほとんどの土坑から弥生時代中期の土器が出土しているが、いずれも小破片で埋土中であることから、周辺から流入した可能性も考えられる。そのため具体的に土坑の性格を示す資料は少なく、ＳＫ10、16、28で破棄されたとみられる弥生土器や炭、礫などが確認されたに過ぎない。

ＳＫ7・8（第９図　図版11）

Ｉ－１地区北半部東側に位置している。ともに西半を流失しており、その輪郭は定かでない。底面



第９図　Ⅰ地区SK実測図（１）



第10図　Ⅰ地区SK実測図（２）

にはいずれも柱穴が検出されたが、この土坑に伴うものかどうかは明らかでない。

ＳＫ７は、長軸３ｍにおよぶ露頭した花崗岩石を避けるかのようにその西側に掘り込まれている。平面形は長円形を呈する。規模は、長軸365cm、短軸172cm、深さ38cmを測り、今回の調査で検出した土坑では大型の部類である。底面付近から弥生時代中期の鋤先口縁壺（50）、跳ね上げ口縁甕（48）、甕底部（49）が出土した。ＳＫ８はＳＫ７の南西側に隣接して位置する。平面形は円形を呈し、底面に２つの柱穴が検出された。規模は長軸155cm、短軸130cm、深さ22cmを測る。出土遺物は、弥生時代中期の鋤先口縁壺（52）と胴部片（51）、石製紡錘車の石材となる角閃石安山岩（199）である。

ＳＫ5・6・14（第９図　図版10）

Ⅰ－１地区北半部東側の緩やかな斜面上、ＳＢ４の西側に位置する土坑群のひとつである。これらの土坑は隣接し、主軸方向が南北（ＳＫ６、14）または、東西（ＳＫ５）を向いているのが特徴的である。ＳＫ５は、平面形は長円形で、規模は長軸160cm、短軸90cm、深さ48cmを測る。埋土は褐色砂質土の単層である。埋土中には20～30cmの礫が含まれ、弥生土器片が出土した。ＳＫ６は、平面形は長円形を呈する。規模は、長軸150cm、短軸108cm、深さ50cmを測る。埋土は褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土した。ＳＫ14は、平面形は長円形を呈する。規模は、長軸163cm、短軸97cm、深さ57cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ18・24　（第18図　図版11）

Ⅰ－１地区北半部東側に位置し、ＳＢ１東側に分布する土坑群のひとつである。当初は単独の土坑とみられたが、掘り込みの結果、2基の土坑と柱穴が重複していたため、不整形な輪郭となったことが明らかとなった。また、ＳＫ24がＳＫ18に先行すると判断された。ＳＫ18は、平面形は長方形を呈する。東西の端に２つの柱穴が掘込まれている。規模は長軸85cm、短軸50cm、深さ13cmを測る。埋土は黄褐色砂質土の単層である。弥生土器の壺胴部片が出土した。ＳＫ24は、平面形は長方形を呈する。南端に１つの柱穴が重複するように掘込まれている。規模は長軸97cm、短軸65cm、深さ26cmを測る。

埋土は褐色砂質土の単層である。

ＳＫ４（第９図　図版10）

Ｉ－１地区東半に位置し、ＳＢ４北西側にみられる土坑群のひとつである。遺構検出時は２つの土坑が重複しているとみられたが、調査により単独の土坑であることが明らかとなった。平面形は不整形を呈する。規模は長軸223㎝、短軸115㎝、深さ22㎝を測る。埋土は褐色粘質土の単層である。

ＳＫ３（第10図　図版10）

Ｉ－１地区東半に位置する。推定復元されたＳＢ４内にあるものの、位置関係から伴わないと判断される。掘り込み前は２つの土坑が重複しているとみられたが、埋土が同質で壁面の立ち上がりが確認できなかったことから、不整形な平面形をした単独の土坑であると考えられる。規模は、長軸220㎝、短軸150㎝、深さ42㎝を測る。弥生土器片が出土した。

ＳＫ１・２（第10図）

ＳＢ４内のほぼ中央に位置するものの、ＳＢ４に所属するとみられる柱穴の配置から考慮すると、竪穴住居跡には伴わないと考えられる。調査区東半に分布する土坑群の一つである。２つの土坑の前後関係は、ＳＫ１が先行する。埋土は、共に褐色砂質土の単層である。ＳＫ1は平面形が不整形を呈している。規模は長軸185㎝、短軸105㎝、深さ33㎝を測る。ＳＫ２は平面形は長円形を呈し、中央部が一段低くなる。規模は、長軸324㎝、短軸95㎝、深さ37㎝を測る。ＳＫ１・２ともに弥生土器片が出土した。

ＳＫ９・16（第11図　図版11）

Ｉ－１地区中央部で谷部に近い。この土坑周辺には柱穴がまとまって分布することから、これらとの関連が考慮される。遺構の先後関係はＳＫ９が先行し、その北隅にＳＫ16が掘り込まれる。

ＳＫ９は平面形が隅丸方形を呈し、規模は長軸133㎝、短軸87㎝、深さ27㎝を測る。埋土は、にぶい黄褐色砂質土の単層である。ＳＫ16は平面形が円形で規模は長軸85㎝、短軸76㎝、深さ39㎝を測る。埋土中に５～10㎝の小礫が多く混入しており、一部には被熱の痕跡も認められた。また埋土には多くの炭を含んでいるものの、壁面は焼土化していないことから、炉等に使用した石や炭を廃棄した土坑と考えられる。ＳＫ９、16とも出土遺物がないため、時期は明らかでない。

ＳＫ23（第11図　図版11）

Ｉ－１地区中央部、ＳＢ２の西側に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は長軸205㎝、短軸136㎝、深さ49㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土している。

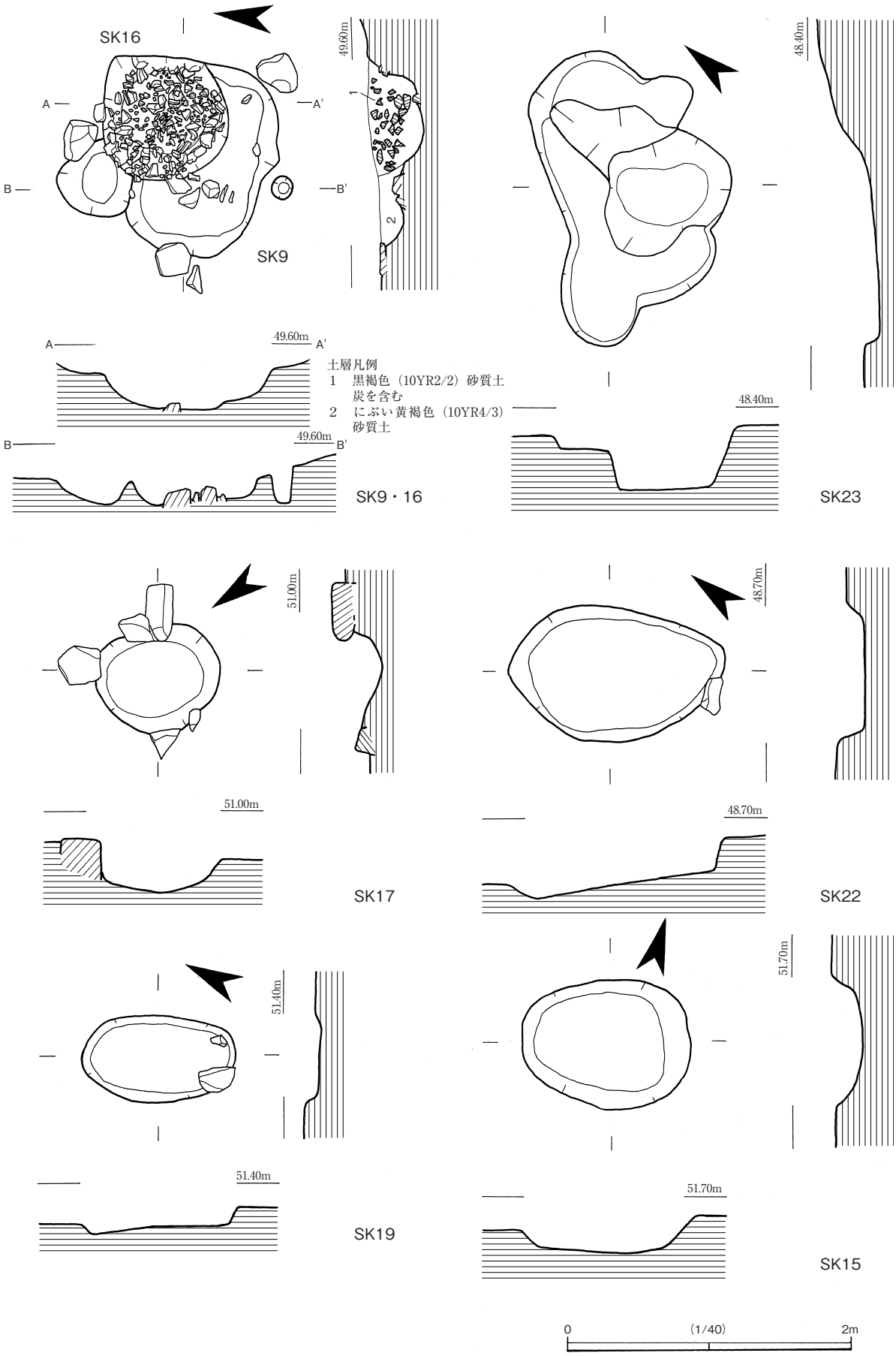
ＳＫ17（第11図　図版11）

Ｉ－１地区北端で、流路跡の北側に隣接して位置する。平面形は円形を呈する。規模は長軸90㎝、短軸75㎝、深さ27㎝を測る。埋土は褐色土の単層である。周囲には50㎝程の礫が地山内に含まれている。弥生土器片が出土した。

ＳＫ22（第11図　図版11）

Ｉ－１地区中央部、ＳＢ２の西側に位置する。平面形は長円形を呈する。規模は長軸152㎝、短軸94㎝、深さ32㎝を測る。埋土は褐色土の単層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ19（第11図　図版11）



第11図　Ⅰ地区SK実測図（3）

Ｉ－１地区北側、流路跡の南側に位置する。平面形は長円形を呈する。規模は長軸107㎝、短軸61㎝、深さ18㎝を測る。褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ15（第11図　図版10）

Ｉ－１地区中央部、ＳＢ１の東側に隣接する。平面形は長円形を呈する。規模は長軸119㎝、短軸90㎝、深さ24㎝の浅い皿状の土坑である。埋土は褐色土の単層である。

ＳＫ11（第12図　図版10）

ＳＫ15同様、ＳＢ１の北西側に隣接する。規模は長軸140㎝、短軸93㎝、深さ28㎝の浅い皿状の土坑である。埋土は灰褐色土の単層である。

ＳＫ29（第12図　図版16）

Ｉ－2地区東半部に位置する。礫混じりの軟弱な砂層に掘り込まれており、平面形は不整形を呈する。規模は長軸140㎝、短軸60㎝、深さ33㎝を測る。埋土は黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ21（第12図）

Ｉ－１地区中央部、ＳＢ２の南西に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長軸116㎝、短軸96㎝、深さ39㎝を測る。埋土は褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ28（第12図　図版10）

Ｉ－１地区から谷部への傾斜面に位置し、土坑は地山面ではなく、谷部堆積土上面から掘り込まれている。谷部側に半分が残っている他は流失しているが、平面形は円形を呈し、底面中央が一段凹んでいる。規模は長軸90㎝、短軸42㎝、深さ25㎝を測る。埋土に多量の炭や焼土が含まれており、この遺構に投棄した可能性がある。弥生土器片が出土した。

ＳＫ10（第12図　図版10）

Ｉ－１地区流路跡の埋土上面から掘り込まれている。平面形は東半を失うが、長円形とみられる。規模は残存する長軸87㎝、短軸100㎝、深さ55㎝を測る。埋土は、黒褐色砂質土の単層である。遺物は弥生時代中期の垂下口縁壺（45）、甕底部（46、47）が礫と共に破棄された状態で出土した。

ＳＫ13（第12図　図版10）

Ｉ－１地区流路跡の埋土上面から掘り込まれている。平面形は長円形である。規模は長軸92㎝、短軸57㎝、深さ30㎝で、南側に深さ49㎝の柱穴状の落ち込みがある。埋土は、褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ30（第12図　図版16）

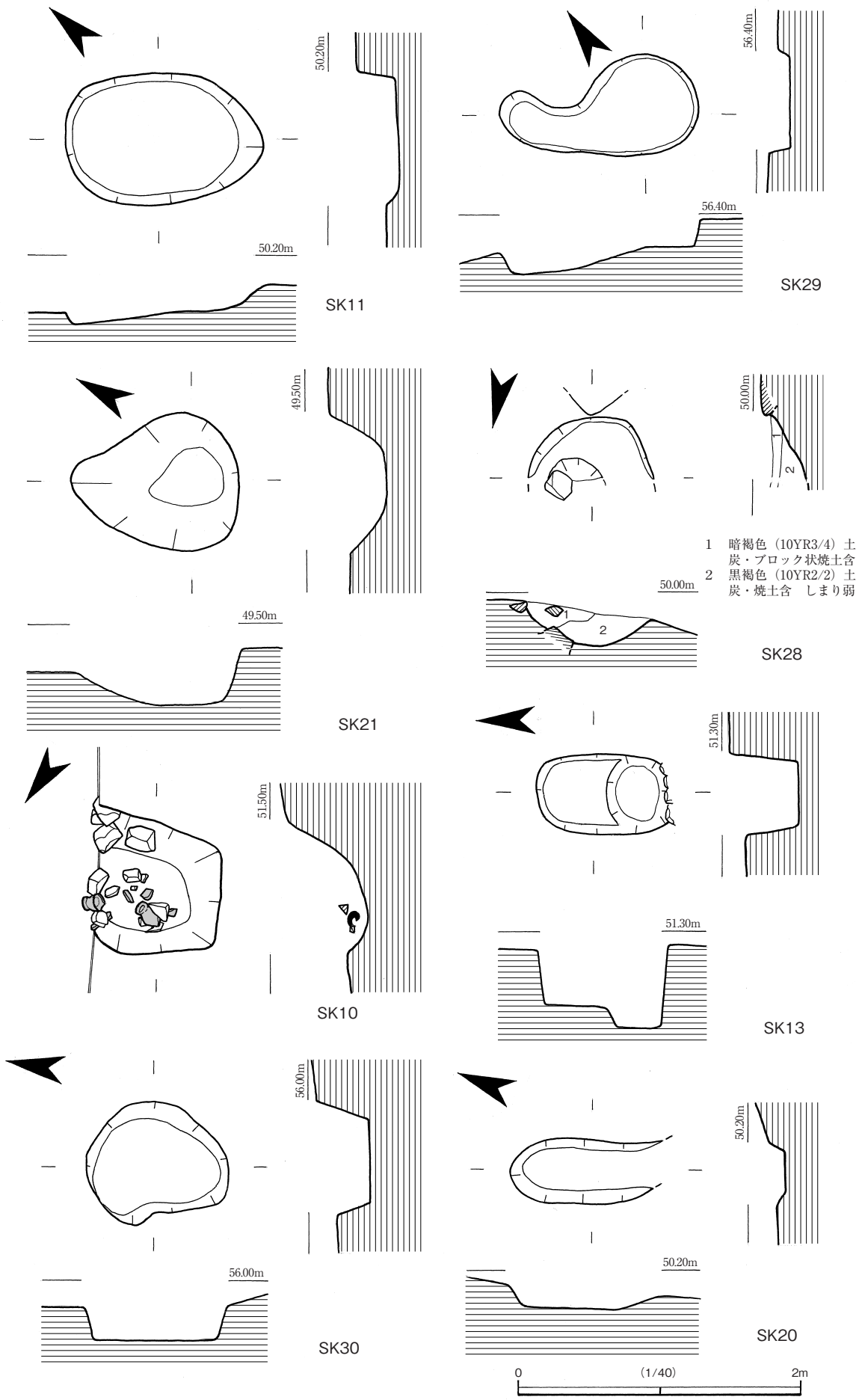
Ｉ－２地区、集石遺構の北側に位置する。礫混じりの軟弱な砂層に掘り込まれており、平面形は不整形を呈する。規模は長軸100㎝、短軸80㎝、深さ42㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土の単層である。

ＳＫ20（第12図　図版10）

Ｉ－１地区谷部への傾斜面に位置する。平面形は不整形で南端が流失している。規模は、長軸102㎝、短軸47㎝、深さ19㎝を測る。埋土は褐色土の単層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ12

Ｉ－１地区中央部東端の流路跡内に位置する。平面形は長円形を呈する。規模は長軸76㎝、短軸40㎝、深さ18㎝を測る。埋土は褐色砂質土の単層である。弥生土器片が出土した。



第12図　Ⅰ地区SK実測図（4）

ウ　柱穴群（図版９）

Ｉ地区では、214個の柱穴を検出したが、その分布に疎密があることが遺構配置図（第３図）からみてとれる。集中して柱穴がある範囲は３カ所認められ、このうち最もＩ－１地区の高位側に位置するところでは柱穴の配置からＳＢ４を復元できたことは先述のとおりである。この他の範囲として、まず流路跡の東南端、ＳＢ１の東側にあたる部分がある。このあたりは平坦面がある緩斜面で、約20個の柱穴が検出された。遺物を含む柱穴はこのうち５個であり、弥生土器片が出土した。また柱穴の分布は調査区外まで広がる可能性がある。次にＳＫ９・16周辺部分にも柱穴の集まりをみることができる。この範囲は谷部への傾斜変換点も近く、礫混じりの軟弱な砂質土層が地山面となり、表面には地中の大小の自然礫が露出しており、柱穴の残存状況も良くない。しかしながら焼土や礫を含んだＳＫ９・16を取り囲むように柱穴が位置することが特徴的である。

両者はいずれも柱穴の配置からは住居跡、建物跡は復元できないものの、比較的平坦に近い緩斜面であること、柱穴の時期は弥生土器以外を含まないことから当該期の柱穴群とみられること、などからＳＢ１～４のような竪穴住居跡、またはこれらに伴う付属施設になる可能性がある。

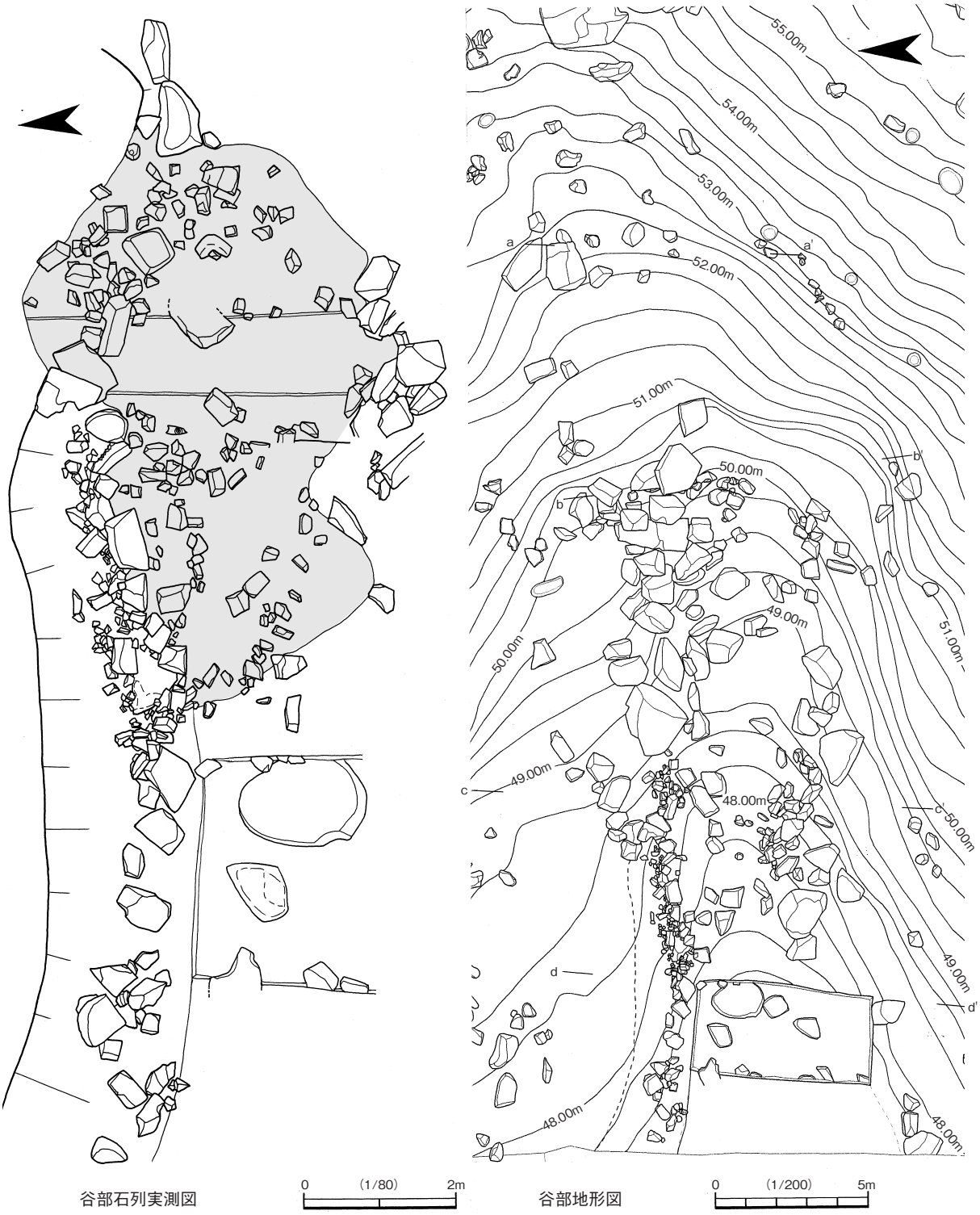
このように柱穴群のまとまりを指摘できるＩ－１地区に対して、Ｉ－２地区では柱穴は散見できる程度である。そのため建物等の存在は可能性として低いと判断できる。ただＩ－２地区から谷部へ下る傾斜変換点付近に2.5～３ｍの間隔をおいて柱穴の配置が認められる。間隔が不規則であることから、施設として判断するのは難しいものの、谷部と丘陵頂部を区画する柵列を想定することもできることから、可能性として指摘しておきたい。

エ　谷部石列（第13図　図版14）

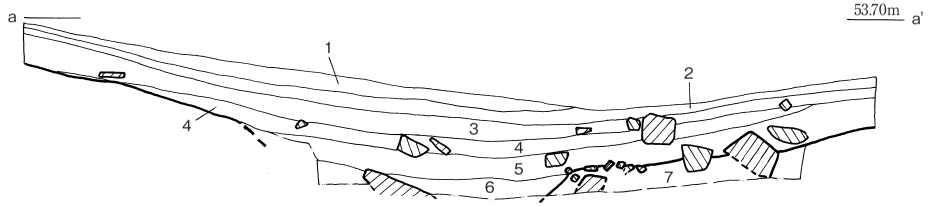
Ｉ地区中央で東西方向に入り込む谷部は、長さ30m、深さは１～５ｍである。４カ所の堆積土層の観察（第14図）によれば、表土及び上位からの流出堆積土の下に、黒褐色砂質土が谷全体に堆積しており、これが谷を覆う旧表土であったとみられる。Ｉ地区丘陵部でも確認されている旧表土層と対応するものとみられ、弥生土器片を含んでいる。谷部ではこの黒褐色砂質土から下層の褐灰色やにぶい黄褐色系の砂質土にかけて多くの弥生土器が出土していることから、Ｉ－１地区に確認された弥生時代集落に伴う谷部の埋土は、この旧表土以下の堆積とみることができる。地山は明黄褐色砂質土であり、約20°のゆるやかな傾斜面を持つ。弥生土器を含む堆積層はc－c'断面で３層、厚さ約60～80㎝にわたっており、それ以下は土質もしまった安定した堆積土で、ほとんど遺物を含まなくなる。地表面から1.2～1.5mの深さまで掘り下げた段階でこのような堆積が確認されたことから、谷中央部は相当の深さとなると判断され、さらにd－d'断面では伏流水による湧水があることから、底面までの掘り込みを止めることとなった。

谷部内には大小の花崗岩礫が多数検出された。最大２ｍをこえる巨石もあり、両側の丘陵から転落してきた状況である。これらの大型の転石は谷部の東に多く存在することから、Ｉ－１地区側からの堆積が多かったことがうかがえる。これらの礫とともにＩ－１地区側にあたる西側で東西に繋がる石列を確認した。一部乱れてはいるものの、Ｉ－１地区側からの傾斜変換点付近に、長軸方向を谷部の主軸に沿うように据えており、ほぼ直線的に礫が並ぶことから、人為的な石列と判断した。使用される石材は40～80㎝の花崗岩を主体とする自然角礫を地山上に1段据え、東半では、その背後に小礫を

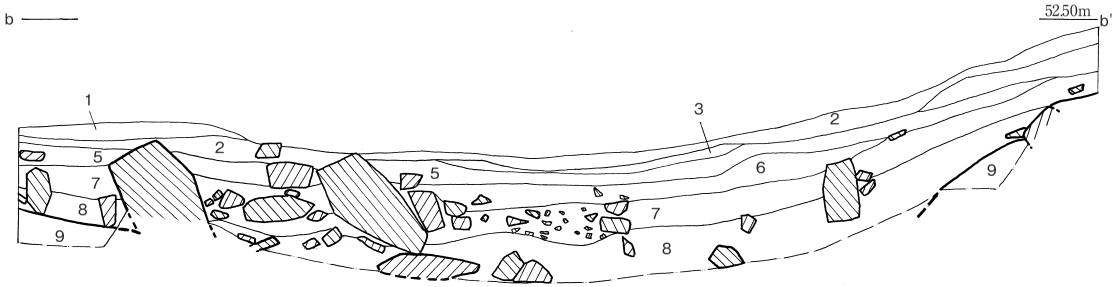
裏込として石の石との隙間に詰めている状況がみてとれる。規模は長さ約10mである。東端は大型の転石があるため、その端は定かでない。西端は等高線に沿うようにわずかに北側へ反転していく状況がみてとれることから、調査区外まで延長するであろう。この石列を境として南側（谷部）で多くの弥生土器が破棄された状態で出土した（第13図　アミかけ部分）。その範囲は東西約８m、南北約５mにわたり、出土状況から石列側より廃棄したことがみてとれる。これらの弥生土器はＩ－１地区集落跡とほぼ同時期であることから、この集落と石列は関連性があるとみられる。おそらく集落と谷との境界に石が配列されたもので、谷は廃棄の場であった可能性が高い。



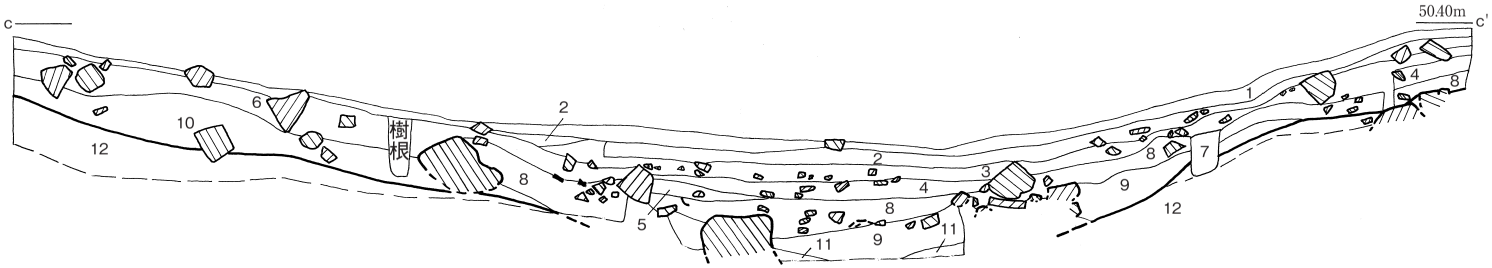
第13図　谷部石列実測図



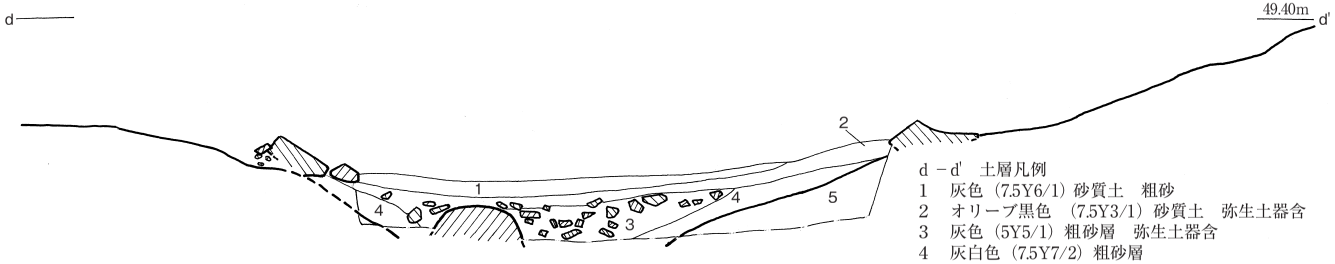
a－a'　土層凡例
1　整地土　褐灰色（10YR5/1）土
2　表土　褐灰色（10YR4/4）砂質土
3　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
4　黒褐色（10YR3/1）砂質土
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
6　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土　炭含
7　地山　明黄褐色（10YR6/8）砂質土　礫含



b－b'　土層凡例
1　整地土
2　表土　褐色（10YR4/4）砂質土
3　黄褐色（10YR5/6）砂質土　弥生土器含
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土　弥生土器含
5　黒褐色（10YR3/1）砂質土　弥生土器多含
6　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土　弥生土器多含
7　明黄褐色（10YR6/6）砂質土　礫多含
8　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土　炭・礫含
9　地山　明黄褐色（10YR6/8）砂質土　粗砂・礫含



c－c'　土層凡例
1　整地土　褐灰色（10YR5/1）土
2　表土　褐灰色（10YR4/4）砂質土
3　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
4　黒褐色（10YR3/1）土　弥生土器多含
5　褐灰色（10YR4/1）土　弥生土器多含
6　黄灰色（2.5Y4/1）土
7　にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土　弥生土器含
8　黄褐色（10YR5/6）砂質土　弥生土器含
9　にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質（粗砂）土　弥生土器含
10　明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土
11　灰色（5Y6/1）砂質（粗砂）土　礫多含
12　地山　明黄褐色（10YR6/8）砂質土　礫多含

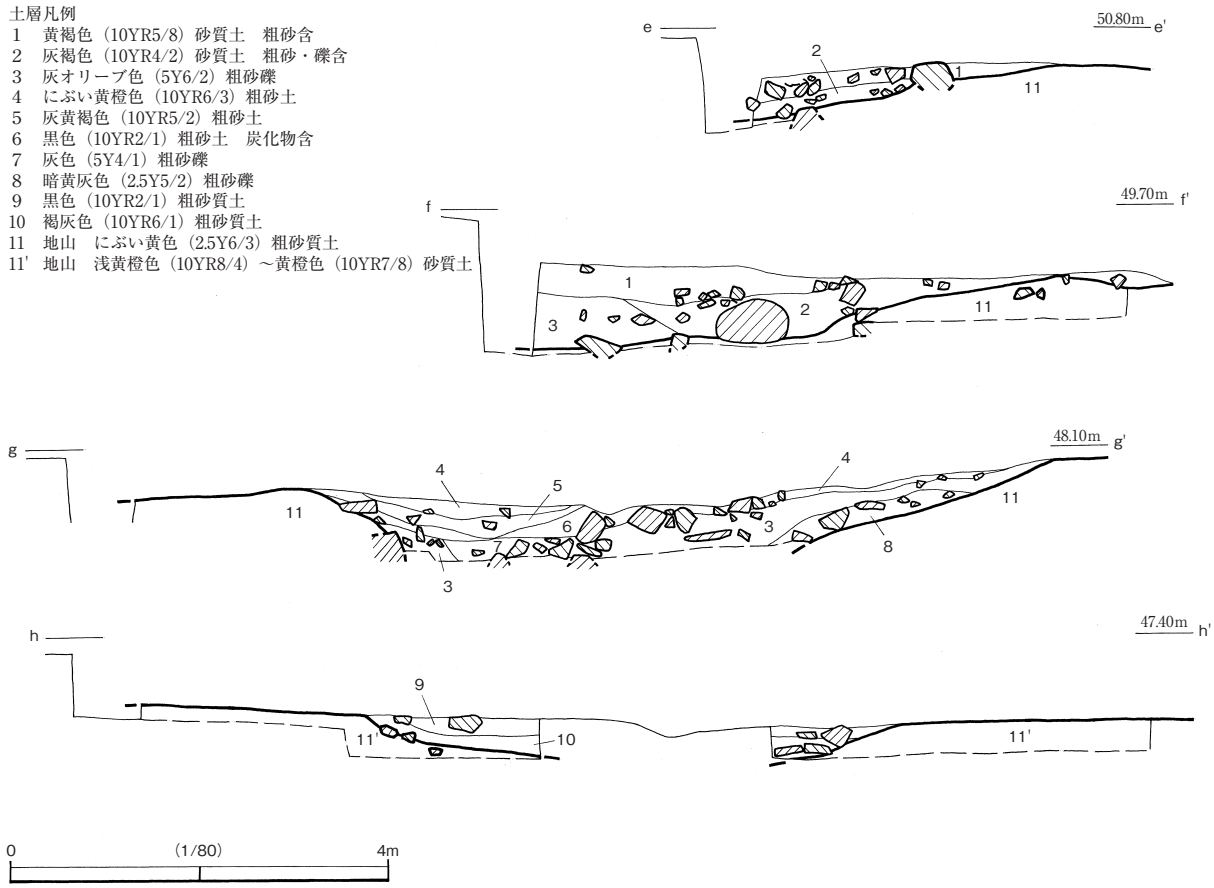


d－d'　土層凡例
1　灰色（7.5Y6/1）砂質土　粗砂
2　オリーブ黒色　（7.5Y3/1）砂質土　弥生土器含
3　灰色（5Y5/1）粗砂層　弥生土器含
4　灰白色（7.5Y7/2）粗砂層
5　地山　明黄褐色（10YR6/8）砂質土

0　(1/80)　5m

第14図　谷部土層断面図

第15図　流路跡実測図



第16図　流路跡土層断面図

石列以東の谷部では弥生土器に加え、Ⅰ－２地区側の斜面から中世土師器や陶器・磁器が少数出土してる。

オ　流路跡（第15、16図　図版12、13）

Ⅰ地区の北側に位置し、調査区内を北西に流れる流路跡である。ベルト部を境界として、西側からA～E区を設定し、調査を行った。

流路は南東から調査区内に流れ込んでおり、平面的には流路の南岸はA・B区間のベルトから2.7mの地点までしか確認することができなかった（第15図）。しかし、その東側にも流路内の堆積層とみられる黒褐色の層が薄く堆積していた。また、壁面の土層観察によって流路内の堆積層である８層および10～12層のうち、８層がA区の東側に延びていることが確認された（第４図）。このことから、流路A区の南岸は掘り込みにより確認された部分からさらに東南に約12m延び、調査区外に抜けると推定される。なお隣接する「井ノ山遺跡」Ⅱ地区でも流路跡が確認されており、方向から考えて延長部分にあたるとみられる。流路の流れはB区からC区にかけての部分でやや方向を変えており、この部分で蛇行あるいは分岐すると考えられる。D区からE区では調査前から湧水が確認されており、細い流れを保っていた。この部分では、湧水のため、流路の最下床を検出するには至らなかった。流路跡の幅は約５～９ｍで、深さは確認できる範囲では最大で約１ｍである。

流路内からは、弥生土器を中心に分銅形土製品（164）、紡錘車（193）等が出土した。遺物はB区からC区に集中しており、流路の南側から最も深い部分にかけて濃い分布を示していた。流路跡の南

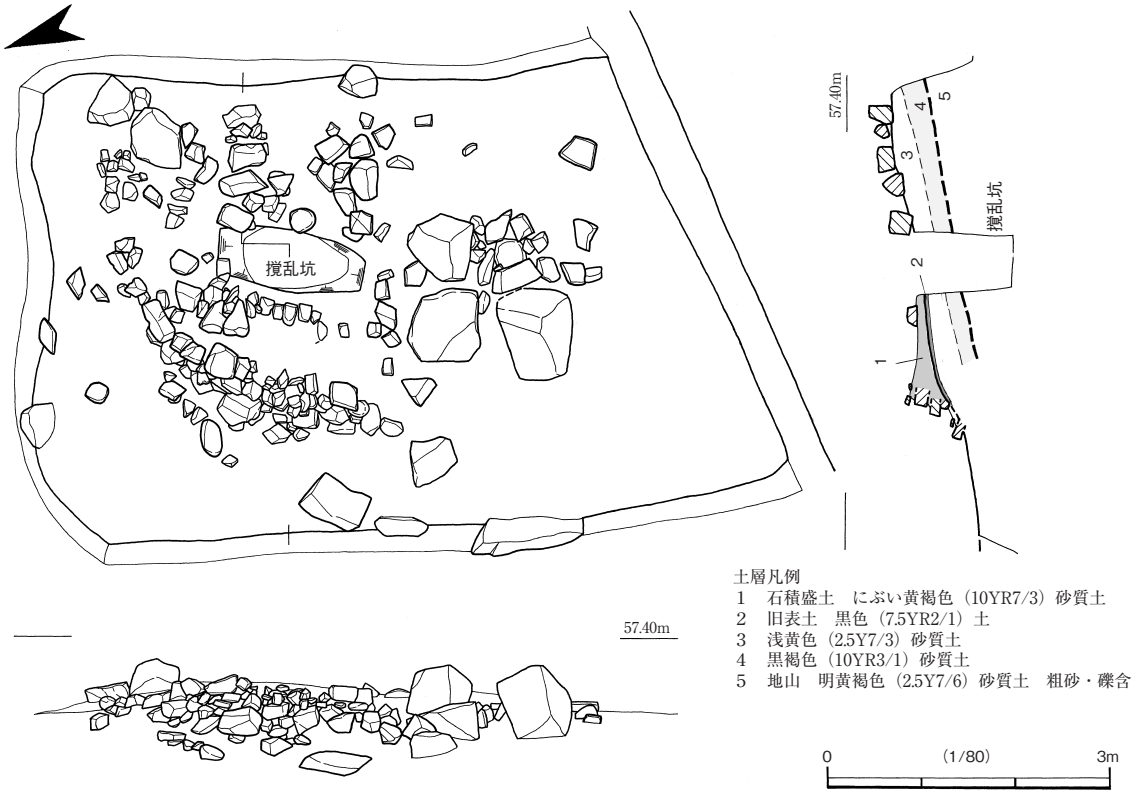
には弥生時代の生活跡が広がっており、特にＳＢ１・２が流路Ａ～Ｃ区に近接していることが遺物の出土状況と関係していると考えられる。

カ　集石遺構（第17図　図版16）

Ｉ－２地区の東側、標高57m付近のＩ地区で最も高位となる丘陵上に検出された石積みの遺構である。調査前にすでに石積みの一部が露出して、その周辺は径２～３ｍ、20㎝程度のマウンド状の高まりとなっていた。またその中央には長さ1.6m、幅80㎝、深さ1.2mの坑が掘り込まれており、近年の攪乱坑とみられる。周辺が見渡せる丘陵頂部に近い立地で石積みが確認されたことから、墳墓または経塚の可能性があるため、トレンチによる土層観察をしながら、人力による表土除去で石積みの検出を行った。

調査の結果、南北3.2m、東西2.5mの範囲に、10～50㎝の花崗岩を中心とした自然礫の集石や石積みが確認された。攪乱坑の北西側には約3.6mにわたって弧を描くように石積みが巡っている。高さは最も残存状況が良いところで80㎝、４～５段の扁平な石材を乱雑に平積みにしている。石積みは両端が欠失しているため、その規模や展開の仕方については明らかでない。この石積みの東側（攪乱坑の東側）には20～50㎝の礫を集石し、南側には80～100㎝の自然礫が露頭していた。

これらの石積みや集石下の土層確認を行った結果、石積みを積み上げる基底面には５㎝ほどの黒色土が堆積していたことから、これは構築前の旧表土とみられ、その下層にはＩ地区全般にみられる表土下堆積土、包含層（旧表土）、地山の層序で堆積する。よって石積みは斜面低位側の旧表土上に直接積み上げ、その背後ににぶい黄褐色土を客土し平坦面を作っている状況がみてとれる。高位側には旧表土がないことから、これを排して若干の基底面成形を行い、整地面との高低差を調整したとみら



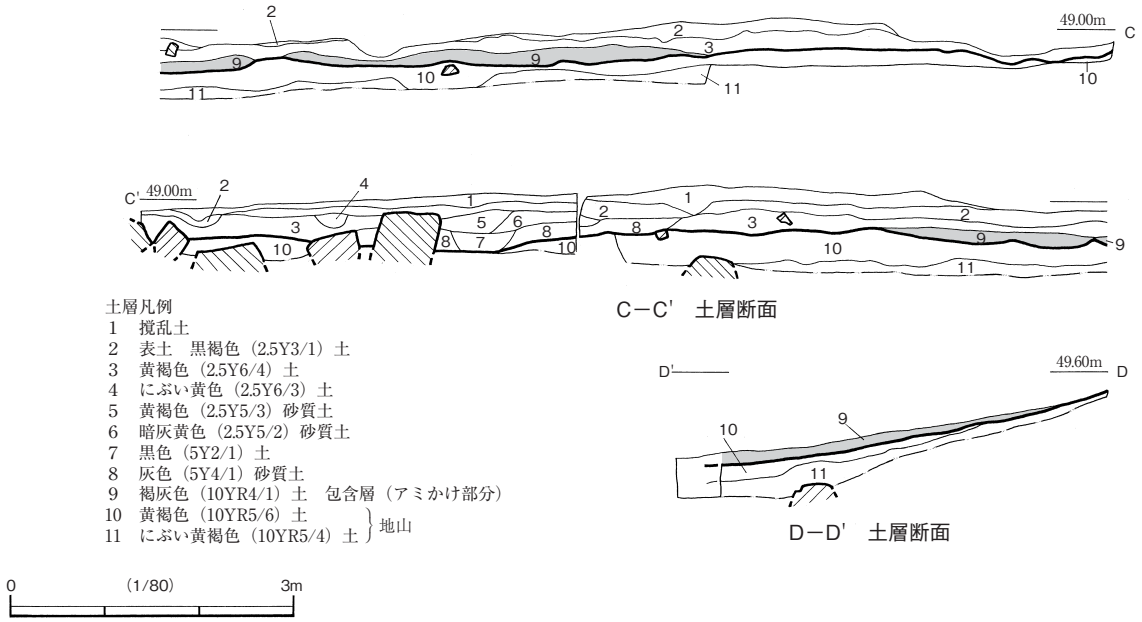
第17図　集石遺構実測図

れる。なおこの整地面上には柱穴や礎石等の遺構は確認されていない。出土遺物は石積みや集石の検出時に中世土師器坏（155）、すり鉢（156）、焙烙（157）、丸瓦片（163）が出土した。

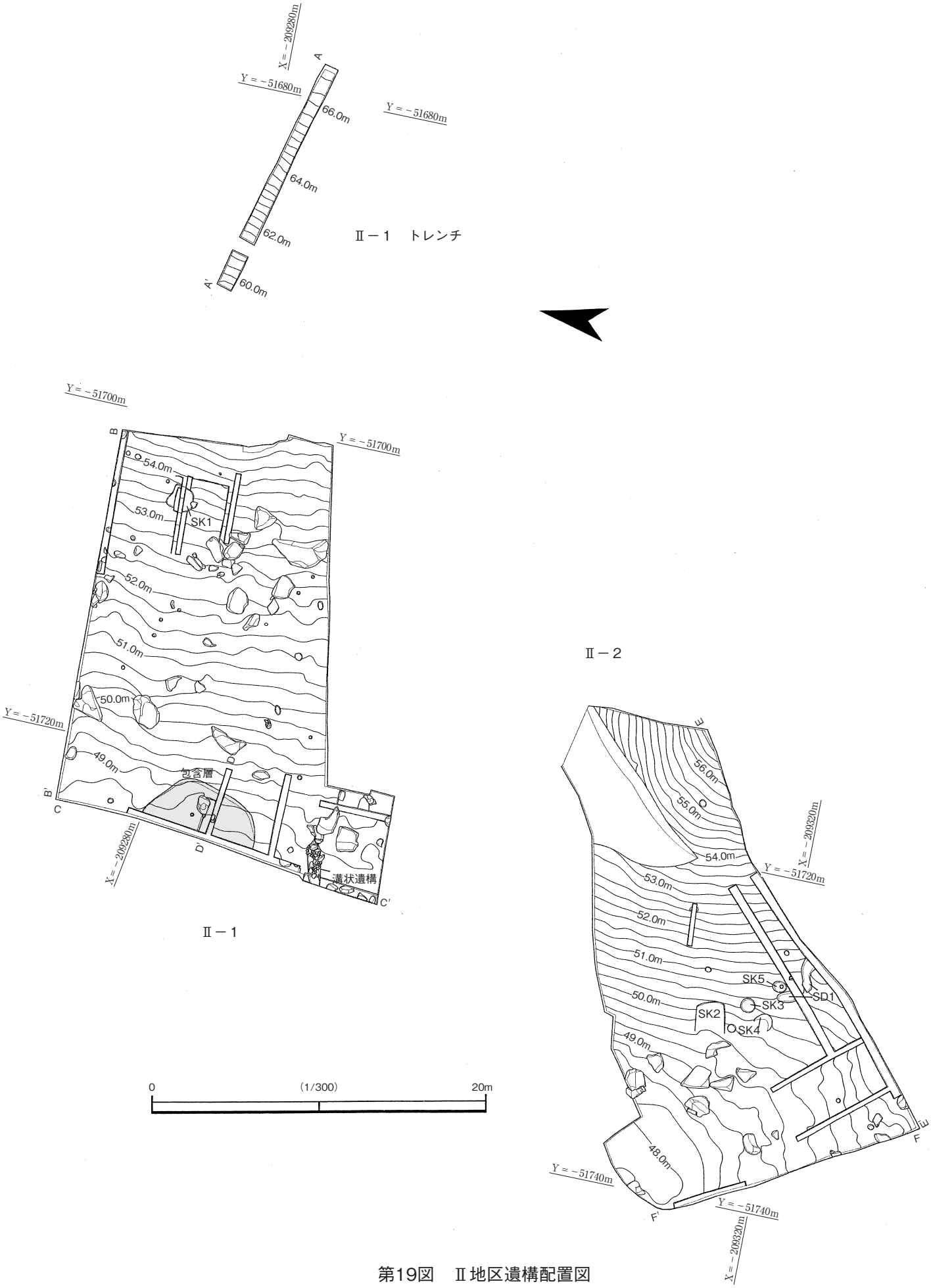
この遺構の性格は、中央部の攪乱坑によって不明確な部分はあるが、石積み下の基底面に墓壙などの遺構は確認されていないことから、経塚、墳墓の可能性は低いとみられる。簡易な石積みによって斜面に部分的な平坦面を構築しており、周辺から中世土師器、瓦片が出土（これより下位斜面でも３点の平瓦片が出土）していることを考慮すると、中世期における祠等の小規模な建物基礎であった可能性がある。なお柱穴、礎石等は自然礫を多く含む堆積層によって明瞭でなく、建物規模については判然としない。ただ地形などから判断してこのような施設があるとすれば、この遺構より高位側に存在していたとみられる。

（２）Ⅱ地区（第18～23図　図版17、18）

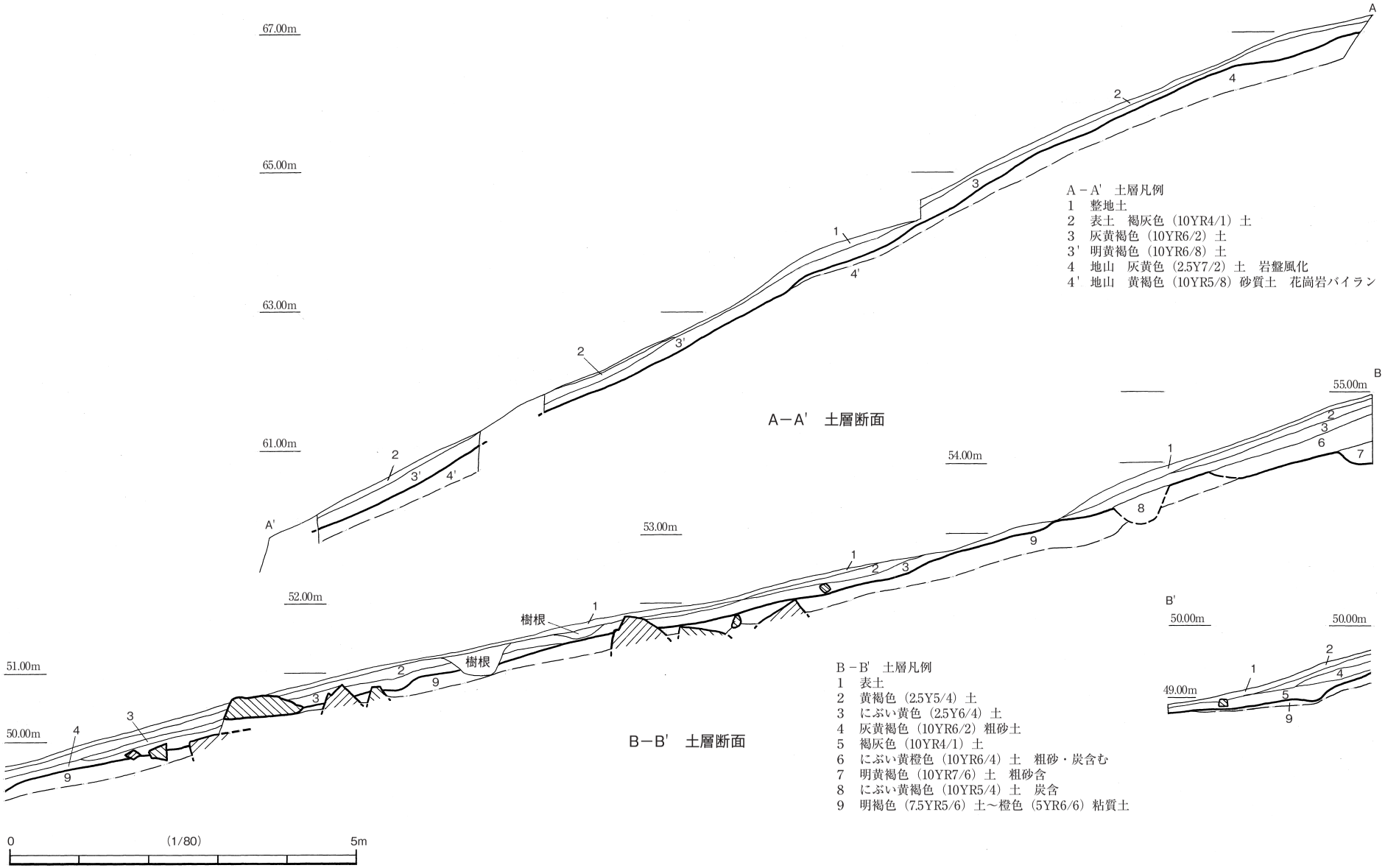
南北約50m、東西約70mにおよぶ調査対象地は、中間部で谷によって分断されていることから、谷より北をⅡ－１地区、南側をⅡ－２地区として調査を実施した。両地区ともに松尾山から派生する丘陵が張り出すことから、東半は西側に向かって急傾斜面であり、西半は佐波川へ下る緩斜面となる。遺構の分布状況は非常に薄く、建物跡等は検出されなかった。検出された遺構は、土坑５基、柱穴32個、溝状遺構２条である。また、Ⅱ－１地区の緩斜面で遺物包含層が確認された。Ⅱ地区の土層断面観察の結果（第20、21図）、地山は急斜面が花崗岩のバイラン土である。緩斜面に至っては粘質性が強い砂質土でしまりが強い。斜面からの堆積土で安定していることから、これを地山（遺構面）と判断した。検出された包含層や、土坑等はこの面より掘り込まれている。また、Ⅱ－１地区東側急斜面については、トレンチ調査を行ったところ、堆積土中から弥生土器片が出土したが遺構は確認されなかった。地形的にみて他に遺構が存在する可能性は低いとみられるので、この範囲については全面調査は行わなかった。出土遺物は縄文土器、弥生土器が出土するが、いずれも包含層や遺構検出時のものである。このうちⅡ－１地区からは縄文時代後期の土器、Ⅱ－２地区からは早期の押型文土器が出



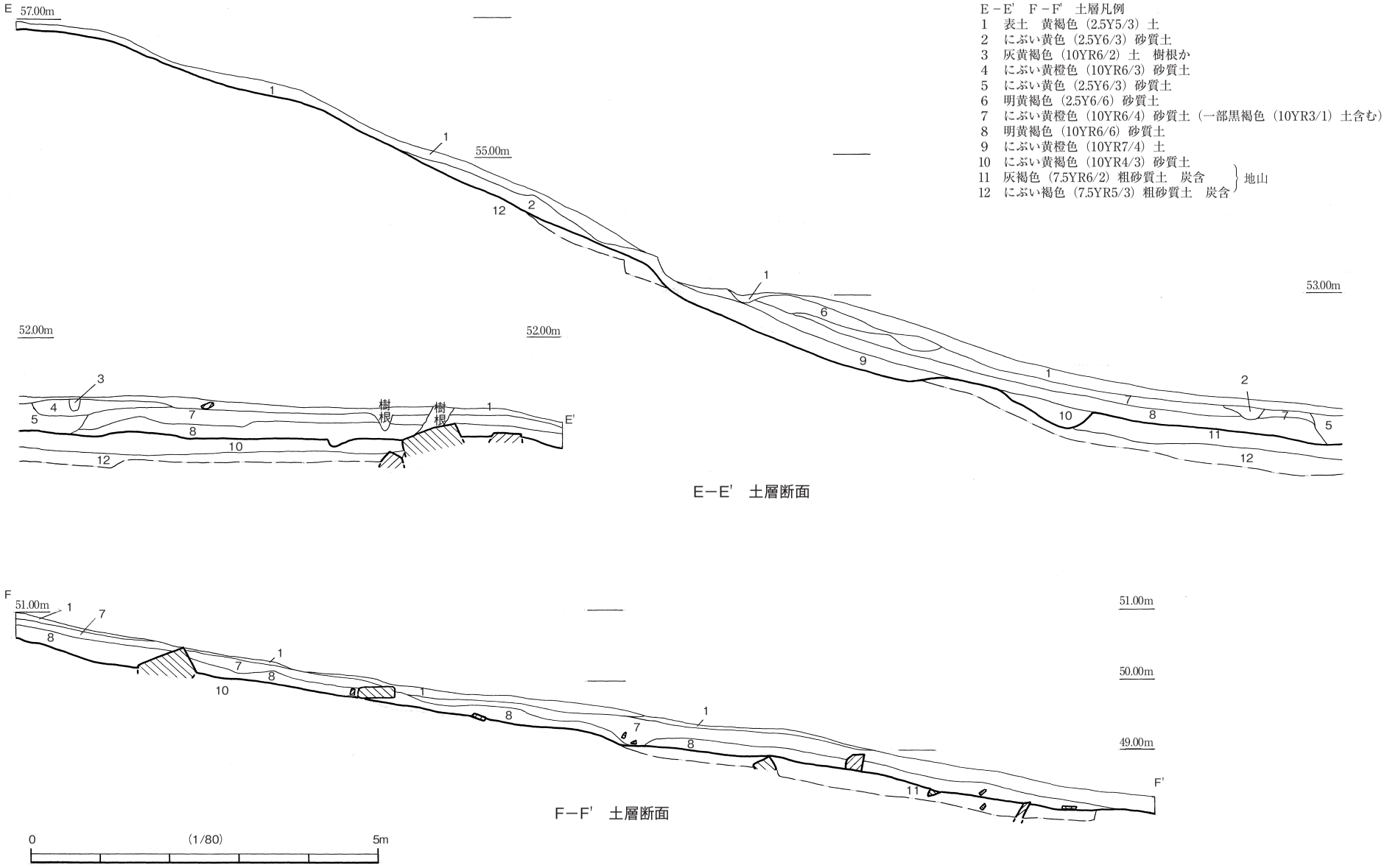
第18図　Ⅱ－１地区土層断面図（１）



第19図　Ⅱ地区遺構配置図



第20図 Ⅱ－1地区土層断面図（2）



E－E'　F－F'　土層凡例
1　表土　黄褐色（2.5Y5/3）土
2　にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土
3　灰黄褐色（10YR6/2）土　樹根か
4　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
5　にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土
6　明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土
7　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（一部黒褐色（10YR3/1）土含む）
8　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
9　にぶい黄橙色（10YR7/4）土
10　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
11　灰褐色（7.5YR6/2）粗砂質土　炭含　} 地山
12　にぶい褐色（7.5YR5/3）粗砂質土　炭含

E－E'　土層断面

F－F'　土層断面

第21図　Ⅱ－２地区土層断面図

土し、注目される。弥生土器はＩ地区と同様に弥生時代中期に属するものであり、かつ急斜面部分からも出土している。このことは調査区外の丘陵高位に遺構が存在することを示すもので、この時期の遺跡の広がりを示す資料である。

ア　包含層（第18、19図　図版18）

Ⅱ－１地区西端の緩斜面から平坦面にかけて検出された。当初範囲が半円形で、竪穴住居跡の可能性があったが、掘り込みにより壁面、床面の柱穴等が確認されなかったことから、上位からの堆積による包含層であると判断した。範囲は南北方向に約７ｍ、東西方向に約３ｍである。褐灰色土で、厚さは最大16㎝である。層内からは縄文土器（１～５）、弥生土器（146）が出土した。この包含層は西側調査区外に向かって更に拡がっているものと考えられる。

イ　溝状遺構（第22図　図版18）

Ⅱ－１地区南西端に位置する。遺構の掘り込み時に褐灰色砂質土中から板状の石材が検出されたことから、石棺の可能性も考えられたが、石材は西へ流れる溝状の中にあり、大きさも不揃いで不規則に折り重なるようにあることから、石棺ではないと判断した。ただ立石状のものあり、検出した範囲では人為的に組んだものかどうかは明らかでない。谷に隣接して西に流れ下ることから小さな流路であり、その流れを石材で調整したとも考えられるので、ここでは溝状遺構として取り扱う。規模は、幅70㎝～95㎝、深さ20㎝～40㎝で、残存長は3.5ｍを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

ウ　土坑（第23図　図版17、18）

土坑はⅡ－１地区から１基、Ⅱ－２地区から４基の合計５基が検出された。Ⅱ－２地区の土坑は中央部やや南側の急斜面から緩斜面に変わる転換点に集中している。いずれも埋土は明褐色系の砂質土の単層で、遺物は出土していない。以下、各土坑について説明する。

ＳＫ１（第23図　図版17）

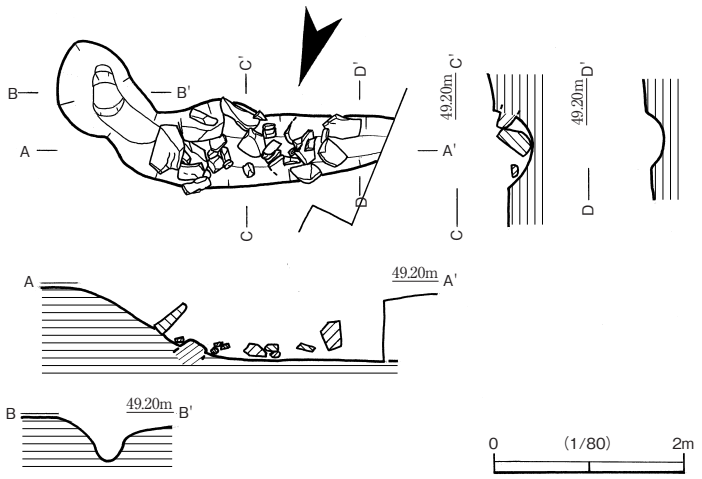
Ⅱ－１地区北東部の斜面上部に位置する。平面形は不整形を呈しており、規模は長軸170㎝、短軸は143㎝、深さは最大10㎝である。

ＳＫ２（第23図　図版18）

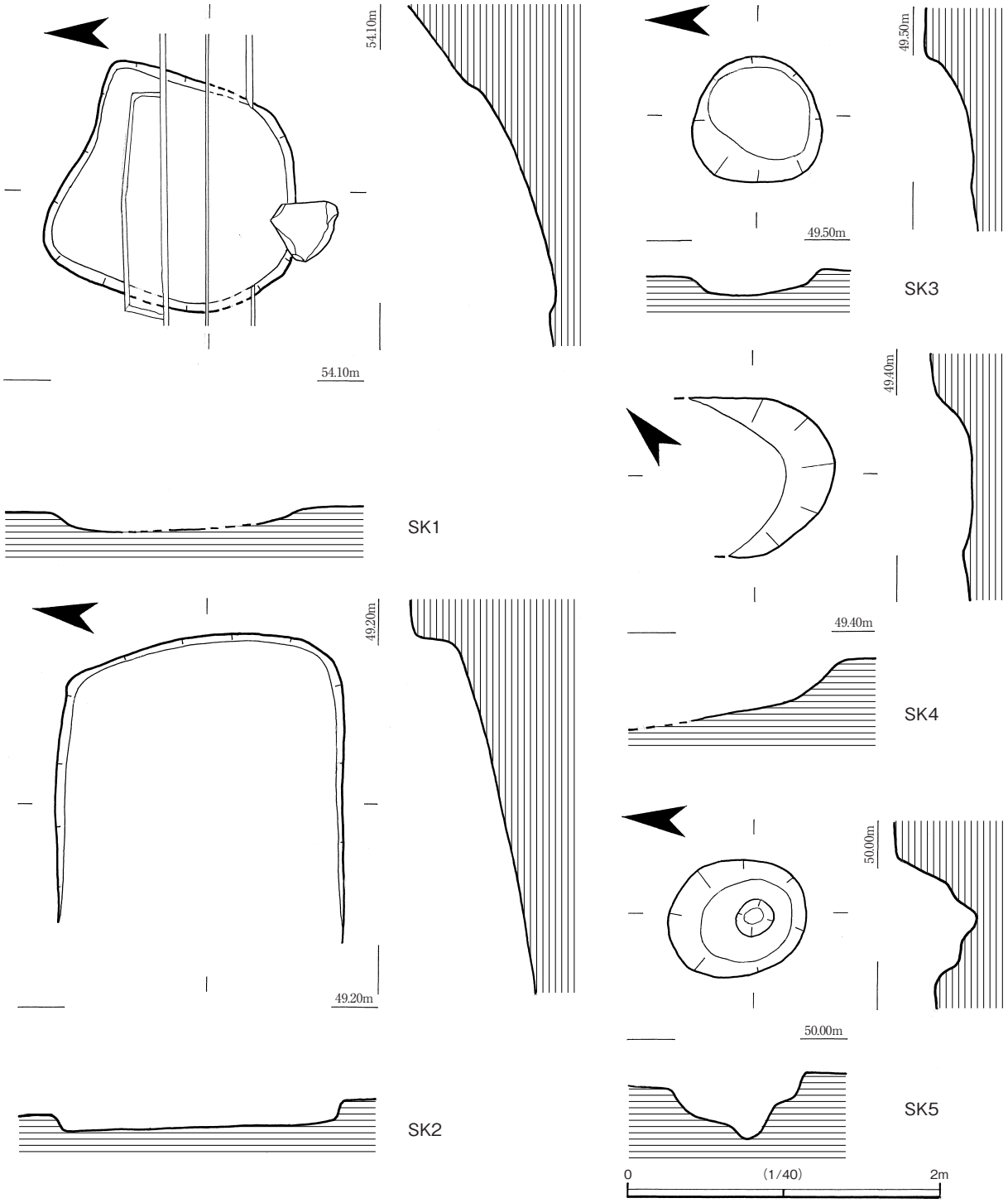
Ⅱ－２地区中央部に位置する。斜面上に掘り込まれているが、段状にカットされているため、床面は緩やかな傾斜となっている。平面形は西側が欠けているが、長円形を呈しており、長軸190㎝、短軸185㎝、深さは最大15㎝である。

ＳＫ３（第23図　図版18）

Ⅱ－２地区中央部、ＳＫ２の南側に位置する。平面形は円形を呈しており、規模は直径80㎝、深さは最大10㎝で、他と同様、斜面上に掘り込



第22図　溝状遺構実測図



第23図　Ⅱ地区SK実測図

まれているため、西側になるほど浅くなっている。

ＳＫ４（第23図　図版18）

Ⅱ－２地区中央部、ＳＫ３の西側に位置する。平面形は北西部分が欠落しているため、不明である。残存最大長は100㎝、深さは最大20㎝である。

ＳＫ５（第23図　図版18）

Ⅱ－２地区中央部ＳＫ３の南側に位置する。平面形は長円形で２段に掘り込まれており、上面は長軸90㎝、短軸75㎝、深さは最大25㎝、下面は円形で直径25㎝、深さは最大20㎝である。

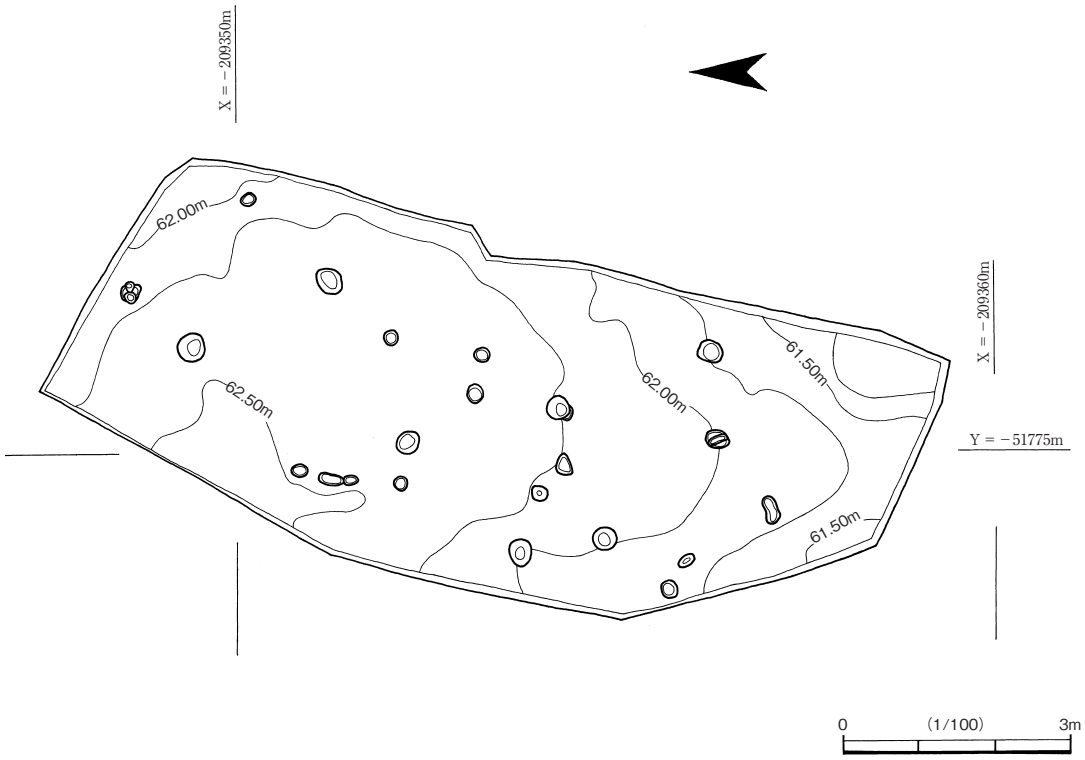
（3）Ⅲ地区（第24図　図版19）

Ⅰ、Ⅱ地区が松尾山から佐波川へむかって派生する丘陵部にあるのに対し、Ⅲ地区は、小野ライスセンターの南側、佐波川に平行して南北にのびる標高80mの独立丘陵から、北へ派生した丘陵先端部に位置する。標高は62mである。調査地は周囲との比高差が約20mで、佐波川上流から防府平野までが一望できる良好の地であり、約70㎡の平坦部が存在する。このうち約46㎡について、今回農道予定地として調査対象となった。

基本層序は、表土（腐植土）約10㎝下に花崗岩風化土の地山が認められ、この面で遺構が検出された。

調査の結果、径20～30㎝の柱穴が23個確認された。深さは残存状況が良いものが40～60㎝、浅いもので20㎝を測る。柱穴の埋土は、全て褐色または黄褐色の砂質土である。このうち調査区中央部に深い柱穴が位置する傾向があるが、これらの配置から復元できる建物跡は確認できていない。調査外に平坦面が続くことから、おそらく柱穴等の遺構が存在するとみられ、それらとの組み合わせで建物跡等の施設が復元できる可能性がある。

出土遺物は表土除去後の遺構検出時に発見された弥生土器壺（148）のみであり、柱穴内からは遺物の出土は確認されていない。そのため柱穴群の時期は明らかではないものの、調査区南側の丘陵高位には弥生時代の高地性集落が埋存していることを考え合わせれば、弥生時代のものである可能性が高いと考える。この場合、面積が狭いことから数軒の住居跡が存在する可能性は低く、南側の高地性集落とは尾根筋によってつながっていること、また佐波川など周辺が一望できる地理的条件からすれば、見張り場所として機能していたとみるのが適当であり、それらの施設に関連する柱穴群と考えられる。



第24図　Ⅲ地区遺構配置図

２　遺　物

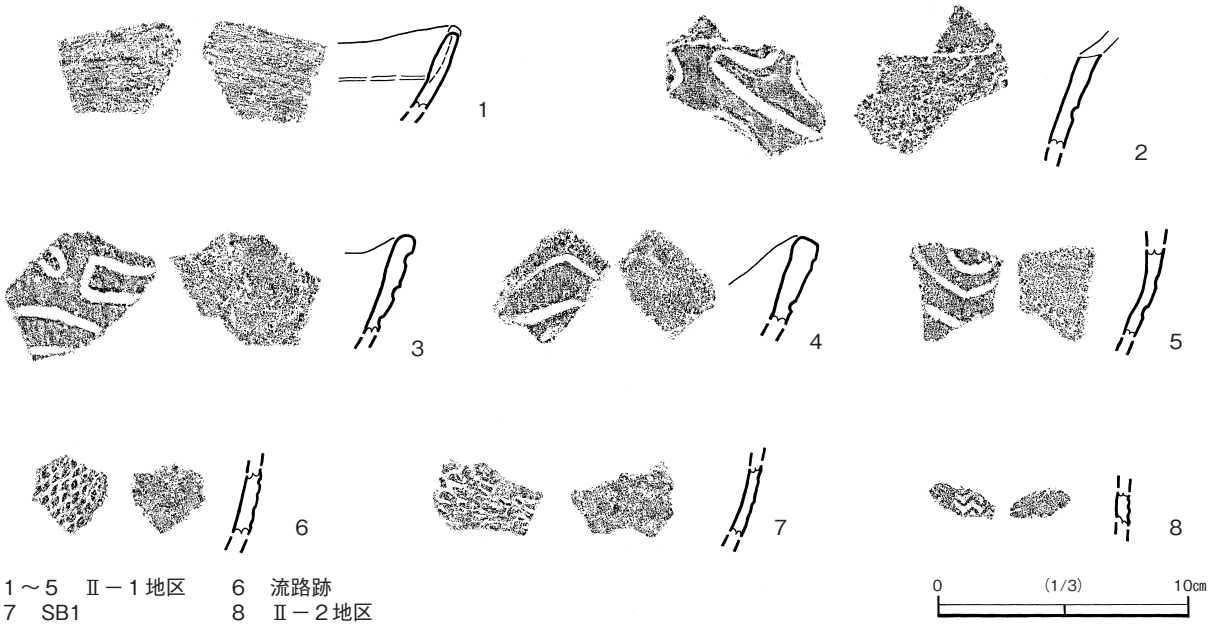
今回の調査では多数の弥生土器をはじめとして、石器、鉄器、土製品などの弥生時代遺物が確認され、それ以外では縄文土器、古代以降の土器・陶磁器・瓦が出土した。ここでは弥生時代の遺物を中心に、各時代ごとの土器について触れ、その後土製品、石器、骨角製品、鉄器について述べていく。

（１）縄文時代の土器（第25図　図版20）

今回の調査では８点の縄文土器片が出土した。いずれも遺構に伴わず、包含層などの堆積土中から出土したことから、原位置を留めるものではない。

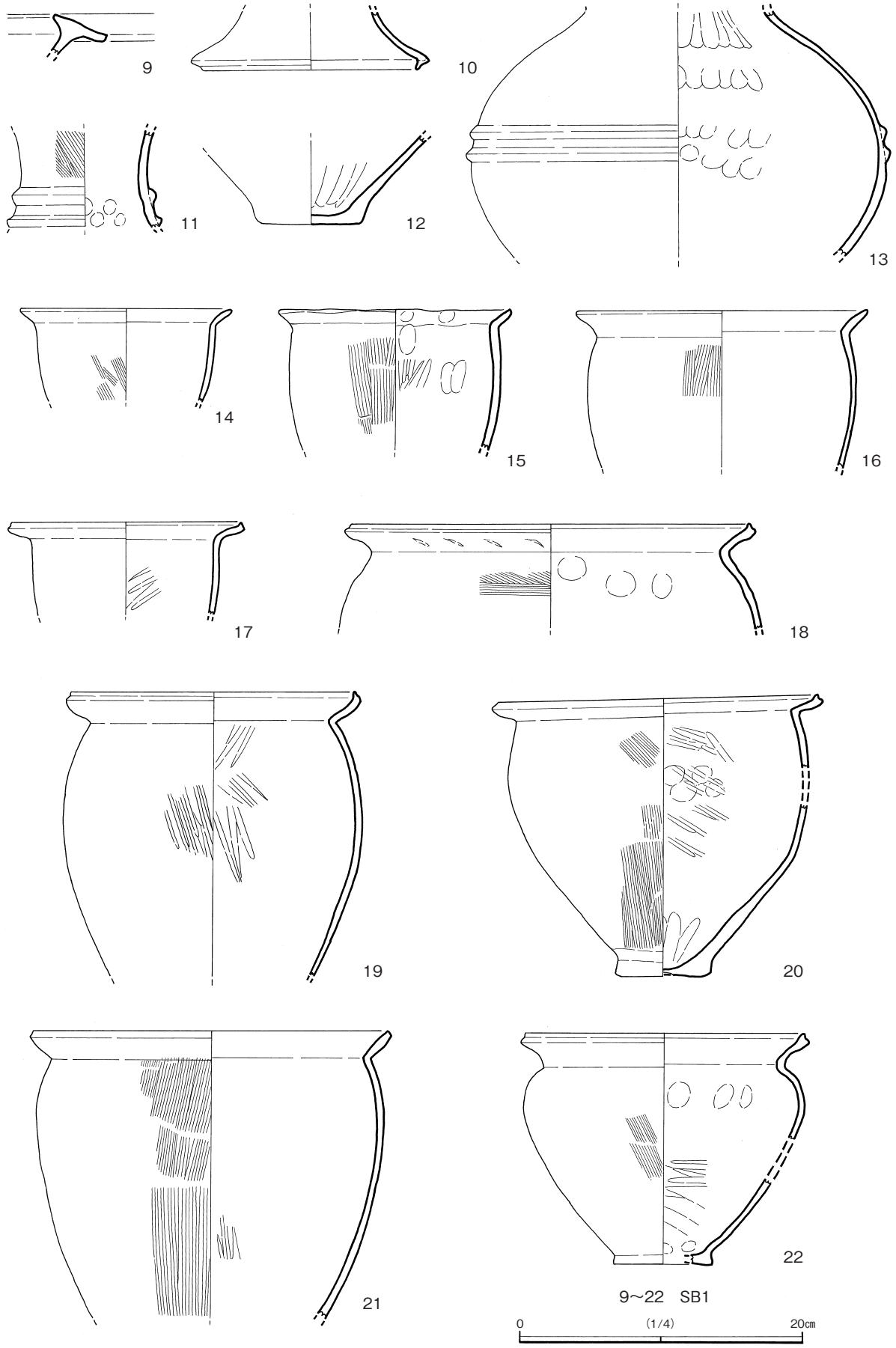
１～５はⅡ－１地区の包含層から出土した。１は無文の深鉢である。器形は緩やかな波状口縁で、口縁内面をやや肥厚させる。調整は貝殻条痕を施したのち、ナデ調整。２～５は沈線文を持つ土器片である。いずれも太さ３～４mm程度の沈線を施すのみで、縄文による施文はみられない。２は深鉢で、口縁部から胴部の境界にあたる部分である。３、４は波状口縁片である。４は波頂部が鋭角に近く、肥厚した口縁部の厚さは１㎝である。沈線文は口縁に沿うように描かれている。５は曲線的な沈線文をもつ。２～５は小片であるため、文様や器形の全体像の把握は困難である。しかし、２、３は２条の沈線を用いて帯状の意匠を描いていることが見てとれることから、後期初頭の中津式の範疇に入ると考えられる。

６～８は早期の押型文土器片である。６は流路跡の埋土中から出土した。外面に楕円押型文、内面にはナデ調整を施している。器壁の厚さは７mmである。胎土は明赤褐色で、細砂を含んでいる。７はＳＢ１の遺構検出時に出土した。外面に楕円押型文を施す。内面は磨滅しており、調整は不明瞭である。胎土はわずかに砂粒を含み、にぶい黄橙褐色を呈す。厚さは６mmである。８はⅡ－２地区から出土した小片で、外面に山形押型文が観察できる。器壁は６mmである。胎土はわずかに砂粒を含み、橙色を呈する。

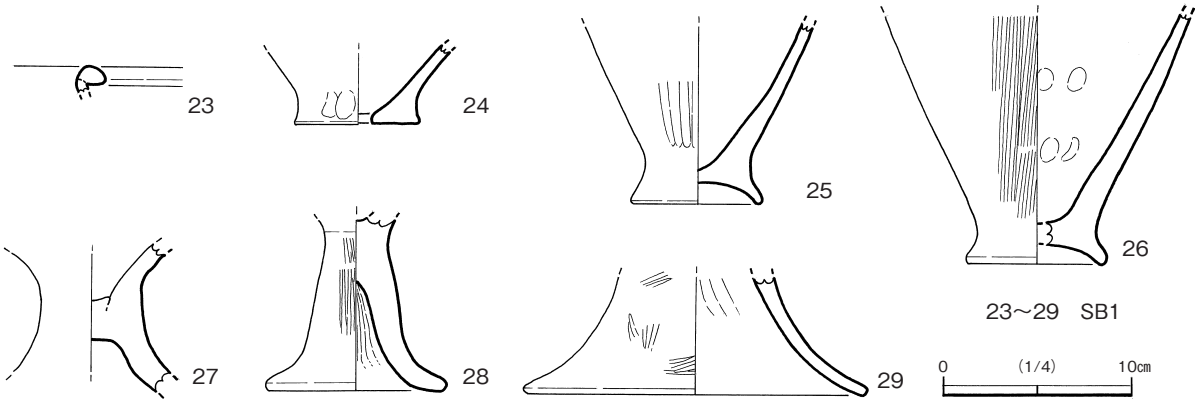


１～５　Ⅱ－１地区　　６　流路跡
７　SB1　　８　Ⅱ－２地区

第25図　出土土器実測図（１）



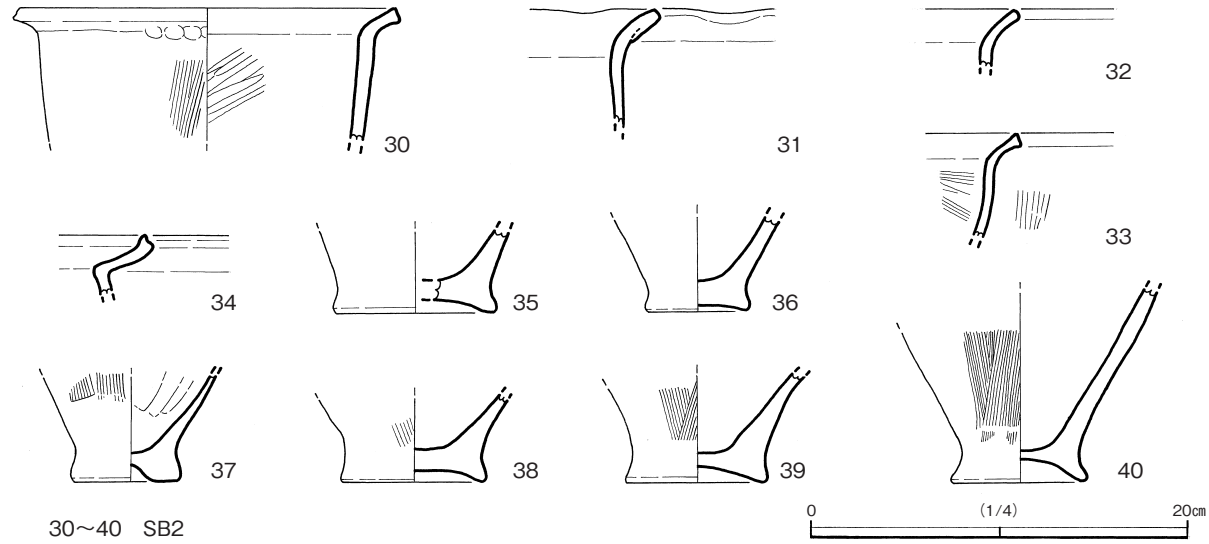
第26図　出土土器実測図（2）



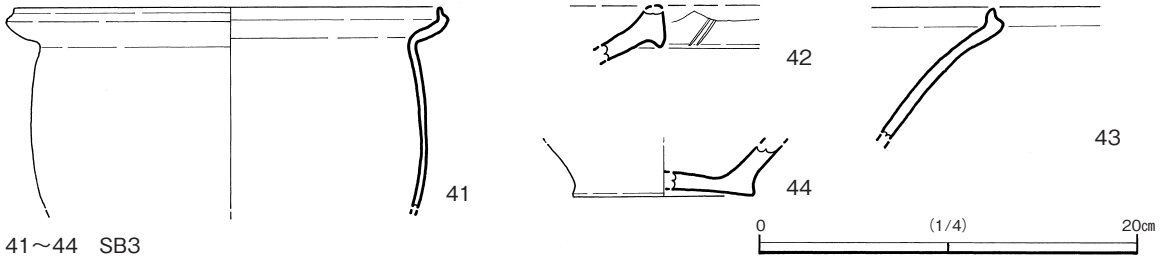
第27図　出土土器実測図（３）

（２）弥生時代の土器（第26～39図　図版20～29）

９～29はSB１出土。９は壺の口縁部片で、鋤先口縁である。10は大きくハの字に開いた高坏の裾部である。裾端部は下方につまみ出すようにして嘴状となる。内外面横ナデ調整。11は壺頸部で２条の三角突帯を有する。外面ハケメ調整、内面横ナデ調整と指圧痕が認められる。12は壺底部。薄い平底で胴部は外傾して立ち上がる。内面には粗いナデ調整。13は大きく張った球形の壺胴部である。最大径部分に２条の貼付突帯を巡らす。外面はミガキ調整、内面はナデ、指圧痕の痕跡が残る。14～22は甕。このうち14～16は口縁部がくの字に外傾し、胴部が張らない甕である。いずれも外面はハケメ調整で、内面は14がナデののちミガキ調整、15はミガキ調整で指圧痕が良く残る。17、18は口縁端部を上方につまみ上げる跳ね上げ口縁の甕である。胴部があまり張らない17に対して18は口縁部径よりも大きく張る形態である。17は外面に煤が付着し、内面はミガキ調整。18は口縁部径が28.0cmと大型で、外面ハケメ調整、内面ミガキ調整を施す。口縁部外面には跳ね上げ口縁整形のためによる圧痕が認められる。19、20は跳ね上げ口縁を有する甕である。19の口縁端部は明瞭な跳ね上げ口縁により凹線状の段差となり、胴部がやや張る。調整は内外面ミガキ調整。20は口縁部が水平近くに折れ、器高が口縁部径よりも低く寸詰まりな印象を与える甕である。外面ハケメ調整。内面ミガキ調整。底部は薄い



第28図　出土土器実測図（４）



第29図　出土土器実測図（５）

平底である。口縁部径23.3cm、器高19.8cm、底径6.8cm。21は口縁部がくの字に曲がる甕で、断面レンズ状に肥厚させ、端部は面を持つ。やや張った胴部で外面ハケメ調整、内面ミガキ調整を施す。22は跳ね上げ口縁の甕で、20同様寸詰まりな形態で、胴部は口縁部径と同じ程度に張り出す。底部は欠損するが厚みの薄い平底であろう。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。外面は全体的に煤が付着し、胴部下半は二次焼成による器面剥落がみられる。底部径7.2cm、器高16.4cm、口縁部径20.6cm。23は断面楕円形の粘土紐を貼り付けて口縁部としており、擬朝鮮無文土器の甕とみられる。24は平底の甕底部で、底面に穿孔が認められる。25、26は上げ底の甕底部。25は外面ミガキ調整、内面は炭化物が付着する。26は外面ハケメ調整、内面ナデまたはミガキ調整。27は高坏の脚柱部で坏部底面の円盤充填の剥離面が明瞭に残る。28は高坏脚部。裾部はハの字に短く折れる。29は裾部が大きく広がる高坏で外面ミガキ調整。

30～40はSB２出土。30～33は短く曲がる甕口縁部である。30は外面はハケメ調整､内面ミガキ調整。31は口縁部の一部が注ぎ口状になっているが、破片であるので、口縁部の歪みである可能性もある。33は内外ハケメ調整。34は水平近くに折れ曲がる跳ね上げ口縁の甕である。35～40はいずれも甕の底部。上げ底の高さにバラエティーがあり、40は最も高く、かつ底部の厚みも薄い。これらの底部は外面ハケメ調整、内面はナデ調整が多い。

41～44はSB３出土。41は跳ね上げ口縁の甕で、外面に煤付着。42は壺口縁部片。端部は上下に拡張し、その端面には山形文とみられる施文の一部が認められる。43は大きく開く壺口縁部で跳ね上げ口縁となっている。44は壺底部。わずかに上げ底となっている。

45～47はSK10出土。45は垂下口縁の壺である。垂下する端面には山形文が施される。46、47は甕底部。断面ハの字に広がる底部で上げ底である。46は内面ミガキ調整。47は外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。

48～50はSK７出土。48はくの字に曲がる跳ね上げ口縁の甕である。49は厚みが薄い甕底部である。50は大型の鋤先口縁壺。外傾する口縁上面には円形浮文の剥落痕がみられる。口縁部の復元径は43.6cmをはかる。

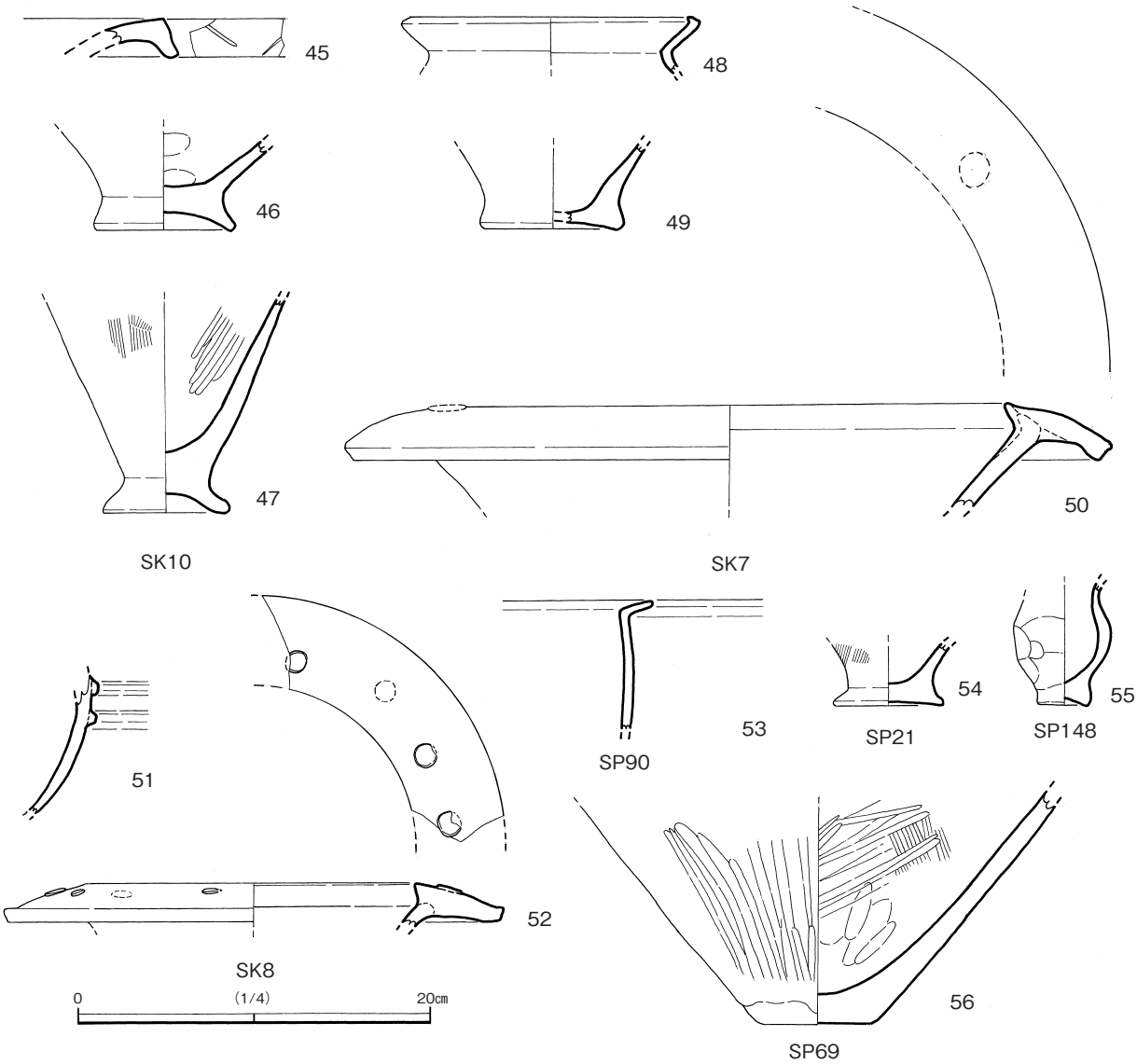
51、52はSK８出土の壺である。52は水平近くに傾く鋤先口縁の壺である。上面には円形浮文が等間隔に４点認められる。51は52と同一個体の可能性のある壺の胴部である。断面方形の低い突帯が２条貼り付けてある。

53～56はSP出土。53はSP90出土で、短く水平に曲がる口縁を持つ薄手の甕である。54はSP21出土。甕の底部で平底。55はSP148出土。ミニチュア土器で、外面には指圧痕やナデ調整が顕著にみられる。56はSP69出土。大型の壺底部で、外面ミガキ調整、内面ハケメ調整ののちミガキ調整。底面付近に

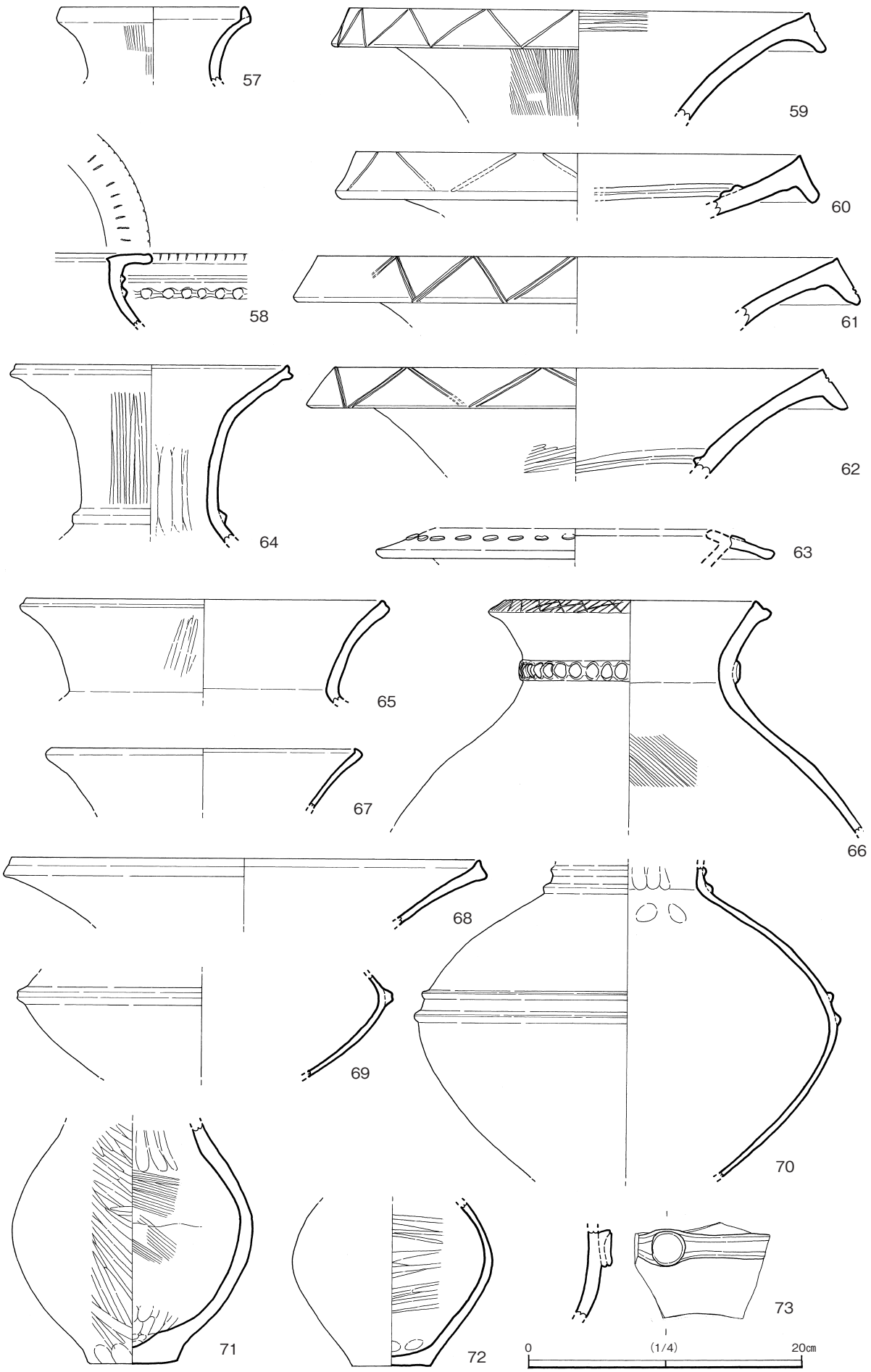
は成形時の粘土接合面が残る。

57～126はⅠ地区調査区の北側に位置する流路跡から出土した土器群である。

57は小型の壺口縁で、外に開いた口縁は内折して上方に短く立ち上がる。外面ハケメ調整。58は水平の鋤先口縁からゆるく外反しながら胴部へ至る壺口頸部である。鋤先口縁の平坦面にはノの字状の刺突文があり、口縁端部にも刻み目を施している。鋤先口縁下には２条の断面三角突帯があり、上段は無文であるが、下段は連鎖状突帯となっている。59～62は垂下口縁の壺口縁である。特徴として大きく開く口縁部で、端部は斜め下方に垂下させる口縁であり、その端面には1条ないし２条単位で山形文が施してある。また60、62は口縁内面に注口状の突帯を貼り付けている。これらの壺の調整は、ハケメ調整を残すか、またはハケメ調整後ナデ、またはミガキ調整を施す。63は鋤先口縁の壺で、上面に円形浮文を等間隔に配列している。64の壺は肩部から上方に立ち上がる頸部を有し、そこから大きく外方に開く口縁部となる。口縁端部はつまみ上げて跳ね上げ口縁状としており、それによって端面には凹線状の段がうまれている。頸部から肩部への屈曲部には断面三角突帯を１条貼り付けている。外面はミガキ調整、内面は頸部成形時の絞り痕が認められる。65の壺は頸部から大きく開く口縁部で、



第30図　出土土器実測図（６）



57～73　流路跡

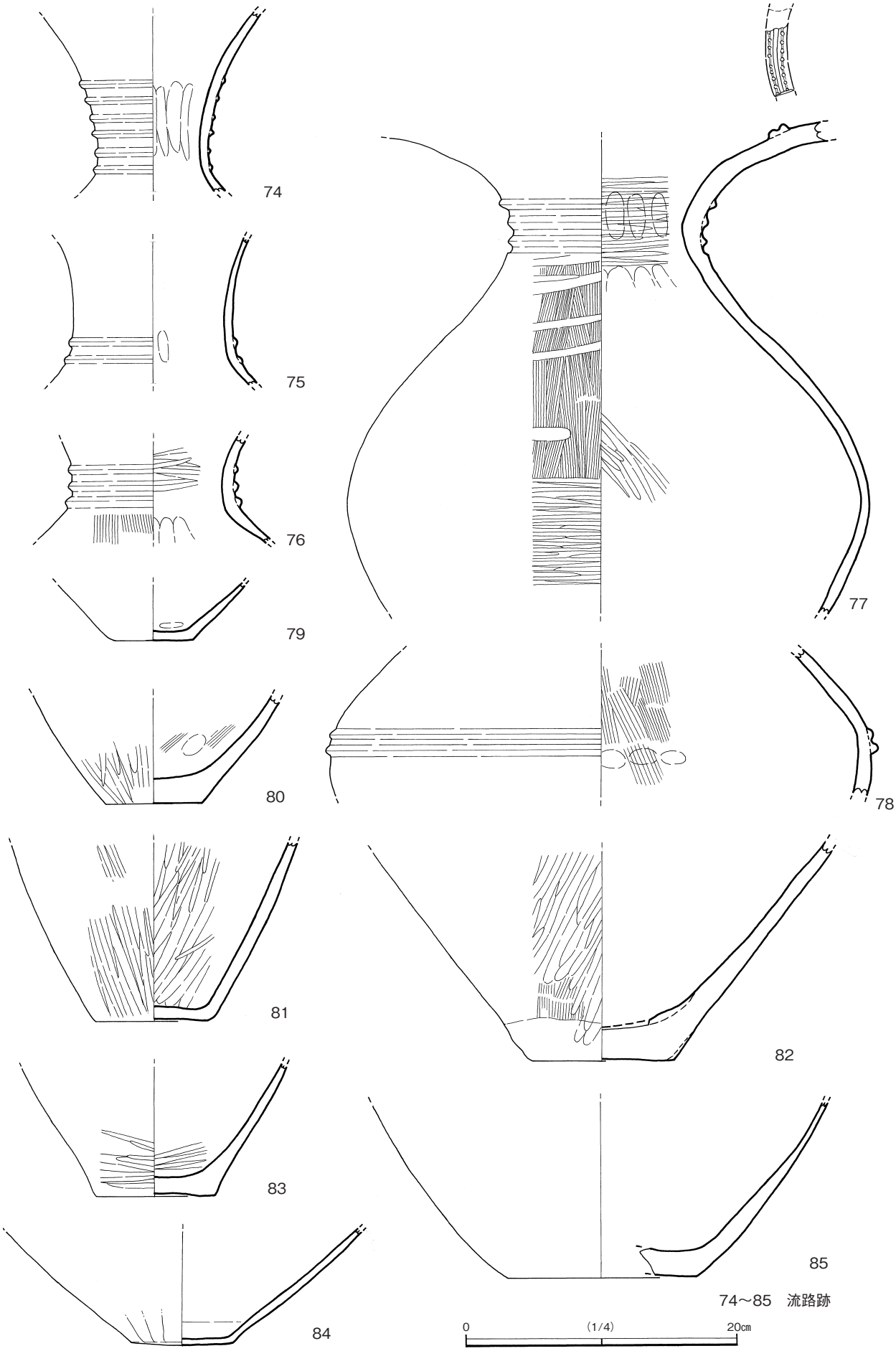
第31図　出土土器実測図（7）

いずれも端部をつまみ上げて跳ね上げ口縁状にしている。外面ミガキ調整。66は球形の胴部にくびれた頸部があり、そこから短く外反する口縁部を有する壺である。頸部には連鎖状突帯を貼り付け、口縁端部にはヘラ描きによる斜格子文を施す。外面ミガキ調整、内面ハケメ調整。67、68の壺は大きく外反する口縁で、端部を跳ね上げ口縁状に短くつまみあげている。なおこれらについては高坏裾部の可能性も考えられる。69、70は偏球形の壺胴部である。69は断面台形の突帯を、70は断面三角形の突帯を２条、最大径部分に貼り付けている。70はさらに頸部に突帯を２条有する。71、72は胴部中位に最大径がくる壺で、いずれも頸部から口縁部を欠損する。底部はいずれも平底。71は外面ミガキ調整、内面ハケメ調整。72は内面ミガキ調整。73は壺胴部片で、断面M字突帯を巡らし、さらに部分的にボタン状の円板を貼り付けている。

74～76は壺の頸部である。いずれも肩部と頸部の変換点から上位にかけて、断面三角形の突帯を有しており、74は6条、75は２条、76は３条貼り付けている。調整は内面にはナデや頸部成形時の絞り痕があり、76では外面ハケメ調整、内面ミガキ調整が認められる。77は大型の壺。中位に最大径がある胴部からゆるやかに頸部に至り、そこから大きく外反して口縁部となる。底部および口縁部は欠損するが、口縁部は垂下口縁になるとみられる。口縁部内面には断面M字で刻み目を有する注口状突帯を貼り付け、頸部には3条の三角突帯を有する。調整は外面下半が丁寧なミガキ調整、上半がハケメ調整を残し、内面はミガキ調整である。外面に丹塗りの痕跡あり。78は壺胴部である。最大径部分にM字突帯を貼り付けている。内面ハケメ調整。79～85は壺底部である。79、84は器壁が薄く、胴部へは外傾して直線的に立ち上がる。その角度から大きく張る胴部を有するとみられる。それに対して80～83は内湾気味に立ち上がるのが特徴である。いずれも平底で、内外面ミガキ調整。82、85は大型の壺底部である。器壁は厚く平底。82は厚手の円板を基に粘土を貼り付け成形していった様子が粘土剥離の痕跡からうかがえる。外面はハケメ調整ののちミガキ調整。

86～92は跳ね上げ口縁の甕である。これらのうち87は水平近くに口縁部を折り曲げて、胴部もあまり張らない。また跳ね上げもわずかである。これに対して他は口縁をくの字に屈曲させている。さらに88～92は内湾気味に丸みを持ち受け部のようなつくりをしている。また胴部も口径よりは張り出す特徴がある。93はくの字に曲がる甕口縁で、端部には２条の凹線が巡り、口縁下には連鎖状突帯を貼り付ける。内面ハケメののちミガキ調整。94は厚く肥厚させた逆Ｌ字状の口縁下に、連鎖状突帯を巡らす。胴部上位が最大径となる張り出した胴部を有し、調整は外面ハケメの後ミガキ調整、内面ミガキ調整を施す。95は口縁下に突帯をめぐらす甕である。98は今回の調査で出土した甕のうち、最大規模となる大型の甕である。厚手の平底でゆるく内湾して立ち上がる胴部はその上位で最大径となり、口縁部はくの字に曲がる。胴部上位には刻み目を巡らし、口縁下には断面三角形のシャープな突帯を貼り付ける。口縁端には刻み目を施文している。これらの刻み目はその圧痕の断面が波状であることから、板目状の施文具というよりは巻き貝などが可能性として考慮される。調整は外面がハケメ調整、内面は口縁のハケメ調整以外はミガキ調整を施している。96は鋤先口縁を有する甕とみられる。97は口縁の屈曲があまい甕口縁で、三角突帯を貼り付けている。

99～106はくの字に曲がる口縁で、口径に対して長い胴部を有する甕である。口縁部の屈曲は99のようにゆるやかであるものと、内面に明瞭な稜線がみられるようなはっきりとした屈曲で端部に面を



第32図　出土土器実測図（8）

持つものとがある。胴部は102のように直線的に立ち上がるものと、103、106のように胴部上位で最大径となるようにゆるやかに内反して立ち上がるものがある。底部は基本的に上げ底で、その高さが低いもの（106）と高いもの（99、100）がみられる。99は器高17.0㎝の小型の甕で、外面ハケメ調整。100は外面ハケメ調整、内面はミガキ調整か。101の内面は口縁部に指圧痕が残り、他はミガキ調整である。102は口縁下に指圧痕が残る。外面はナデを主体に調整、内面はハケメの後ミガキ調整を施す。胴部下半に二次焼成の痕跡が認められる。103は外面ハケメ調整、内面ハケメ調整ののちミガキ調整。104は外面ハケメ調整、内面ハケメ調整ののちミガキ調整。105は内面に指圧痕が残る。106は内外面ミガキ調整。

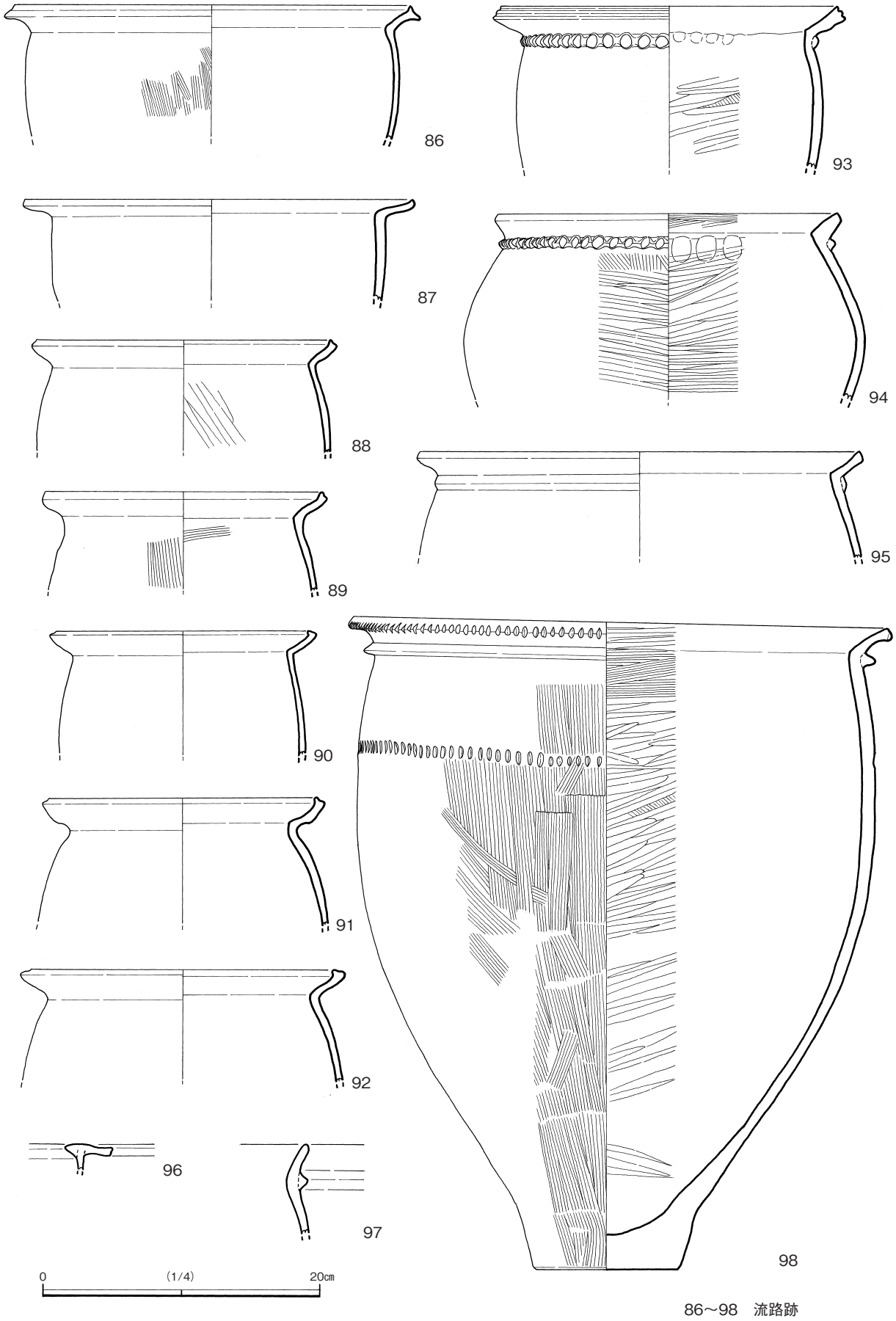
107～115、119は甕底部である。このうち平底の111を除いて他は上げ底の底部であり、低いものと高いものとがある。107は底部から胴部への屈曲部分の幅が狭く、ワイングラスのようにくびれている。外面ハケメ調整。108は内面に炭化物が付着している。109は外面ハケメ調整。110は厚手の底部で、外面に指圧痕が残る。111は平底で胴部は内湾しながら立ち上がる。外面ハケメ調整ののちミガキ調整。外面に成形時の指圧痕が認められる。112は器壁が厚手であることから、大型の甕底部とみられる。114はハケメのちナデ調整を行う。115は外面ハケメ調整。116～118はミニチュア土器である。116、117は底部で、118は小型の底部に球形の胴部からなり、口頸部を欠失しているが、壺を模したものとみられる。成形時のナデや指圧痕が良く残っている。

120はゆるく外反して立ち上がる胴部に口縁付近で最大径となり、口縁部は平坦に終わる。口縁端部には刻み目を施す。底部は欠損する。口径で４分の１ほどの破片であるため、全体の形状は定かでないが、ジョッキ形の土器とみられる。調整は外面がハケメ調整を施す。121はジョッキ形土器の取っ手とみられる破片である。122は鉢である。厚手の底部はやや上げ底で、胴部は外傾して立ち上がり、短く折れて口縁部となる。器壁は厚く、内面調整は口縁部がハケメ調整、その他はミガキ調整である。外面は器面の剥離が著しい。

123～126は高坏である。123、124は鋤先口縁となる坏部で、上面が平坦となるものである。123は端部に刻み目を山形状に施文する。125、126は高坏脚部である。125は脚柱が太く、裾部は大きく広がるとみられる。外面ハケメ調整、内面はハケメの後ナデ調整。126はハの字に広がる裾部で、端部は下方につまみ出して嘴状としている。外面はミガキ調整、内面はナデや絞り痕が認められる。

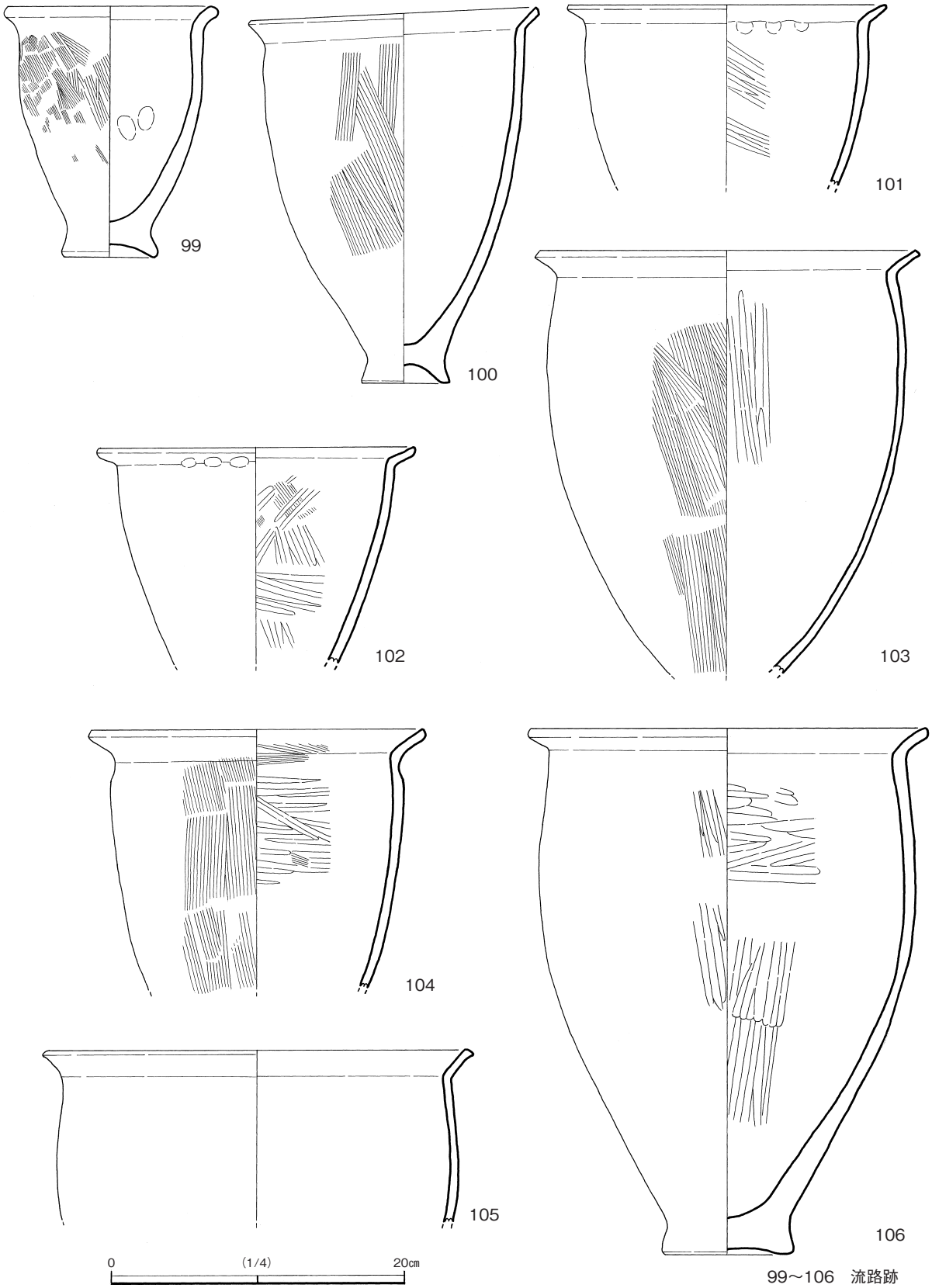
127～133は谷部堆積土中からの出土土器である。谷部からは第13図のとおり広範囲にわたって大量の弥生土器が破棄された状態で出土した。今回は資料整理の時間的制約から、代表的なものについて図化をして掲載し、その他の土器については別稿で紹介することとする。概略を述べると基本的な器種構成は他の遺構と同様で弥生時代中期後半を主体する土器群である。壺は垂下口縁のものが中心であり、鋤先口縁壺もみられる。甕はくの字状の口縁、跳ね上げ口縁の甕が確認されている。

127は小型の壺で、外反してたちあがり口縁部はやや厚みを増して端部は面を持って終わる。端部には山形文を施し、頸部には刻み目を持った低い突帯を有する。128、129は垂下口縁の壺である。頸部に突帯を有し（128）、大きく広がる口縁は端部で垂下する。垂下する端面には山形文を刻む。129は内面に４ないし５重の渦巻き状の突帯を貼り付けているのが大きな特徴である。130は鋤先口縁の壺である。傾斜した口縁上面には円形浮文を配し、端部には沈線を１条めぐらす。131は長頸の壺で、



第33図　出土土器実測図（9）

頸部には７条の低い方形の突帯を有する。内面には指ナデの痕跡がよく残っている。132は甕で、くの字に曲がる口縁は端部に面を持ち、胴部はやや内湾して立ち上がる。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。133は今回の調査で出土した壺のうち最も大型のものである。平底の底部から胴部は上位で最大径となる偏球形で、くびれた頸部から口縁は大きく開き、端部は斜め下方に垂下する。端部には斜

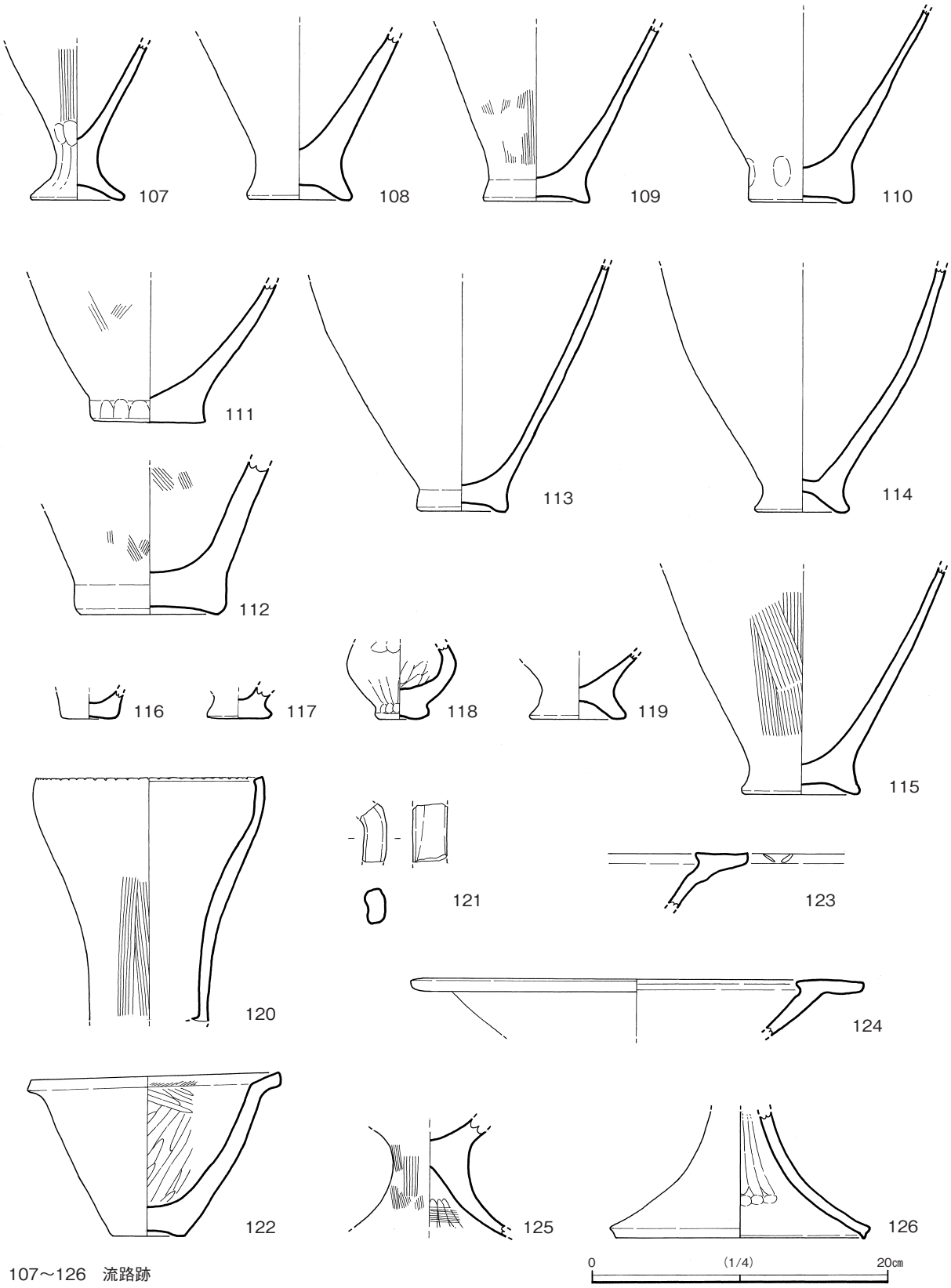


99～106　流路跡

第34図　出土土器実測図（10）

格子文を施し、頸部には連鎖状突帯を２条巡らせる。内面はナデ調整、外面はハケメの後ミガキ調整を行う。器高67.0㎝、胴部最大径60.0㎝、口縁部径43.8㎝をはかる。

134～140はⅠ－１地区遺構検出によって出土した弥生土器である。134はミニチュア土器で、形状から壺を模したものとみられる。全体にナデや指圧痕が明瞭に残る。135は高坏の脚部である。短く



107～126　流路跡

第35図　出土土器実測図（11）

八の字に開く裾部で、外面ミガキ調整、内面ナデ調整。136は短い棒状の脚部である。全体にナデ調整を施す。身部を欠失しているが全体の形状はワイングラス状を呈すると推定される。137、138は鋤先口縁の壺である。大きさの違いはあるがいずれも口縁平坦面上に円形浮文を貼り付ける。139は大きく開く頸部で、７条の突帯を巡らせ、その上に1本の紐状粘土を貼り付けて装飾としている。140は鉢とみられる。上げ底の底部から外傾して立ち上がり、胴部上位で内面に屈曲して口縁となり端部は丸くおさめる。

141、142、145～147はⅡ－１地区、143、144はⅡ－２地区から出土した弥生土器である。このうちⅡ－１地区出土は包含層堆積土中の土器で、Ⅱ－２地区出土は遺構検出時のものである。141～144は垂下口縁の壺である。いずれも大きく開き、端部で斜め下方に垂下する口縁部である。143は垂下部分を欠失するが、他はここに山形文を施している。調整は基本的にハケメ調整ののち、ナデまたはミガキ調整を行う。145は短く屈曲する逆Ｌ字状口縁の甕で、外面には３本の沈線が残存している。146は連鎖状突帯を有し、口縁端部に刻み目を施す甕である。外面はハケメののちミガキ調整、内面はミガキ調整。147は甕底部。上げ底で外面ナデ調整、内面ミガキ調整。

148はⅢ地区出土の弥生土器である。Ⅲ地区からはこの１点のみで、柱穴検出時に地山上から出土した。球形の胴部からゆるく外反して短い口縁部となる壺で、内外面ミガキ調整を丁寧に施す。

（３）古代以降の土器、陶磁器、瓦（第40図　図版29）

149、150は須恵器の坏蓋で、同一個体である。天井部は平坦で、径２㎝のボタン状のつまみをもつ。口縁部と肩部の間には段がみられ、口縁部は鳥嘴状に下垂する。全体に回転ナデによる調整を施すが、内面は天井部付近を静止ナデで仕上げている。ロクロは右回転。

151、153、154は土師器の埦で、いずれも底部片である。151と153は貼り付け高台をもつ。胎土は砂粒をほとんど含まず、緻密である。色調はにぶい黄橙色を呈する。154は高台の復元径が9.6㎝である。胎土は砂粒を含み、やや粗い。152は土師器坏で、胎土は橙色系、長石粒や雲母片を含む。底径は6.4㎝。155は土師器の皿である。口縁径6.0㎝、器高1.1㎝と小型で、器壁は薄い。底部に板目痕がみられる。色調はにぶい黄橙色。156は擂鉢の口縁片である。指で押圧して成形したのち、ナデによる調整を加えており、浅い卸し目がやや斜めに入る。色調は暗赤褐色を呈し、硬質で焼締陶器のような焼成である。157は土師器の焙烙片で、口縁を内側に折り返して成形する。胎土は橙色と浅黄橙色の2種類の粘土を用いている。

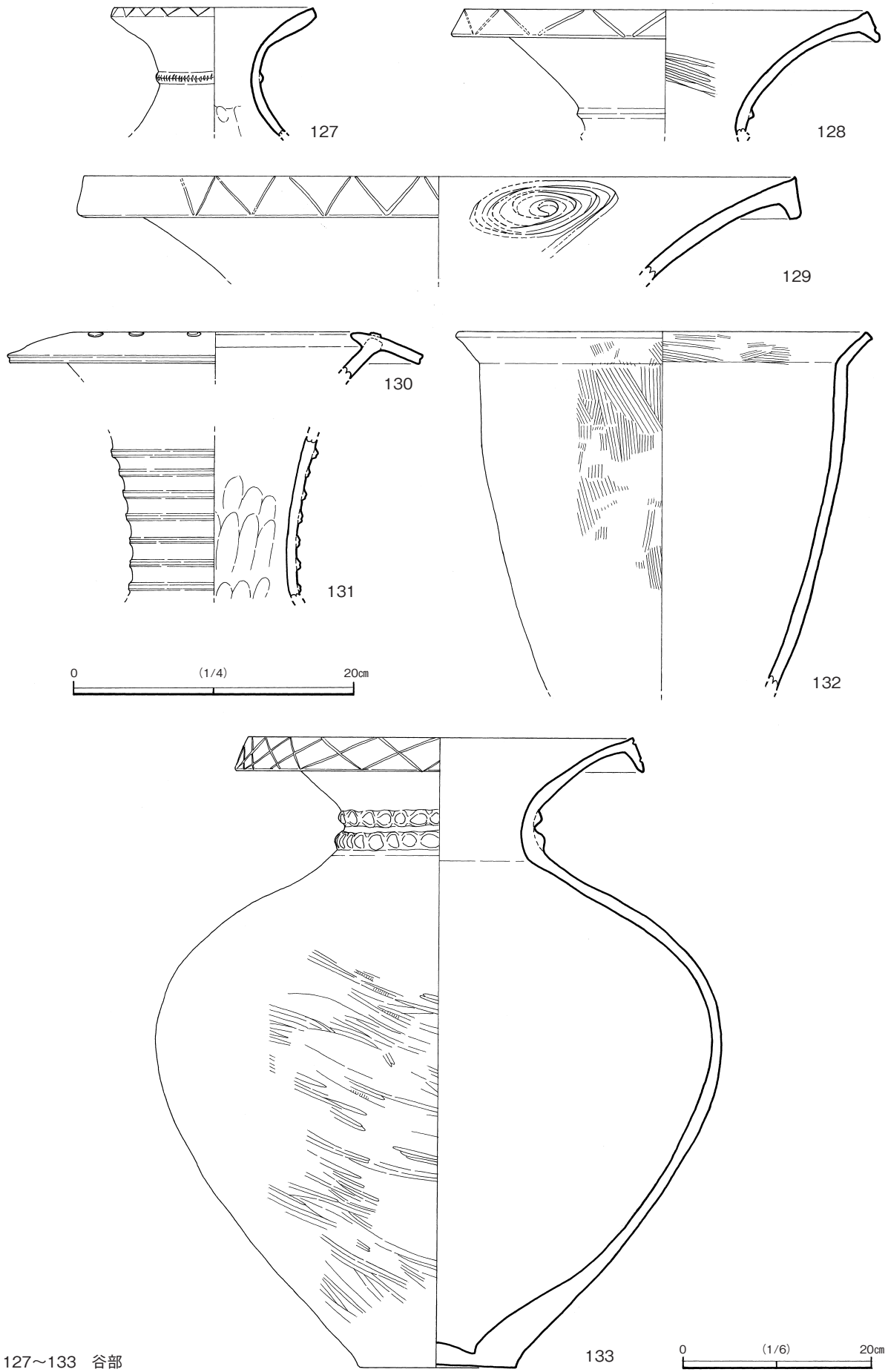
158は瓦質の足鍋の脚部である。指頭により押圧成形したのち、器面を軽くなでてている。

159は青磁の碗である。中国龍泉窯系の14世紀前葉から中葉の製品である。見込みにスタンプ状の工具で鳳凰文を施文する。見込み文様には花卉文が用いられることが多く、鳳凰文を用いる例は稀である。

160～162は平瓦である。いずれも凸面に粒子の粗い離れ砂が付着しており、凹面には板状工具とみられる粗いナデ調整がみられる。色調は160･162が灰色、161がにぶい黄色を呈する。163は丸瓦片か。

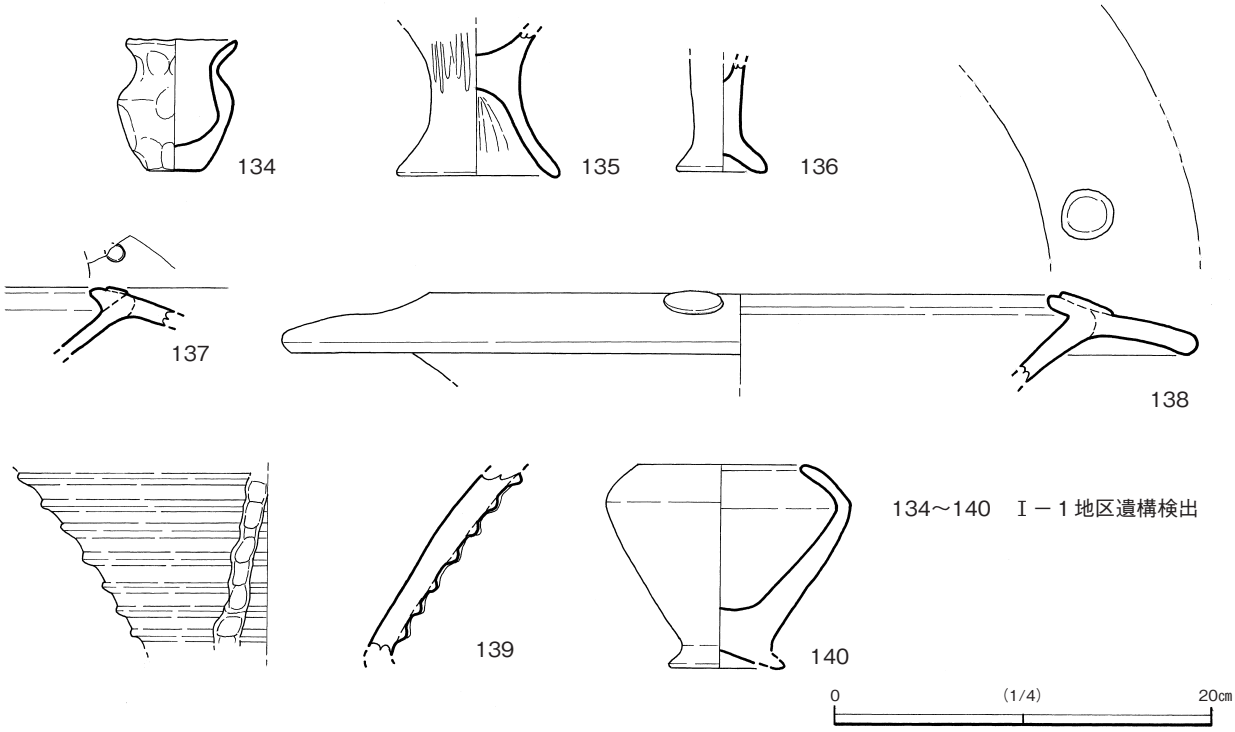
（４）土製品（第41図　図版29）

164は分銅形土製品で、上半部の一部と下半部を欠損している。上面の顔は、眉、鼻が線刻、目は刺突により表現している。頭部には上下二列に刺突文が施してあるが、右半は刺突の深さが浅いため

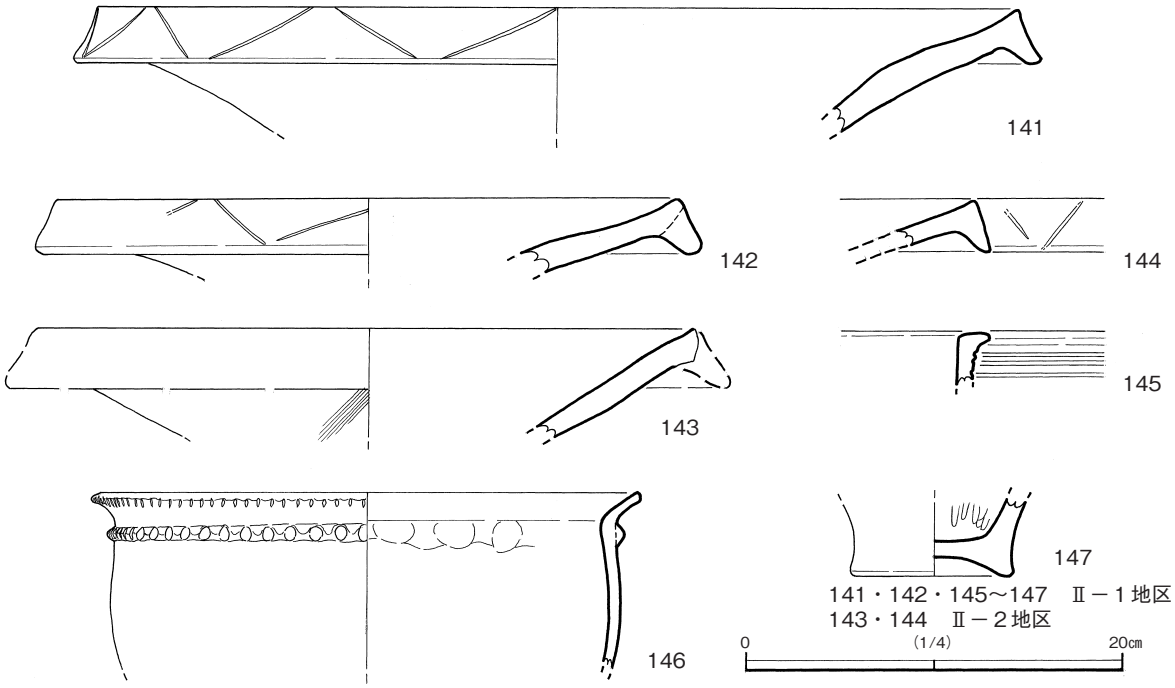


127～133　谷部

第36図　出土土器実測図（12）



第37図　出土土器実測図（13）



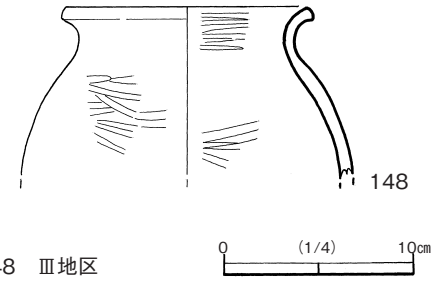
第38図　出土土器実測図（14）

か不明瞭である。左側面に紐通しとみられる穴が２つ穿ってあり、欠損している右側面にも同様な穿孔があったとみられる。全体にナデ調整を施し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は上面が黒斑により黒色、下面はにぶい黄橙色である。残存長2.7㎝、幅4.2㎝、最大厚1.3㎝。県内出土の分銅形土製品としては最も小型の部類とみられる。

165は弥生土器の甕胴部片を加工した土製円盤である。長さ6.7㎝、幅5.3㎝、厚さ0.9㎝。縁辺部分に剥離調整を行い、平面長円形に整形している。

（5）石器（第42～45図　図版30～32）

今回の調査では石鏃、石包丁、紡錘車、砥石、磨製石剣、石斧、敲石・磨石などが出土した。これらの石器の組成をみてみると、伐採用の蛤刃石斧は出土するものの、加工用の片刃石斧は出土していない。また角閃石安山岩の石材や、敲石、磨石が多く出土していることなどが特徴的である。



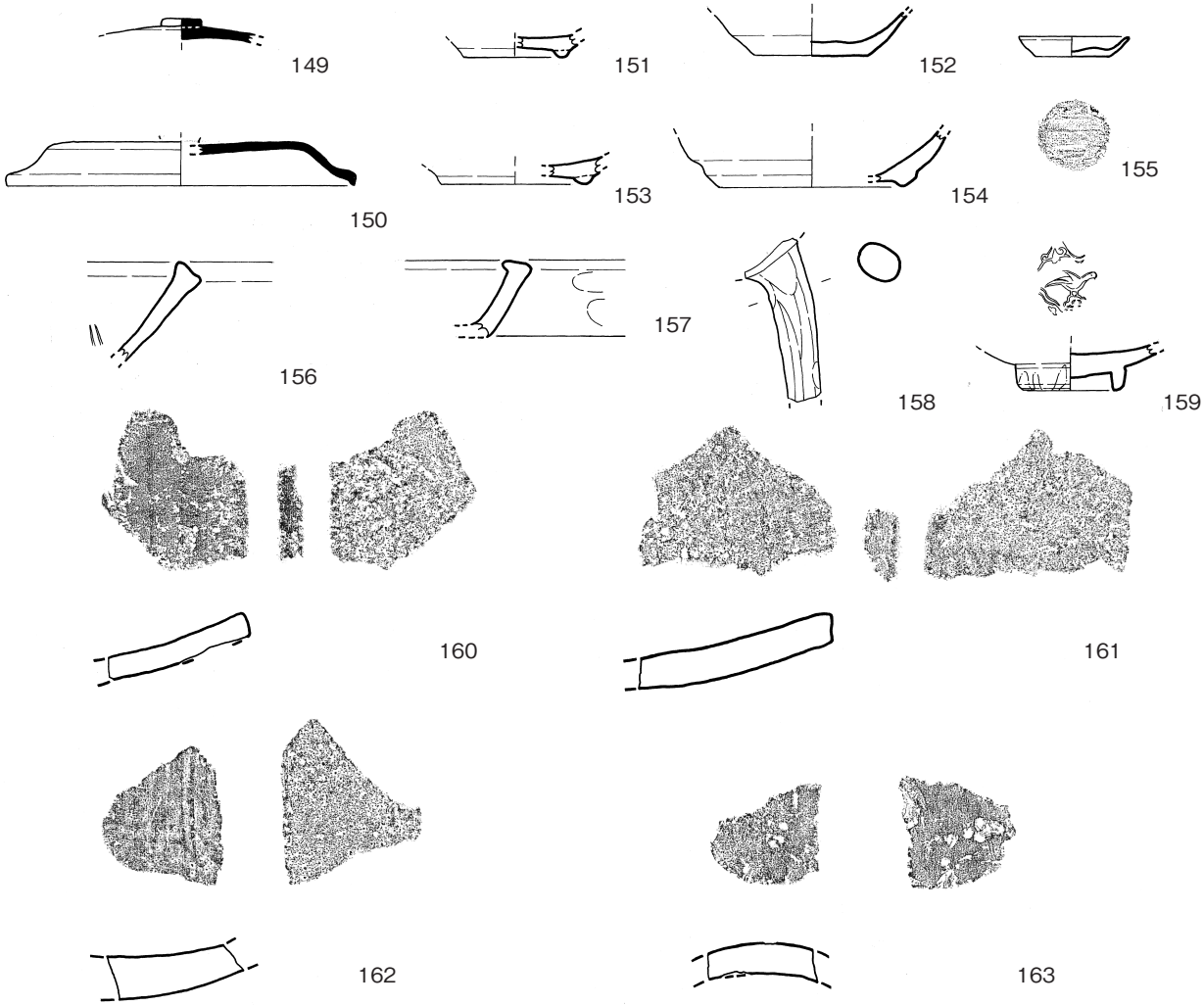
148　Ⅲ地区

第39図　出土土器実測図（15）

166～174、176～184は打製石鏃である。いずれも無茎式で、基部の形態はわずかに凹むものもあるが、基本的には平基式とみられる。平面形は二等辺三角形、正三角形の２種類に分けられる。長さは1.5～３㎝で2㎝前後が中心である。175、185、186は石鏃より大型で厚みがあることから尖頭器の一部とみられる。187は石錐。先端部を欠損している。石材は166が姫島産黒曜石、172、175、180、181、184、186、187が安山岩、他は玄武岩である。

188～191は石包丁である。188は両端を欠失するが、平面形は三角形とみられる。厚みは0.2～0.5㎝。191は残存長6.05㎝、厚み0.8㎝で形状から大型の石包丁片である。いずれも鋭利な片刃で、刃部には使用による擦痕が認められる。石材は188は泥岩、189は砂岩、190、191は玄武岩である。

192、193は角閃石安山岩製の紡錘車である。193は径5.3㎝、厚み0.7～0.8㎝、重量30.4ｇをはかる。

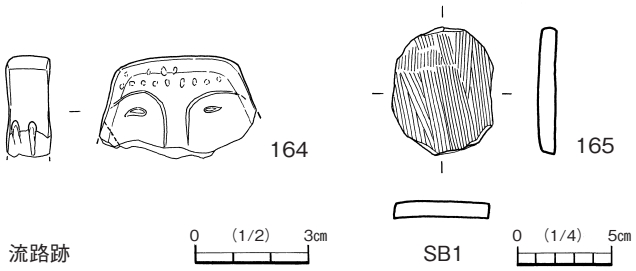


149～151・153・158　谷部　　152　流路跡　　154　Ⅱ－１地区
155～157・163　集石遺構　　159～162　Ⅰ－２地区

第40図　出土土器実測図（16）・瓦実測図

192は石製紡錘車の破片であるが、ほぼ193と同じ大きさであったとみられる。

195は石錘である。長さ6.95㎝、幅4.1㎝、厚さ1.95㎝、重量44.8ｇ。平面形はラクビーボール状、断面形はレンズ状で中央が最も厚く、研磨による鎬が認められる。両側辺には紐通しの溝が巡っている。研磨の状態も良く丁寧なつくりをしている。石材は角閃石安山岩製。SB１出土。



第41図　出土土製品実測図

196は塩基性片岩製の砥石である。破損するが、柱状の砥石であったとみられ、残存する２側面を使用している。仕上げ砥とみられる。SB３出土。

197、198は磨製石剣である。198は石剣の柄部で、刃部にかけてゆるやかな関を作り出している。刃部から茎部にかけて研磨による鎬が明瞭に残る。刃部は幅3.1㎝で断面菱形、柄部は幅2.1㎝で断面は中央に鎬がある長方形である。197は明瞭な鎬があり石材が同一なことから、石剣の刃部片と判断した。197はⅠ－１地区流路跡、198はⅠ－２地区表面採集である。いずれも砂岩製。

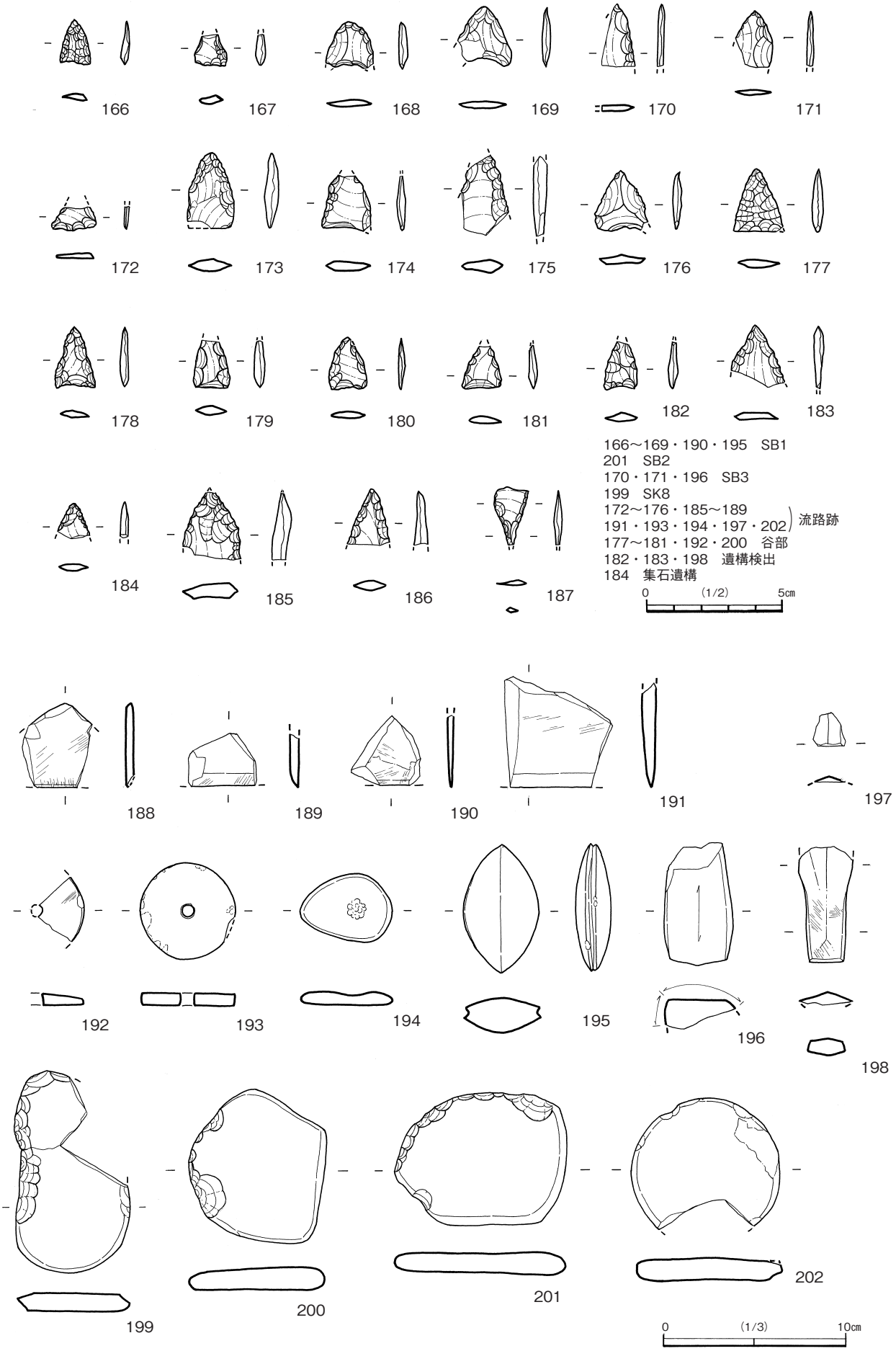
194、199～202は角閃石安山岩の扁平な石材で、その一部に初期加工の痕跡が残るものである。194は石材中央に穿孔のための擦痕が認められる。199～201は石材の縁辺に敲打痕が認められることから製品の初期加工を行ったものとみられる。202は成形時の敲打痕が縁辺の一部に残るもののほぼ円形に成形している。これらの石材は基本的には紡錘車の未製品と考えられるが、195の石錘なども同じ石材を使用していることから、さまざまな製品に使用されたことがうかがえる。なお角閃石安山岩の石材は未加工の状態でも調査において確認されており、未製品、製品とあわせて集落内での製作が行われたと判断される。

203～208は伐採石斧である磨製蛤刃石斧である。203、204は完形品で、重量はそれぞれ550ｇ、238ｇ。208は再加工のための敲打痕や研磨痕が認められる。石材はいずれも凝灰岩である。

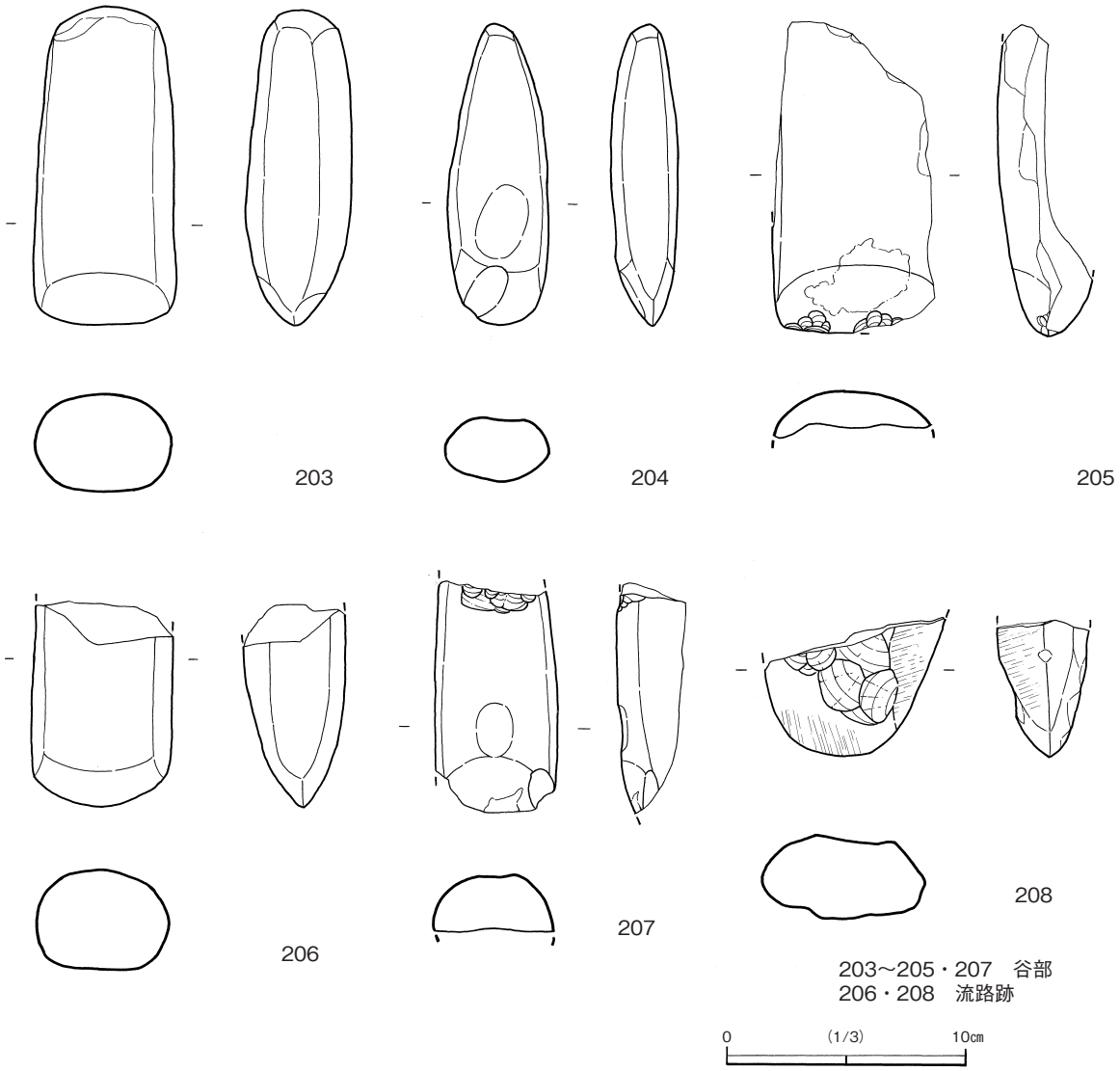
209～220は　敲石、磨石である。石材はいずれも凝灰岩で、自然の円礫を使用している。石材の片面または両面に敲打による凹みを持ち、石材の端面（複数面もあり）を敲石として使用したための敲打痕が認められる。石材は扁平なものを中心に、円柱形、撥形などの円礫を使用している。このうち213は、下端の平坦面を使用面としているが、この部分は他に比べ赤色化している。赤錆の嵌入または被熱によるものと考えると、鉄器が出土していることを考慮すれば、鍛冶具として利用された可能性もある。ただ213は流路跡出土で鉄器または鍛冶関係遺物との共伴ではないことや、自然科学的分析を行っていないことから、今後のさらなる検討が必要であろう。

（６）骨角製品（第46図　図版30）

221はⅠ地区谷部の堆積土から出土した骨角製品で、その形状から鏃とみられる。煤が付着しており詳細な表面観察が行えなかったものの、一部に骨の組織痕が認められる。さらに外面には光沢痕があることや、やや身が内湾していることから、角の一部を加工していると判断される。鏃は凹基式で平面形は二等片三角形。煤が付着するが表面の加工痕はわずかに確認できる。長さ2.4㎝、幅2.0㎝、厚み0.45㎝、重さ1.1ｇ。



第42図　出土石器実測図（1）



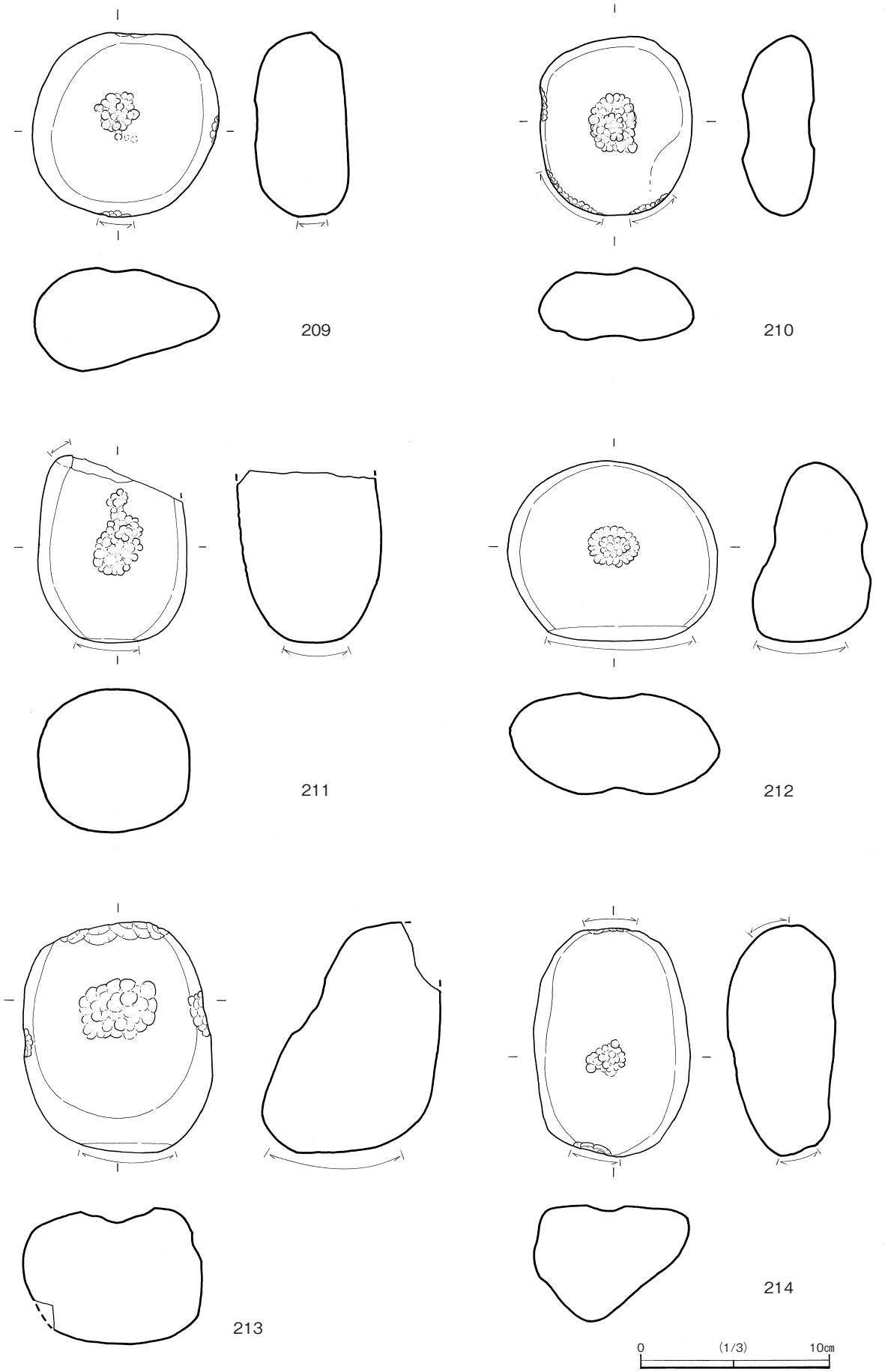
第43図　出土石器実測図（２）

（７）鉄器（第47図　図版32）

今回の調査ではⅠ地区から14点の鉄器が出土した。222～231はSB１、232、234はⅠ地区包含層、233、235は遺構検出時のものである。なおSB１出土のうち、224、226、228、230、231については、SB１の遺構検出（埋土上面を精査中）に確認されたものであり、厳密にはSB１内出土とは区別されるが、埋土上面には他の時期の遺構は確認されなかったこと、弥生時代中期のSB１内から同様な鉄器片が出土していることなどから、ここではSB１出土として取り扱うこととする。また232、234は包含層出土の遺物がほとんど弥生時代中期であることから、この時期に属する鉄器である可能性が高い。233、235は遺構検出時のものであり、時期については不明である。

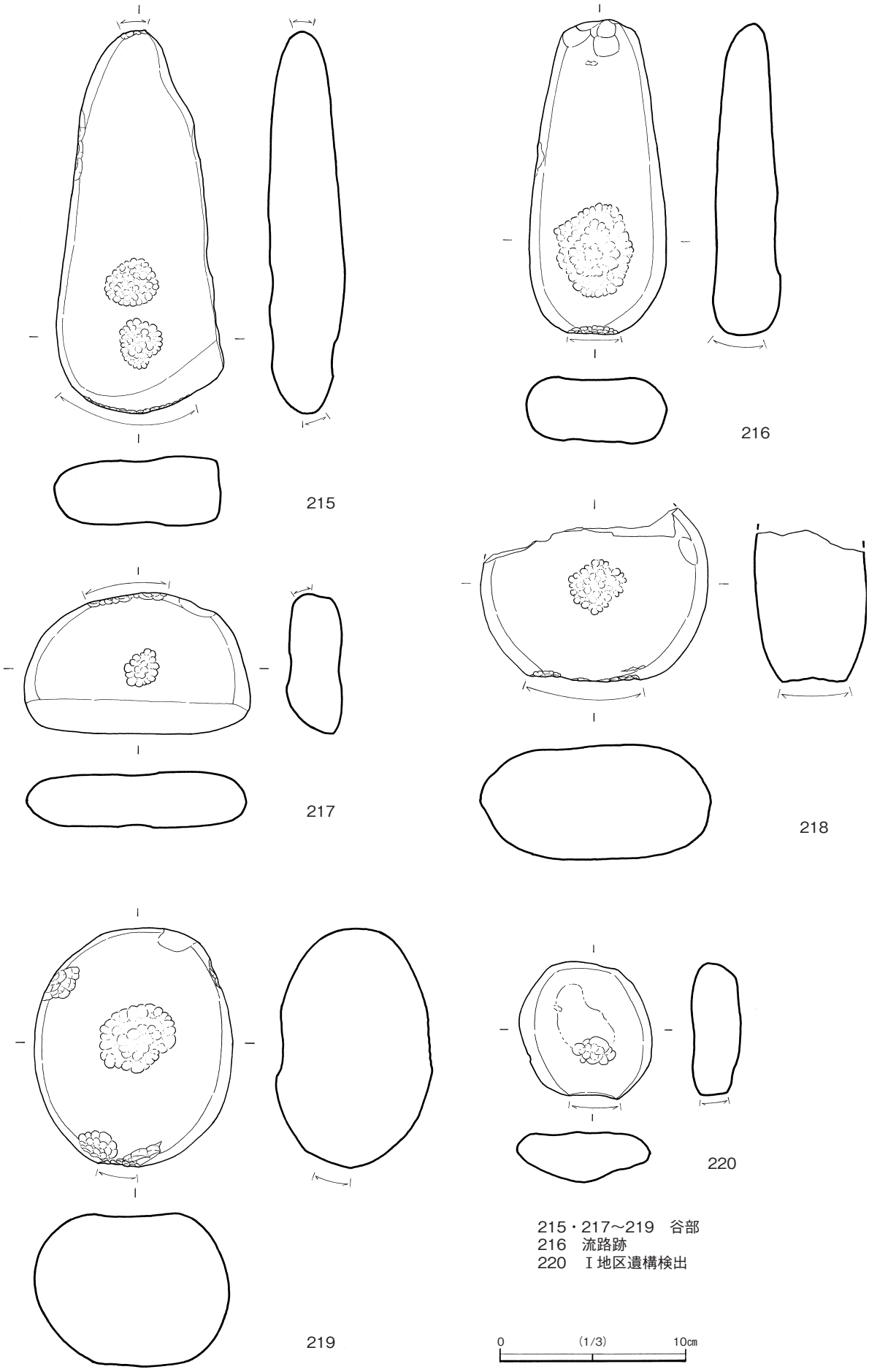
出土した鉄器のうち、破片であるため製品の特定が難しい鉄片が６点出土した。これらの特徴として、平面が長方形であること、大きさ、厚みが似通っていることがあげられる。また側辺は破断面というよりは切断面に近い場合もあり、鉄器製作過程で切断された鉄板の可能性を指摘しておきたい。

222は小型の袋状鉄斧。折り曲げた袋部の一部を欠損している。長さ5.0㎝、袋部幅2.3㎝、刃部幅3.2㎝、重さ29.2ｇ。大きさから加工用の手斧として使用されていたとみられる。223は鉄鏃などの茎部片。



209～214　流路跡

第44図　出土石器実測図（3）

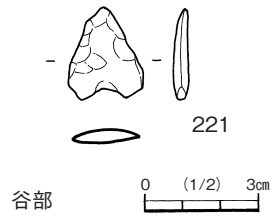


215・217～219　谷部
216　流路跡
220　Ⅰ地区遺構検出

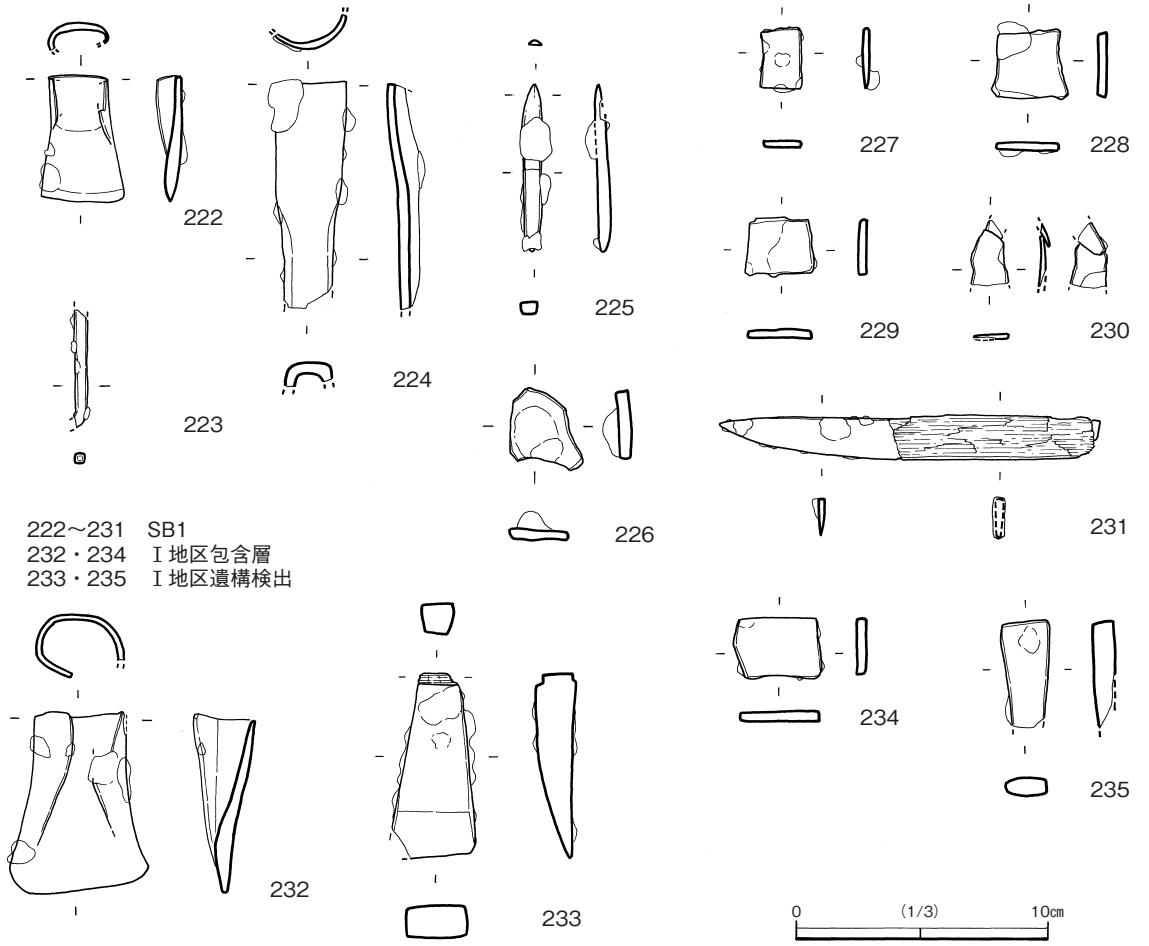
第45図　出土石器実測図（4）

残存長4.7㎝、幅0.4～0.5㎝、下端がわずかに屈曲している。224は鑿とみられ、刃部と袋部の一部を欠損している。身部は方形。残存長8.9㎝、袋部残存幅2.7㎝、身部幅1.9㎝。231は刀子である。完形で木質が残存しており、この部分が柄部とみられる。長さ15.0㎝、 刃部長6.8㎝、柄部長8.2㎝。225は小型の鉈である。完形で、茎部から刃部へはわずかに外反している。刃部は先端から1.8㎝にわたり刃をつけており、断面は半円形に近い。長さ6.6㎝、刃部幅0.7㎝。226～230は鉄板片である。226は不整形の鉄板片で長さ3.2㎝、幅3.0㎝。228は長さ3.8㎝、幅3.0㎝。227は下端が刃先のような形状であるが、両側片が原形を保っているとみられるので、他と同様に鉄板片と判断した。長さ2.5㎝、幅1.7㎝。229は長さ2.3㎝、幅2.8㎝。230は２つの鉄片が錆着している。いずれも0.3㎝と薄く、わずかに反っている。長さ2.6㎝、幅1.5㎝。

232は袋状鉄斧である。刃部にかけて撥形に開き、重厚な刃部を有する。袋部の一部を欠損するが、ほぼ完形。長さ7.2㎝、袋部幅3.5㎝、厚み2.5㎝、刃部幅5.4㎝。重さ94.1ｇ。233は鉄斧である。撥形や、大きさ、厚手の片刃であることから加工用の手斧として使用されていたとみられる。長さ7.3㎝、刃部最大幅3.2㎝、重さ99.8ｇ。234は鉄板片で、長さ2.4㎝、幅3.4㎝。235は形状から楔とみられる。先端部は欠損しており、残存長4.3㎝、最大幅1.9㎝。



第46図　骨角製品実測図



第47図　出土鉄器実測図

Ⅳ　まとめ

ここでは発掘調査の成果から、真尾猪の山遺跡の時期や特徴、平成16年度調査の井ノ山遺跡との関連等について述べてまとめとしたい。

縄文時代

今回の調査では早期、後期の土器が出土した。遺構に伴うものではないが、井ノ山遺跡でも後期、晩期の土器が出土していることから、周辺丘陵部には縄文時代集落が存在する可能性が高いであろう。特に注目されるのが、早期の押型文土器が出土したことである。井ノ山遺跡では草創期の有舌尖頭器が確認され、佐波川右岸の小野中学校敷地遺跡でも早期の押型文が出土しており、佐波川中流域における縄文時代の最も古い段階の資料を新たに得ることができた。防府市域では他に大将軍、台ケ原、台道繋枝砂丘の各遺跡で早期押型文土器が出土し、これらが分布する佐波川流域から防府平野の縁辺丘陵上はいち早く縄文人の居住が始まったとみられ、彼らの生活に適した環境であったことがうかがえる。

弥生時代

真尾猪の山遺跡が立地する佐波川左岸の丘陵は、花崗岩由来の崩落堆積物による砂質土を基盤とし、地山内の礫も多く露頭した緩斜面であるため、一見居住には不適切な地形とみられたが、竪穴住居跡をはじめとする弥生時代中期の集落跡が検出された。集落は南北を谷に挟まれた細い尾根筋に４軒の竪穴住居跡（１軒は柱穴の配置から復元）からなり、その他の柱穴群からさらに住居跡があった可能性もある。また丘陵は現地形から判断して、小野ライスセンターがある方向に伸びていたとみられる。小野ライスセンター周辺でも弥生中期の土器、分銅形土製品などが採集されていることから、佐波川近くまで集落が広がっていたことが見て取れる。

遺構の特徴として、竪穴住居跡は平面形が楕円形を呈し、柱穴の配置は不規則である。これは礫を多く含む不安定な地山によるところが大きい。土坑はいずれも浅いものが多く、貯蔵用土坑とみられるものはない。廃棄土坑もほとんどなく、かわりに流路、谷部へ多くの土器を廃棄していることが特徴的である。なお谷部には石列が設けられ、これを境として土器廃棄を行っていることから、石列は居住範囲と廃棄場所との区画であったと推定される。

出土した弥生土器は、壺、甕、鉢、高坏の基本構成からなり、在地系の垂下口縁壺、くの字口縁の甕と、須玖系の鋤先口縁壺、跳ね上げ口縁甕が中心となる。流路跡や谷部堆積土ではこれに加えて、内折口縁壺、逆Ｌ字口縁や口縁下に突帯を有する甕など古い様相を示す土器もあるが、主体は中期後半から末と判断される。

出土遺物で注目されるのが鉄器である。ＳＢ１出土の10点を含めた弥生時代鉄器が12点出土した。県内において中期段階で一つの住居跡から出土する点数としては最も多い部類に入る。鉄器の組成としては袋状鉄斧、鉋、鑿、刀子など加工用製品であり、これに対して石器は伐採用石斧はあるものの、加工用の片刃石斧は出土しなかった。このことは石器の鉄器化の一つの様相を示しており、西部瀬戸内における鉄器の普及を考える上で良好な資料である。また具体的な製品が判断できない鉄板片については、鉄器製作時における破片とみることができる。ＳＢ１内の作業台や流路跡出土の敲石（213）

とともに鍛冶を想起させる資料であるが、詳細については分析等による検討が必要とみられ、ここでは可能性として指摘しておきたい。

次に隣接する井ノ山遺跡との関連について触れてみたい。本遺跡の北側に隣接する井ノ山遺跡は前期末から中期末までの集落跡であり、本遺跡とは松尾山から佐波川へむかって派生した丘陵のうち、小さな谷によって隔てられた位置関係にある。時期的には井ノ山遺跡のほうがやや古い時期から集落が形成されたものの、両者は立地や構造も似通っており、一連の集落跡と判断してよいだろう。特徴的であるのが、井ノ山は前期末から中期前半に青銅器（銅鑿）、真尾猪の山は中期後半から末に鉄器を所有していたことにある。金属器の所有は他集団との関係において優位性を保つことであり、鉄器および鉄素材の確保･入手には、流通のための他地域とのネットワークが必要となってくることから、それが可能な拠点的な集落であったことを示している。県内の代表的な鉄器出土遺跡である下関市下七見、防府市井上山、周南市追迫、岡山、小谷、秋芳町中村などは、いずれも各地域の拠点的な集落であることから、真尾猪の山遺跡も地域における中心的、先進的な集落であることを物語っている。遺跡の広がりとしては、東側は調査区外の丘陵高位まで及び、南側はⅢ地区からつながる標高80mの丘陵上に高地性集落が予想されていることから、広範囲に及んでいることが推定されよう。特に南側の高地性集落の調査が行われ時期等が明らかになれば、井ノ山、真尾猪の山、さらには弥生時代墓地とみられる下和字遺跡を含めた佐波川左岸一帯の大きなまとまりの中で、集落の変遷や構造等が解明されていくと考えられる。

古代～中世

谷部堆積土およびⅠ－２地区から８世紀の須恵器、中世前期の土師器、青磁、瓦が出土した。これらの遺物に伴う各時期の遺構が所在していたとみられるが､集石遺構以外確認されていないことから、消失したか又は調査区外の東側高位に存在する可能性がある。遺跡が立地する松尾山には、８世紀末に創建され戦国期に焼失したとされる松尾山天皇院光明寺があり、山腹には12坊が立ち並んだとされることから、今回の出土遺物や集石遺構との関連性が考慮される。しかしながらそれを裏付ける資料に乏しいため、今後の資料増加を待って検討していく必要があろう。

以上、今回の調査は、佐波川中流域の歴史を考える上で多くの資料を得ることができた。遺跡の立地する丘陵高位から周囲を見渡せば、佐波川上流（徳地方面）から右岸、さらに下流域の防府平野や、矢筈ケ岳、そして阿弥陀寺のある牟礼地区へ抜けるルートが一望できる良好の地にある。こういった恵まれた地理的条件にあって、縄文時代早期から人々が居住し、弥生時代には拠点的な集落が営まれ、古代以降も地域の歴史に大きな役割を果たした場所であったと考えられる。

〈参考文献〉

山口県埋蔵文化財センター『大将軍遺跡』 1992年。
山口県埋蔵文化財センター『井ノ山遺跡』 2005年。
森田孝一「佐波川中流域出土の分銅形土製品 －真尾猪の山遺跡の表採遺物について－」『山口考古』第20号 山口考古学会 2000年。
村上恭通『倭人と鉄の考古学』青木書店 1999年。
川越哲志編『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』 2000年。

図　版

遺跡遠景（西から）

図版　2

遺跡近景（南から）

調査区　全景

Ⅰ地区　全景（西から）

図版　4

Ⅰ地区　ＳＢ１

Ⅰ地区　ＳＢ２・３と流路跡

Ⅱ地区　全景（北西から）

Ⅲ地区　全景（西から）

図版　6

ＳＢ１　完掘状況（西から）

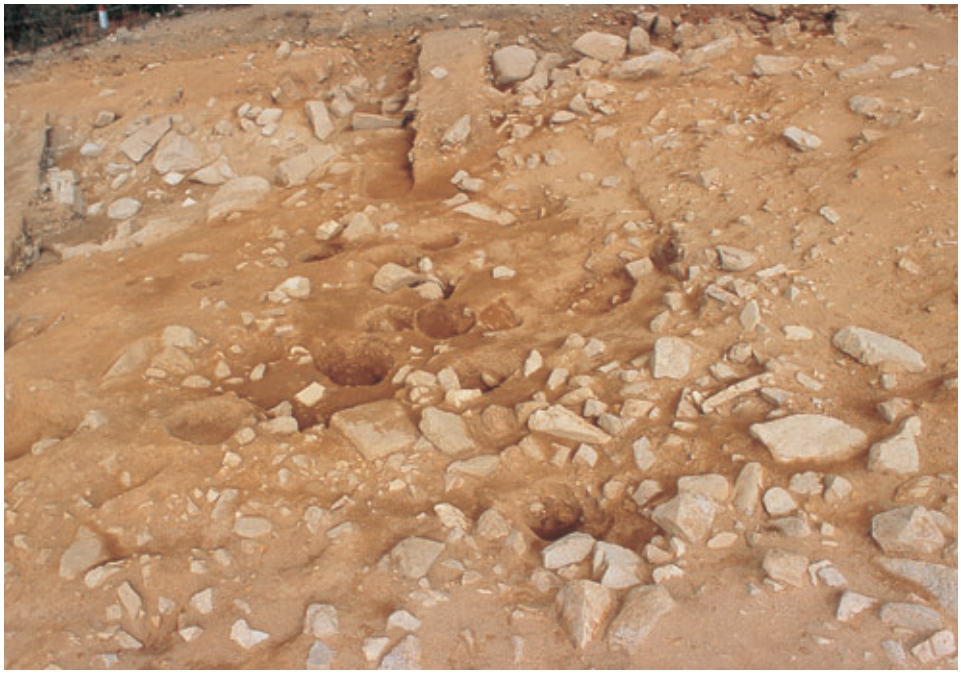
ＳＢ１　土器出土状況①（西から）

ＳＢ１　鉄器出土状況（西から）

ＳＢ１　土器出土状況②（南西から）

ＳＢ１　土器出土状況③（西から）

ＳＢ２　完掘状況（西から）



ＳＢ２　完掘状況（南から）

ＳＫ25　完掘状況（西から）

ＳＫ26　完掘状況（西から）

図版　8

ＳＢ３　完掘状況（西から）

ＳＢ３　完掘状況（北から）

ＳＢ３　土器出土状況（北から）

ＳＢ３　作業台検出状況（西から）

ＳＢ４　完掘状況（西から）

流路跡東側柱穴群（南から）

ＳＫ９周辺柱穴群（北から）

ＳＫ４・５・６・14　完掘状況（西から）

ＳＫ３　完掘状況（西から）

ＳＫ11　完掘状況（北から）

ＳＫ28　完掘状況（北から）

ＳＫ20　完掘状況（西から）

ＳＫ13　完掘状況（西から）

ＳＫ15　完掘状況（南から）

ＳＫ10　土器出土状況（南から）

ＳＫ７・８　完掘状況（西から）

ＳＫ７　土器出土状況（西から）

ＳＫ18・24　完掘状況（北から）

ＳＫ９・16　完掘状況（西から）

ＳＫ17　完掘状況（西から）

ＳＫ22　完掘状況（西から）

ＳＫ23　完掘状況（西から）

ＳＫ19　完掘状況（東から）

図版　12

流路跡（北西から）

流路跡　東半（西から）

流路跡　遺物出土状況（北から）

流路跡　土器出土状況①（北から）

流路跡　土器出土状況②（北から）

流路跡　土器出土状況③（西から）

流路跡　土器・紡錘車出土状況（北から）

図版　14

谷部　全景（南東から）

谷部　石列検出状況（西から）

谷部　遺物出土状況（南から）

谷部　土器出土状況①（東から）

谷部　土器出土状況②（西から）

谷部　土器出土状況③（東から）

谷部　土器出土状況④（北東から）

集石遺構　調査前（北から）

集石遺構　検出状況①（北から）

集石遺構　検出状況②（西から）

集石遺構　検出状況③（東から）

集石遺構　土層断面①（南から）

集石遺構　土層断面②（東から）

ＳＤ２・３・４　完掘状況（東から）

ＳＫ29・30　完掘状況（西から）

Ⅱ地区　完掘状況（南西から）

Ⅱ－１地区　完掘状況（南から）

Ⅱ－２地区　完掘状況（南西から）

Ⅱ－１地区　包含層完掘状況（北から）

Ⅱ－１地区　土器出土状況①（北から）

Ⅱ－１地区　溝状遺構（北から）

Ⅱ－１地区　土器出土状況②（東から）

Ⅱ－１地区　トレンチ土層断面（西から）

Ⅱ－１地区　トレンチ完掘状況（西から）

Ⅱ－２地区　ＳＫ群（西から）

Ⅱ－２地区　東壁土層断面（西から）

Ⅲ地区　近景（南から）

Ⅲ地区　完掘状況（南から）

出土土器①

9

10

11

12

14

15

16

17

18

13

20

19

22

出土土器②

21

24

23

25

26

28

27

29

41

42

43

44

47

48

49

45

46

50

出土土器③

52

54

55

51

53

56

57

58

60

64

65

67

59

61

62

78

出土土器④

63

68

69

71

72

73

74

75

76

66

70

77

98

出土土器⑤

79

80

81

83

84

82

85

86

87

88

89

90

91

92

93

96

97

94

出土土器⑥

95

101

102

104

105

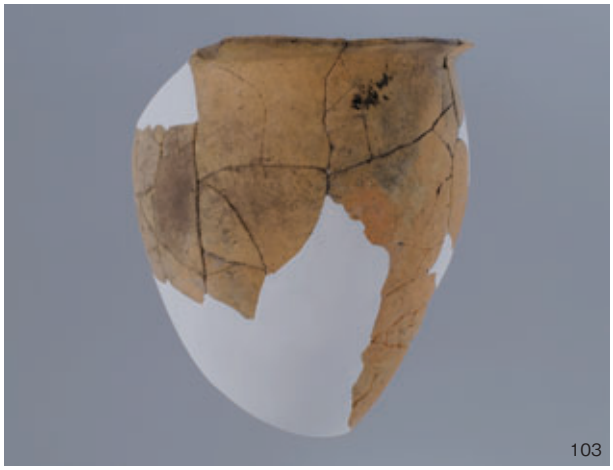
107

108

109

110

99


103

100

106

出土土器⑦

111

112

113

114

115

120

116

117

118

119

121

123

124

122

125

126

127

130

132

出土土器⑧

128

129

133

131

134

136

135

137

138

139

140

141

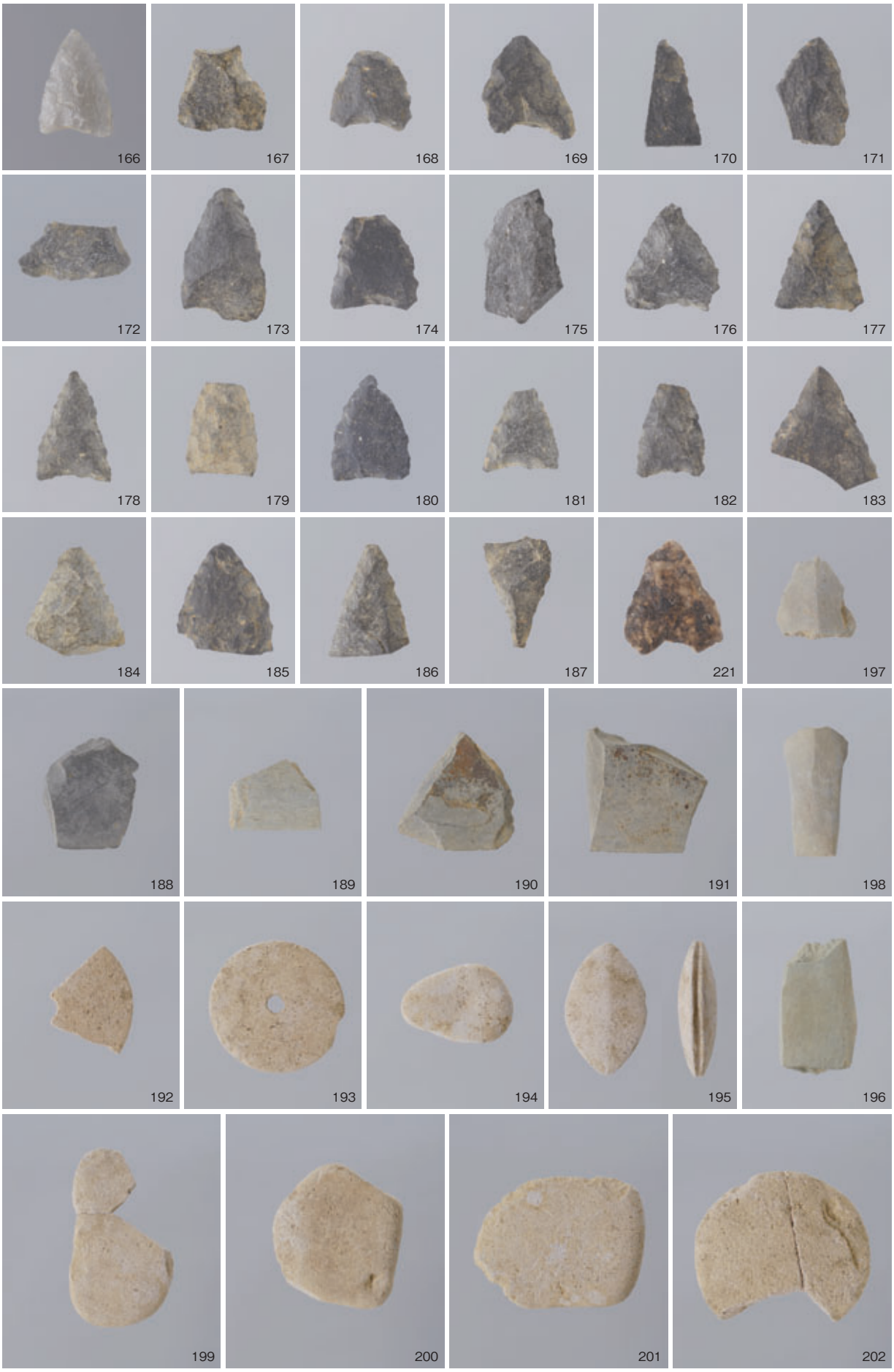
142

146

出土土器⑨

147
143
145
144
149
150
151
152
155
153
154
156
157
158
159
160
161
162
163
148
165
164

出土土器⑩・瓦・土製品


166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
221
197
188
189
190
191
198
192
193
194
195
196
199
200
201
202

出土石器①・骨角製品

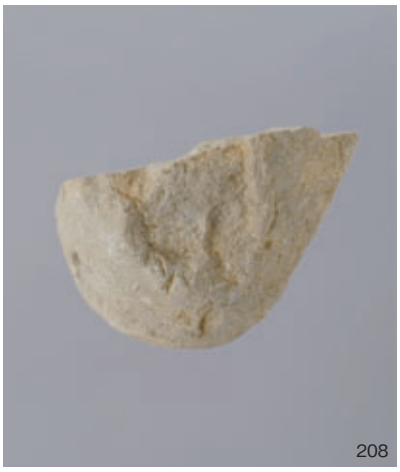
203

204

205

206

207


208

209

210

211

213

214

215

出土石器②

217
212
218
216
219
220
222
224
225
223
227
228
229
230
232
233
231
226
234
235

出土石器③・鉄器

報　告　書　抄　録

ふりがな	まなおいのやまいせき
書名	真尾猪の山遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第62集
編集著者名	谷口哲一　吉中雅信　森下穏雄　川本　晃　山本寛子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	山口県山口市春日町３番22号　TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2007年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
真尾猪の山遺跡 （まなおいのやまいせき）	山口県 （やまぐちけん） 防府市 （ほうふし） 大字真尾 （おおあざまなお）	35206		34°6′45″	131°36′23″	20060616 ～ 20061227	5,600	農道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真尾猪の山遺跡	集落跡	縄文 弥生 古代、中世	包含層 竪穴住居跡　４軒 土坑　35基 柱穴　268個 溝状遺構　６条 石列　１列 集石遺構　１基	縄文土器 弥生土器 土製品 石器 骨角製品 鉄器 須恵器 土師器 瓦 陶磁器	縄文時代早期、後期の土器が出土。 弥生時代中期の集落跡で、流路跡や谷部からは多くの弥生土器が破棄された状態で出土した。また遺物のうち鉄器や分銅形土製品が注目される。

要約	弥生時代中期の集落跡。花崗岩由来の崩落堆積物による砂質土を基盤とした丘陵上であるため、地山内の礫も多く露頭し、一見居住には不適切な地形とみられたが、竪穴住居跡４軒、土坑35基、柱穴群が検出された。集落に隣接するように谷や自然流路跡があり、この中に弥生土器が破棄された状態で出土した。また袋状鉄斧、鉇、鑿などの鉄器がまとまって出土したことは、県内において例が少なく、当時の石器から鉄器への移行や組成を考えるうえで良好な資料である。その他集落祭祀にかかわる小型の分銅形土製品の出土も注目される。真尾猪の山遺跡は、鉄器保有や遺跡の立地などから考えて、佐波川中流域の左岸における拠点的集落であったことがうかがえる。その他の時代として、縄文時代早期押型文土器が出土し、佐波川中流域左岸におけるもっとも古い資料のひとつとなった。また古代、中世の遺物も散見されたことから、遺跡が立地する松尾山麓にあったとされる天皇院光明寺跡（８世紀創建、戦国期に焼失）との関連が指摘されるが、それを裏付ける資料を得るまでには至っていない。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第62集

真尾猪の山遺跡

2007年３月

編集・発行　財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号

印　　刷　瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927　山口県下関市長府扇町９番50号